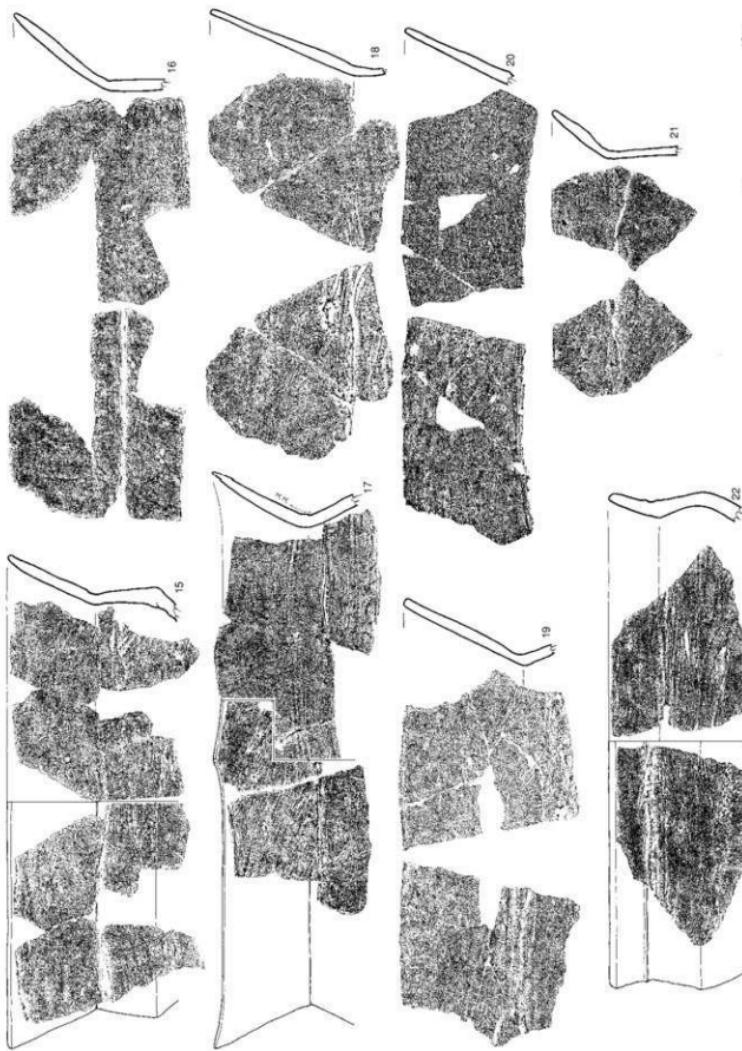
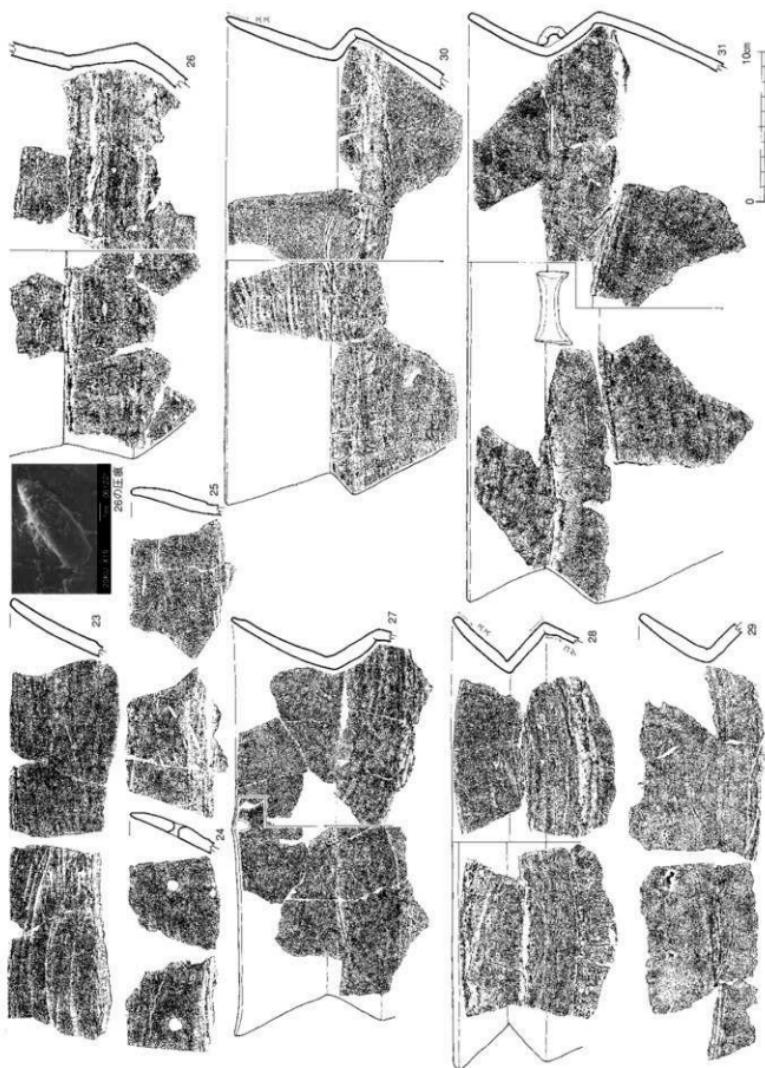


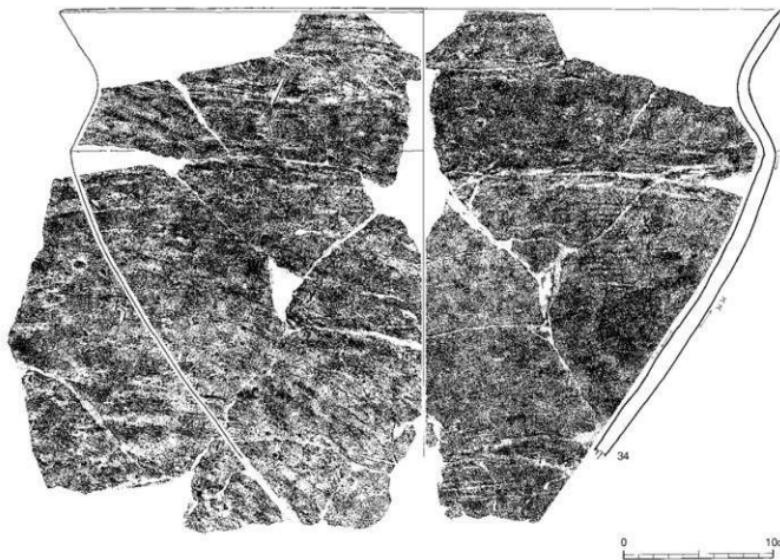
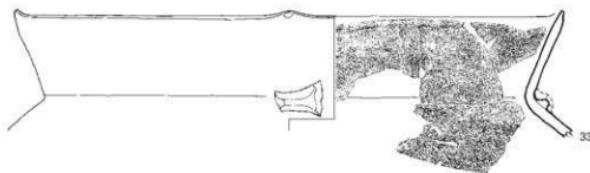
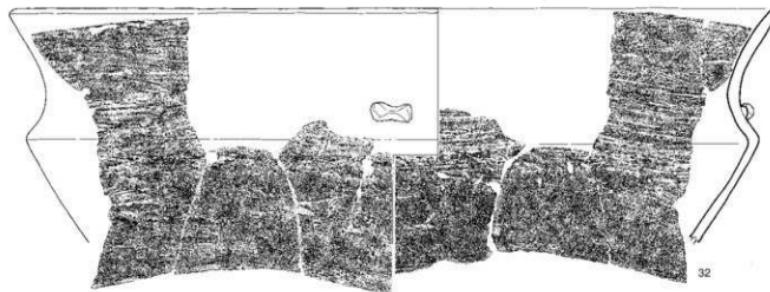
第110图 遗物实测图(3) A1型土器

10cm



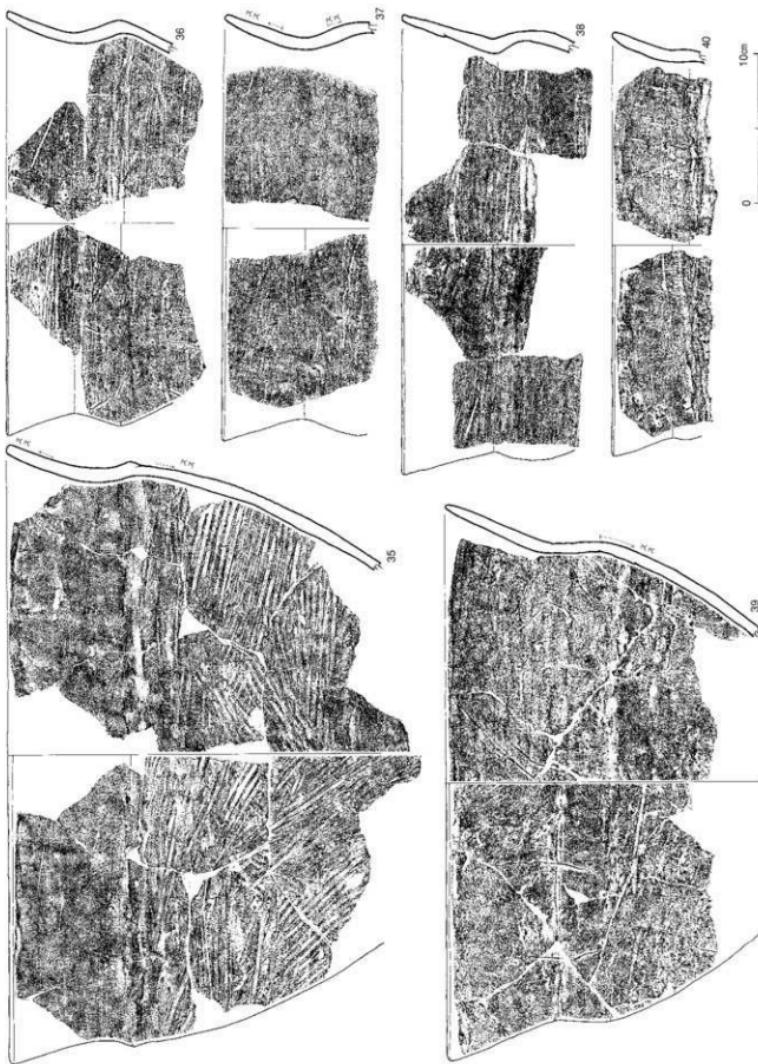
第111図 遺物実測図 (4) A1段土器④・A2段土器①





第112図 遺物実測図（5）A2類土器②

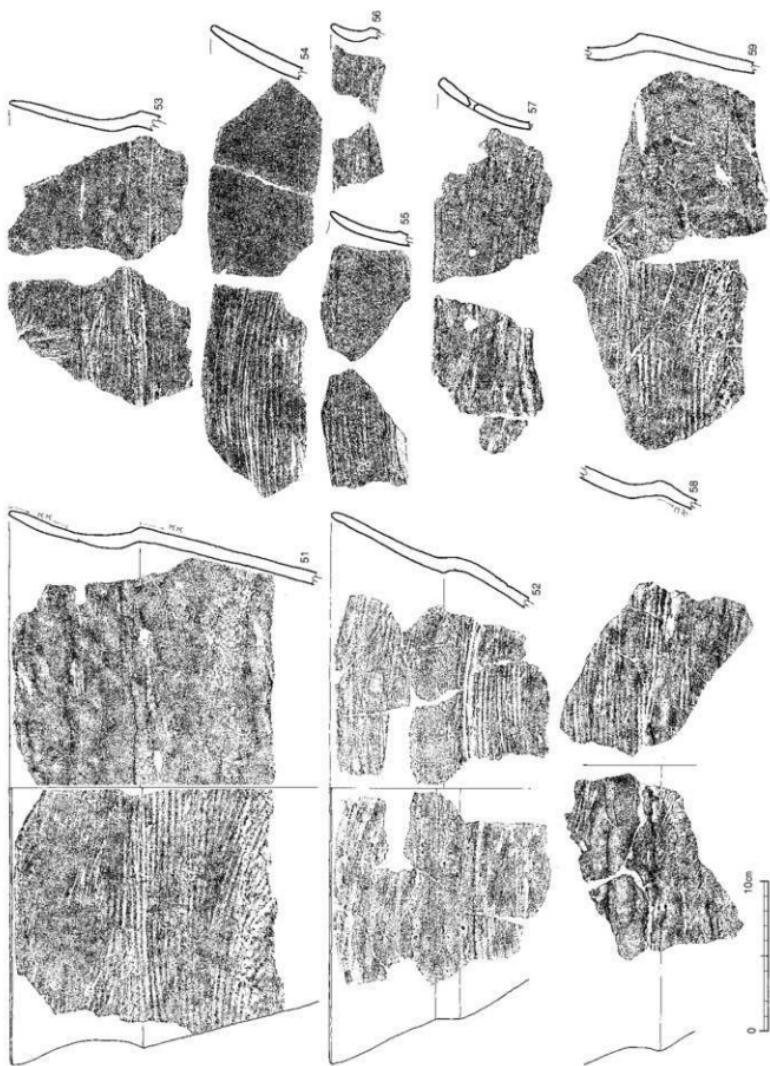
第113圖 遺物測量圖 (6) A3類土器 ①

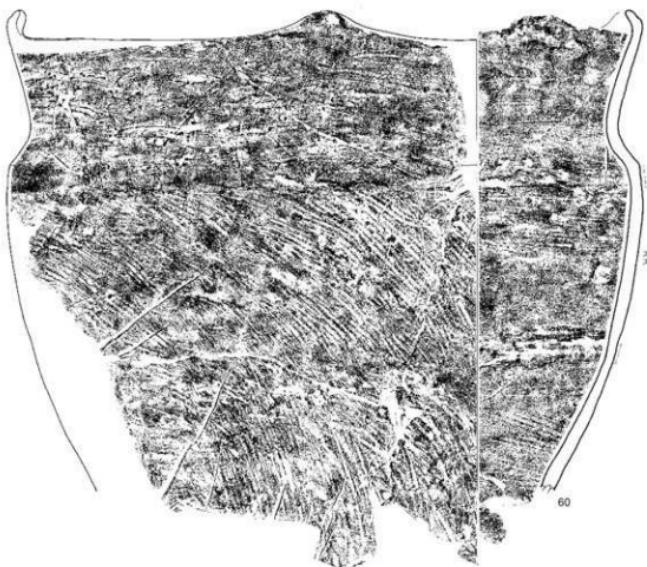


第114图 陶物实测图 (7) A3陶土器 2

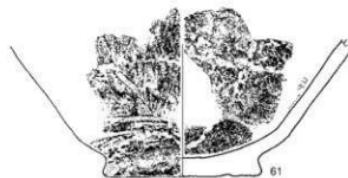


第115图 陶物实测图 (8) A3陶土器③

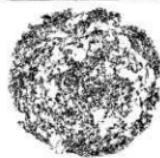




60



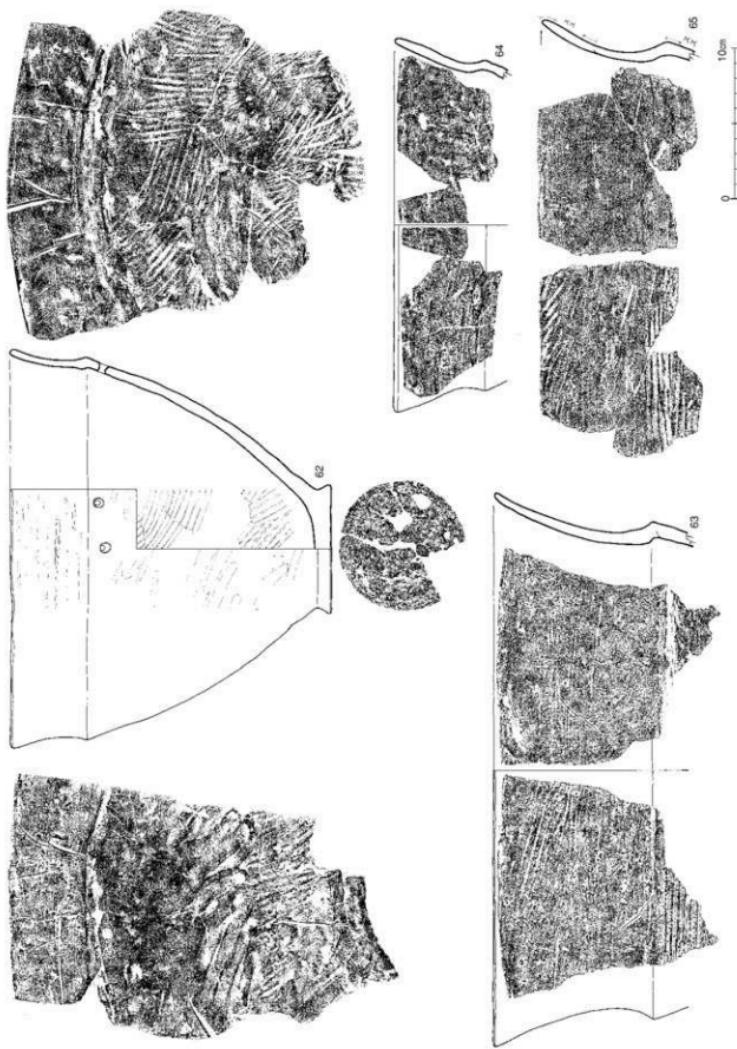
61



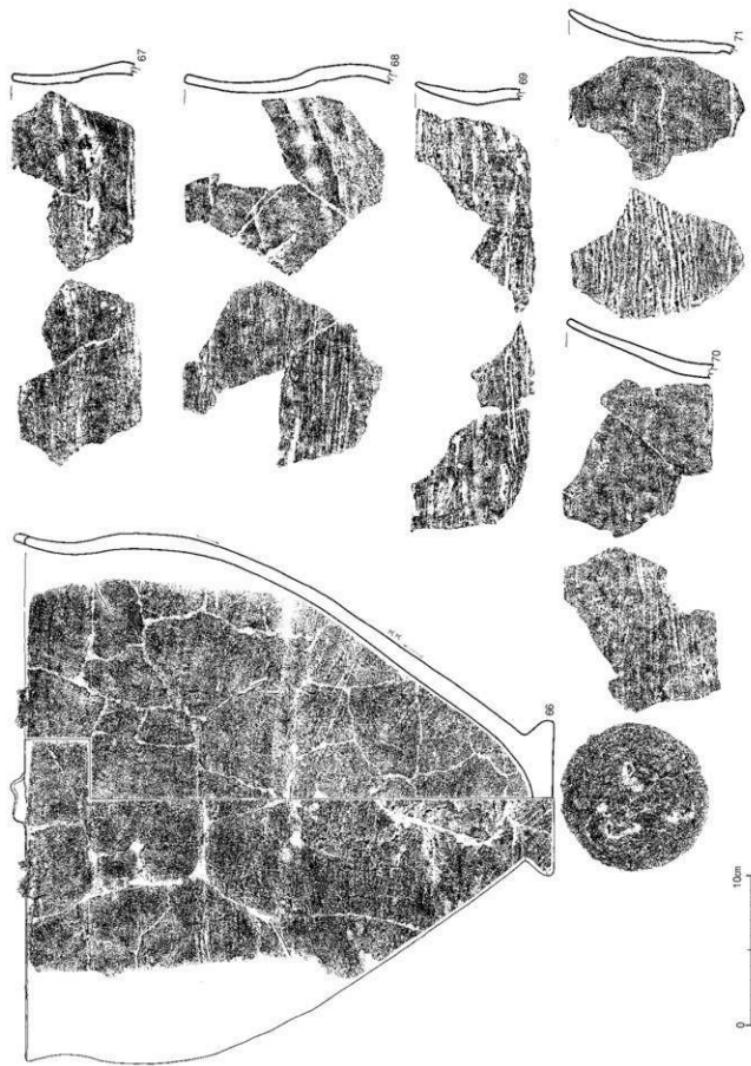
0 10cm

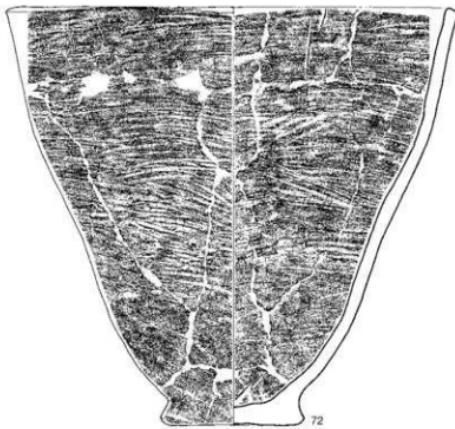
第116図 遺物実測図（9）A3類土器④

第117図 遺物実測図(10) A3類土器⑤

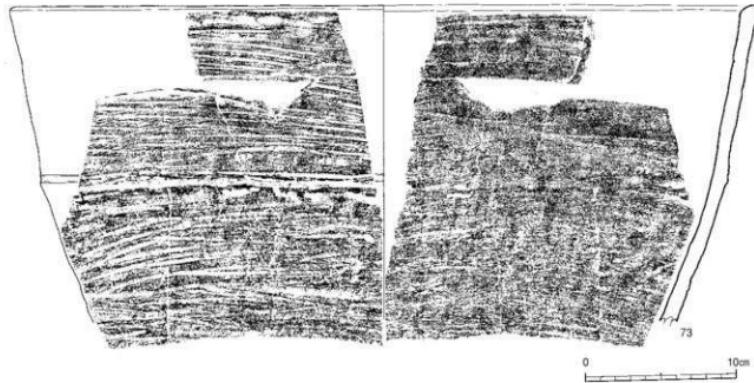
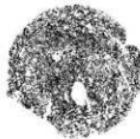


第118図 遺物実測図 (11) A3類土器⑤





72



0 10cm

第119図 遺物実測図 (12) A4類土器①

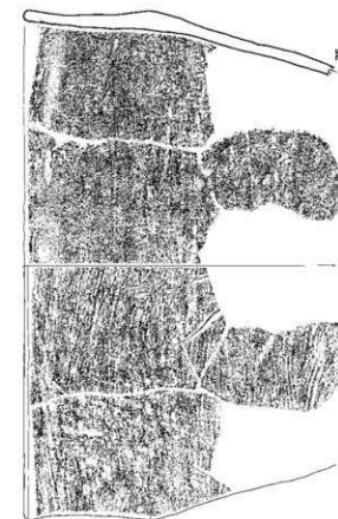
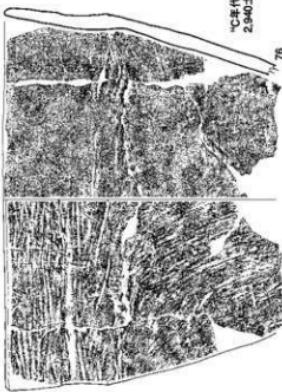
第120图 遗物实测图 (13) A4陶土器?

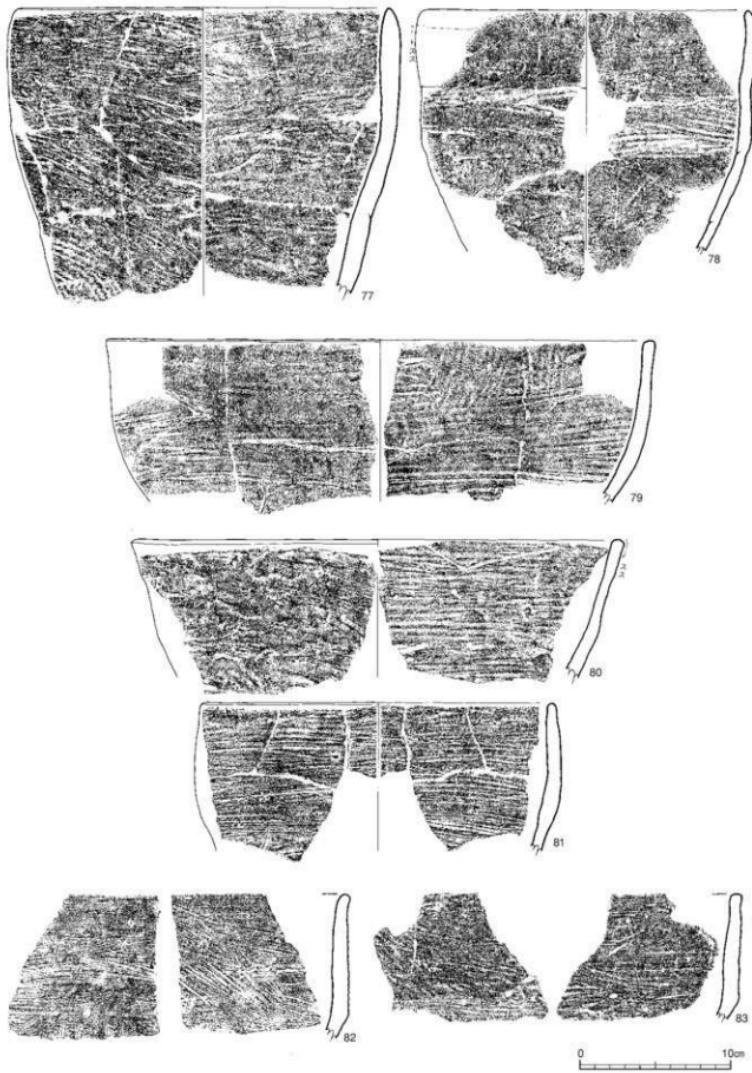
10cm

0

¹⁴C半校正
2,401±35 BP

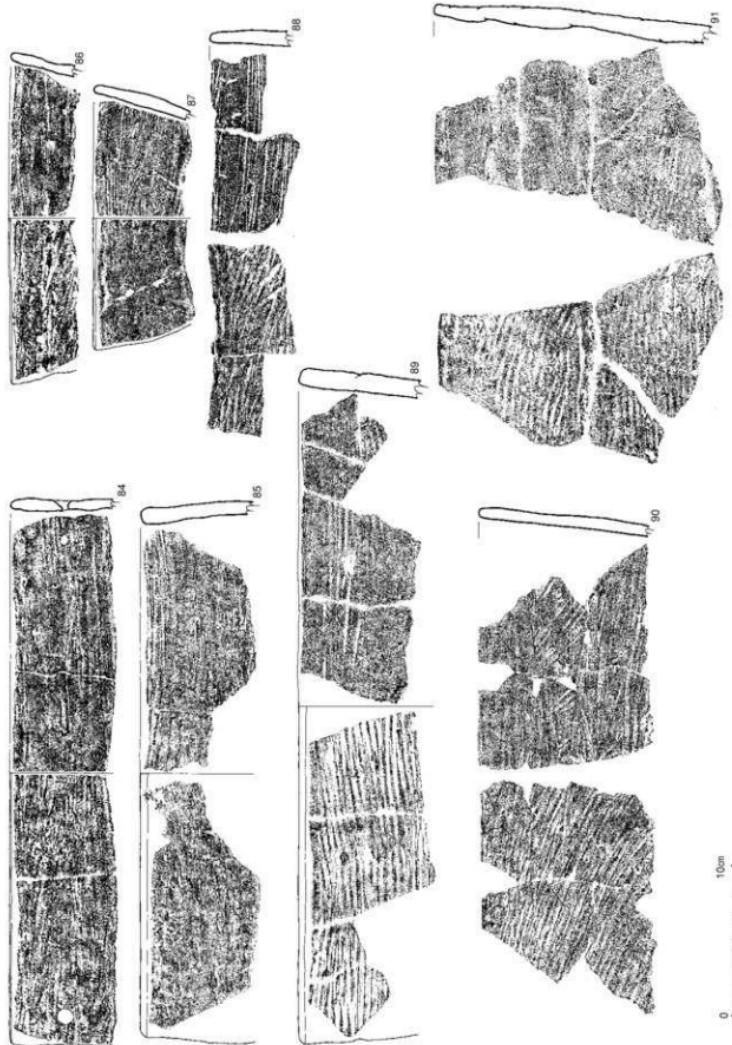
76





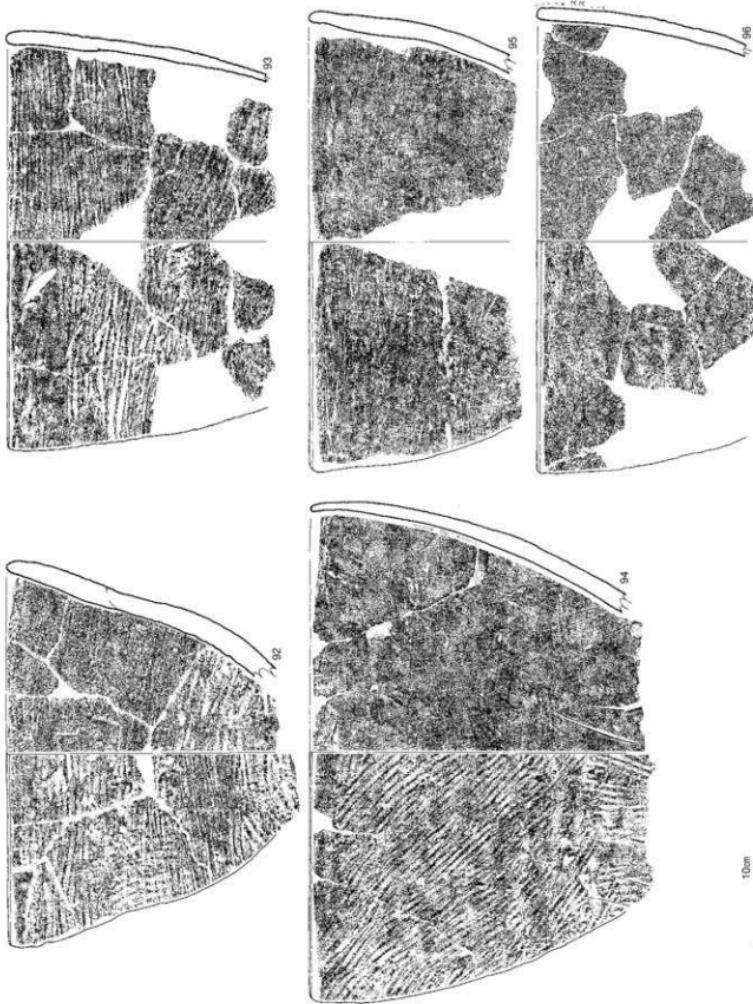
第121図 遺物実測図（14）A4類土器③

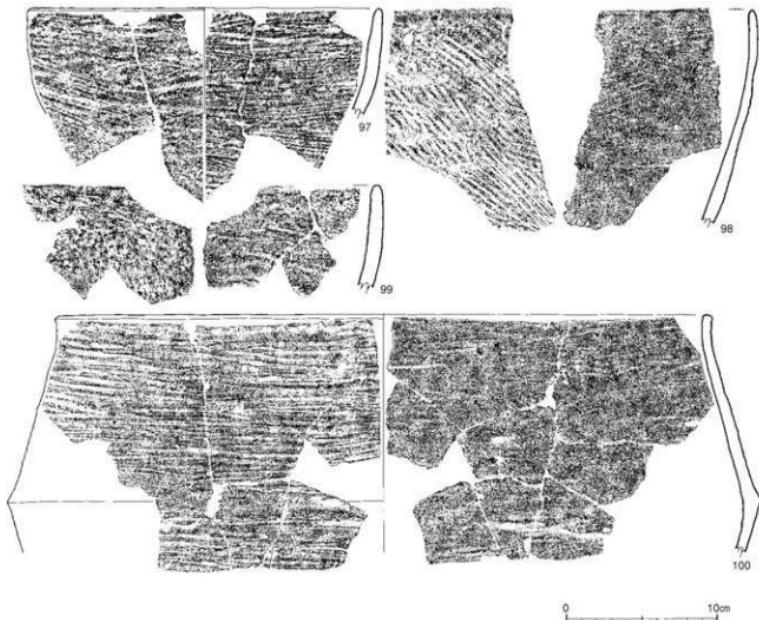
第122図 遺物実測図 (15) A4類土器④



第123図 遺物実測図 (16) A5類土器①

0 10cm





第124図 遺物実測図 (17) A5類土器②・A6類土器①

A 8 類 (第130図145～149)

口縁部に焼成前の穿孔が連続する、いわゆる孔列土器と呼ばれるものである。8点が出土し5点を図化した。全体的な器形は不明であるが、145・149のように口縁部が内傾し胴部が屈曲するものについては6類に類似している。

A 9 類 (第131図150～第134図206)

1～8類に分類できなかったものや突起の付くもので、口縁部若しくは胴部の形状がはっきりしなかったものを一括した。171～173は口縁部下に突帶が付く。186～189は口縁部がくの字状に内傾する。

胴部片 (A10類) (第134図207～第139図240)

胴部片を一括した。資料数は膨大であるが、そのうち報告したものはわずかである。207は胴部が球状を呈し、その上半に沈線文を施している。後期末の太郎追式土器に類似しているが、ここに掲載した。223は口縁部上端を欠く。胴部は強く屈曲するが、その上に小突起が付く。さらにその上に細い沈線が4条施されている。なお、これは1か所に向かうように施されしており、口縁部が波

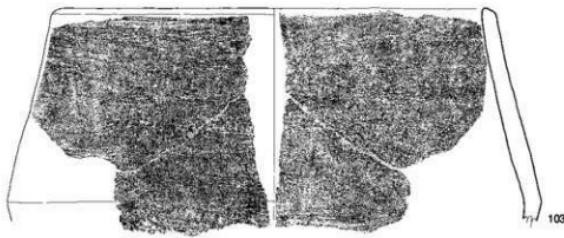
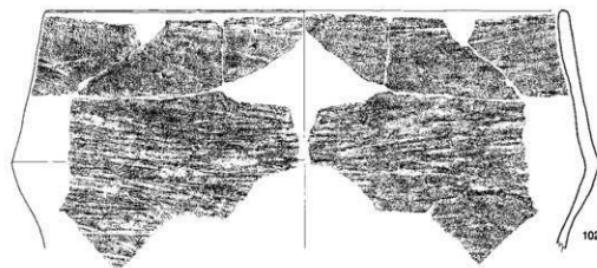
状になる可能性も残されている。A・Bは内面に厚くコケが付着している。

底部片 (A11～15類) (第140図241～第149図375)

底部片は、内外面共に丁寧な調整が施され上げ底状を呈するもの(11類)、平底で底部外面がやや外に開くものの(12類)、外へ強く開くもの(13類)、厚みのあるもの(14類)の4つに大きさは分けられ、それ以外の特殊なもの(15類)と5つに分類が可能である。資料数としては、13類が最も多い。これら底部片を概観すると、295や297などに見られるように何らかの圧痕が認められるものも多い。しかし、後期資料のようにその種類について分類することはできなかった。

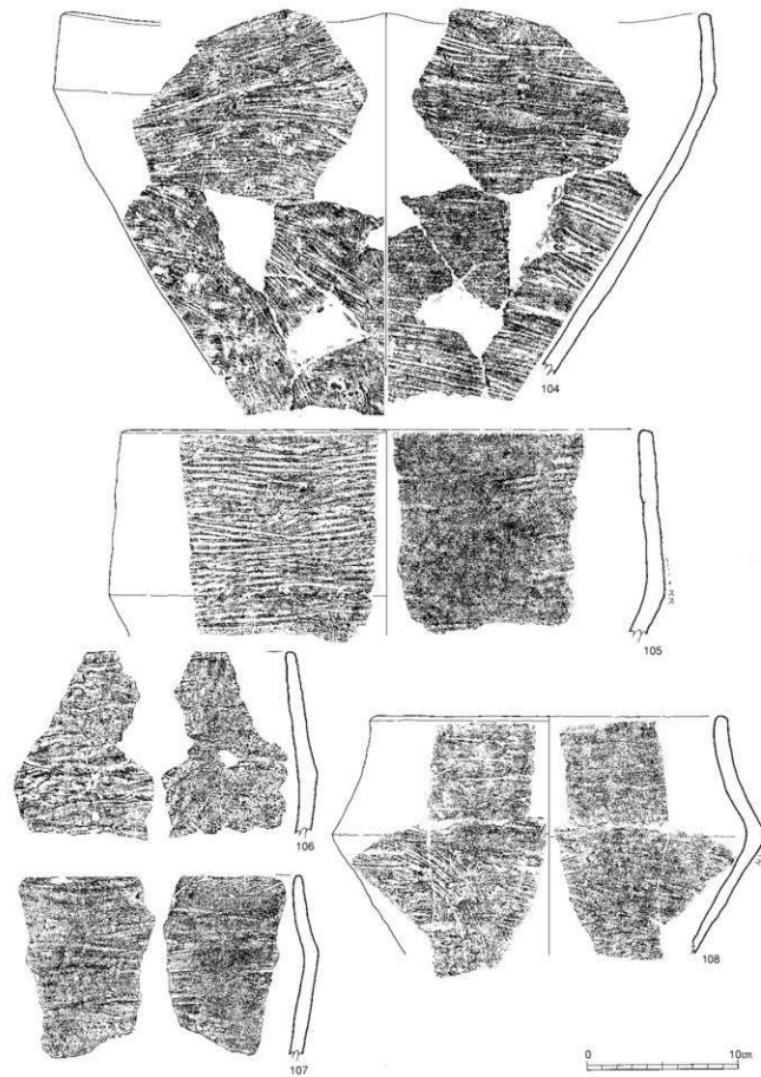
A16類 (第149図376～第150図389)

161点が出土し14点を図化した。376は口縁部から底部に至るまでが復元できた資料である。口縁部は内傾するが口縁端部がわずかに外反する。胴部は、屈曲部で最大径を測り上げ底状の器形を呈する。突帶は口縁部下位及び胴部屈曲部に2条施される。379は口縁部がわずかに内傾し、口縁部下位と胴部屈曲部に突帶をめぐらせる。



0 10cm

第125図 遺物実測図 (18) A6類土器②

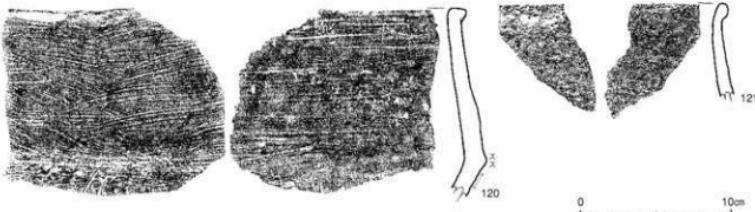
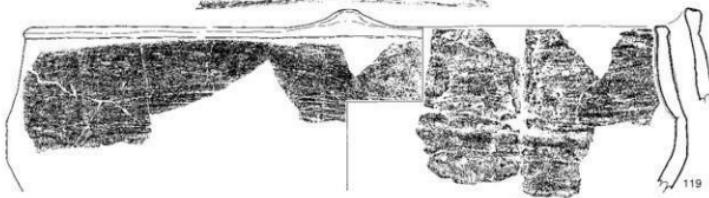
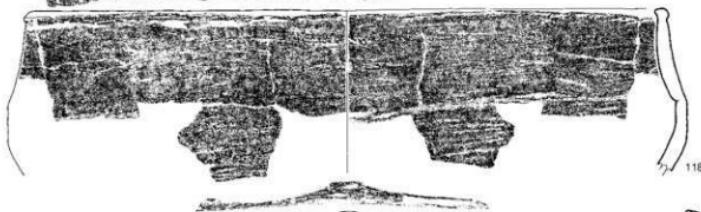
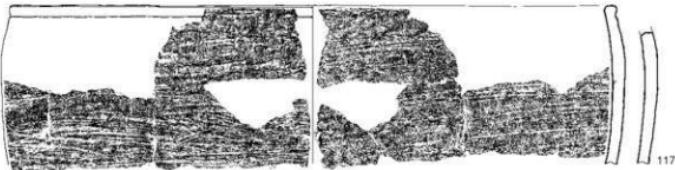


第126図 遺物実測図（19）A6類土器③

10cm

第127図 滲物実測図 (20) A6段土器④・A7段土器①

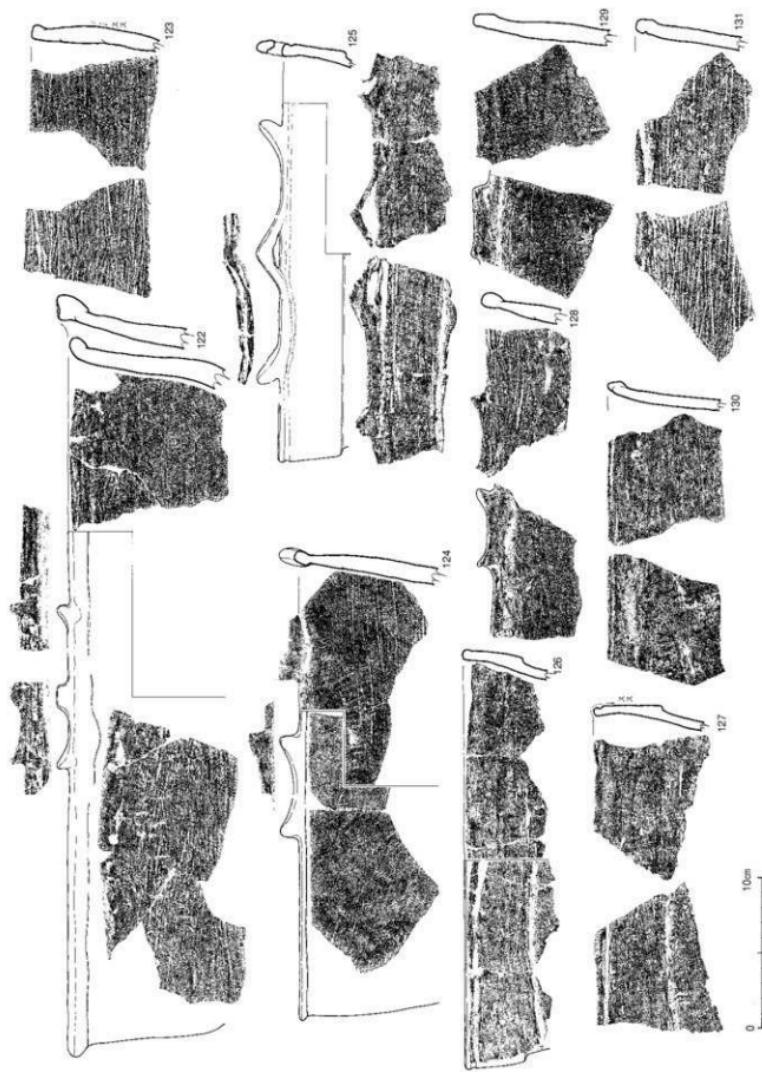


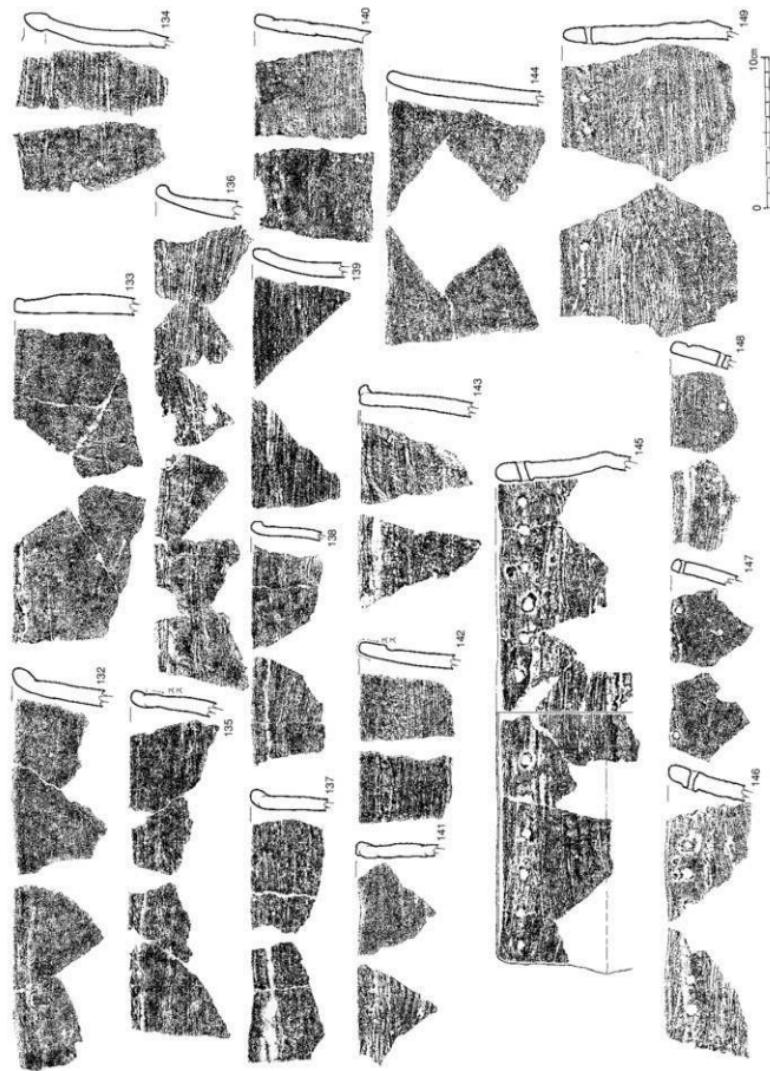


0 10cm

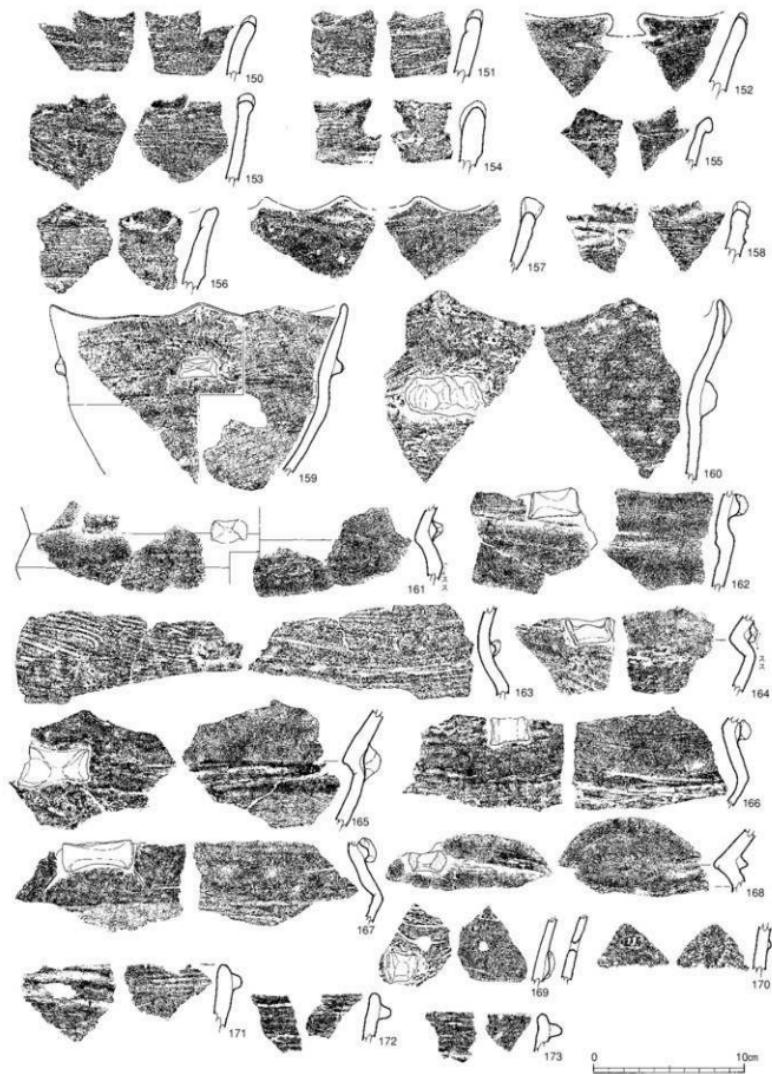
第128図 遺物実測図（21）A7類土器②

第129图 遗物类别图 (22) A7类土器③

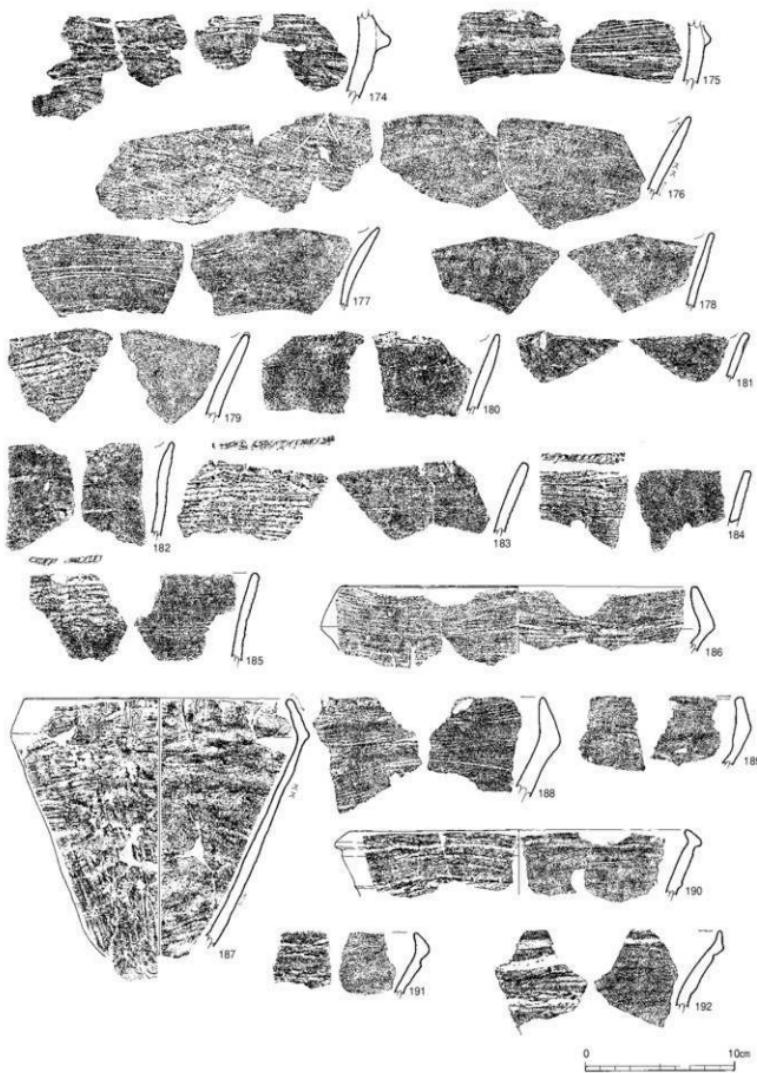




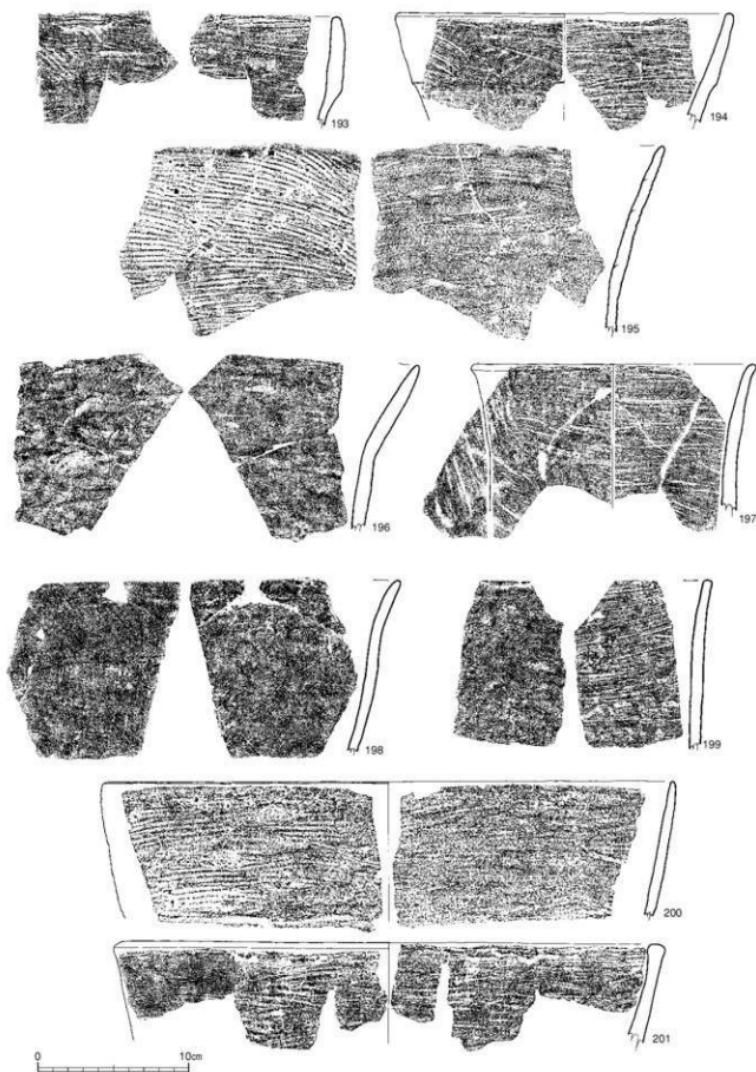
第130図 通物実測図 (23) A7類土器・A8類土器



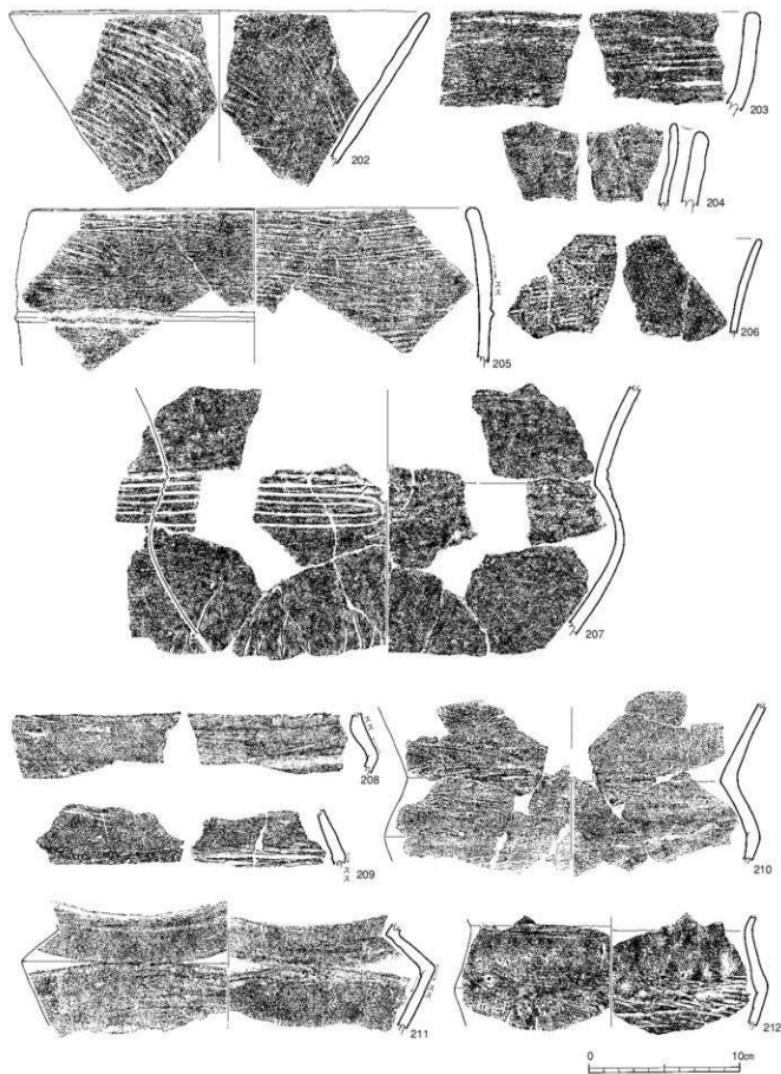
第131図 遺物実測図（24）A9類土器①



第132図 遺物実測図 (25) A9類土器②

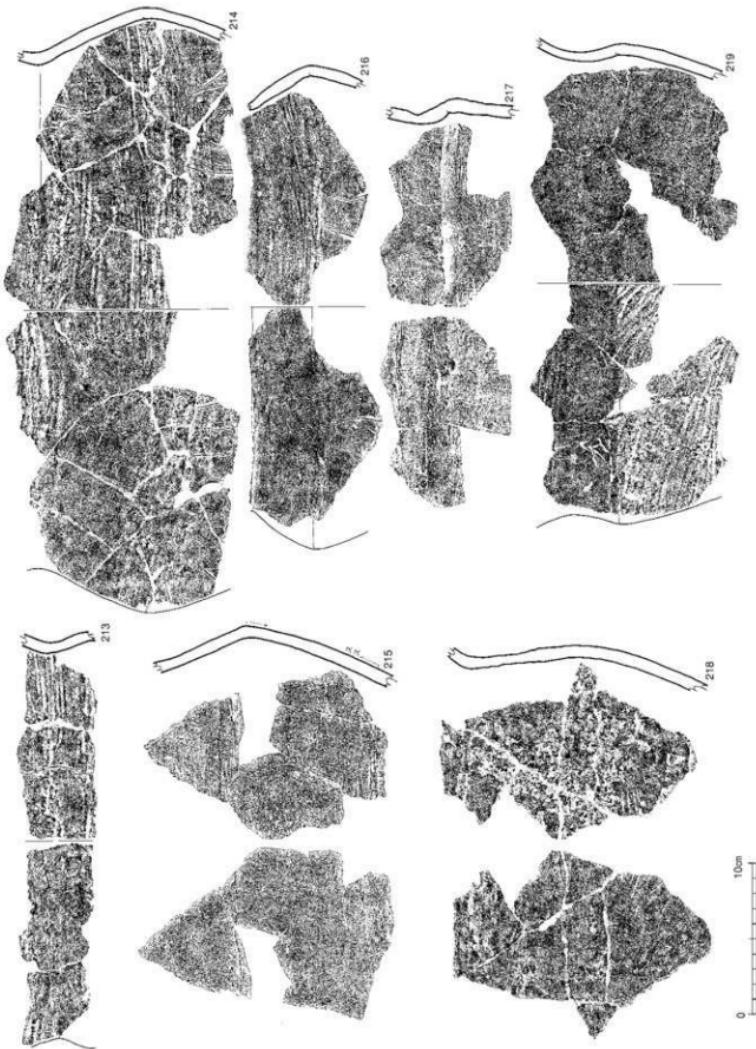


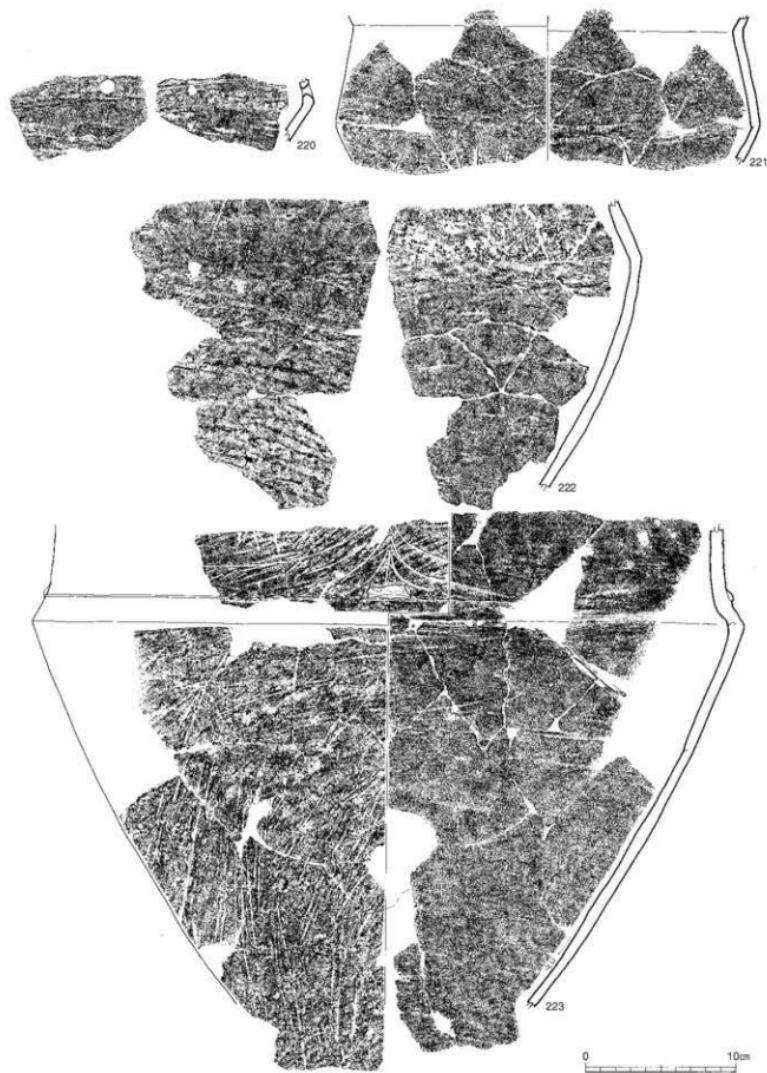
第133図 遺物実測図 (26) A9類土器③



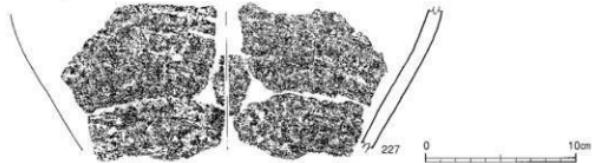
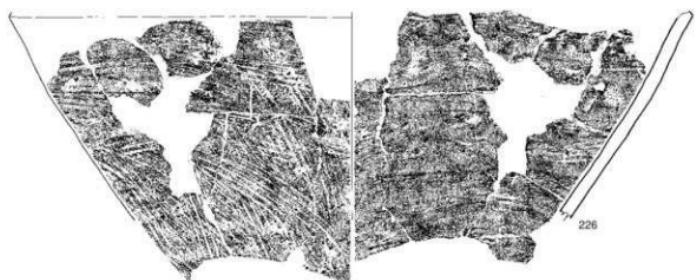
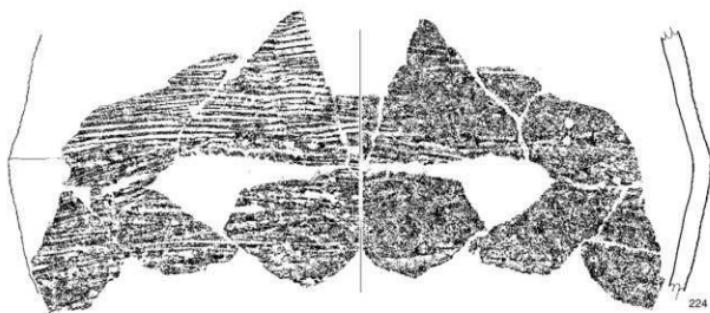
第134図 遺物実測図 (27) A9類土器④・A10類土器①

第135圖 遺物實測圖 (28) A10類土器 2

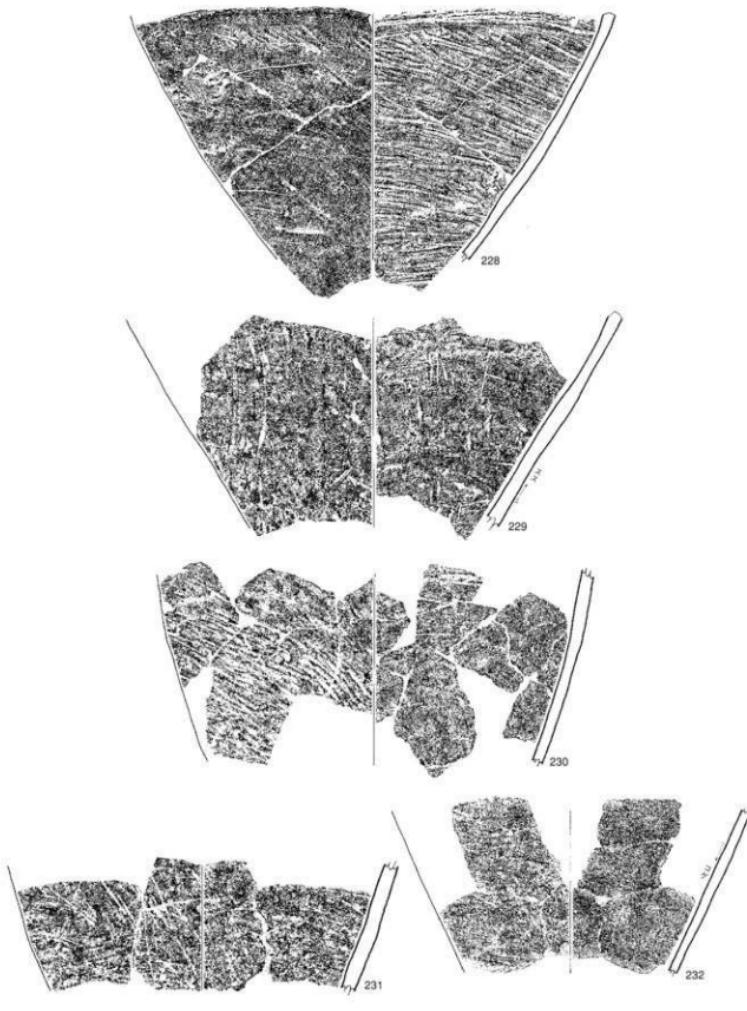




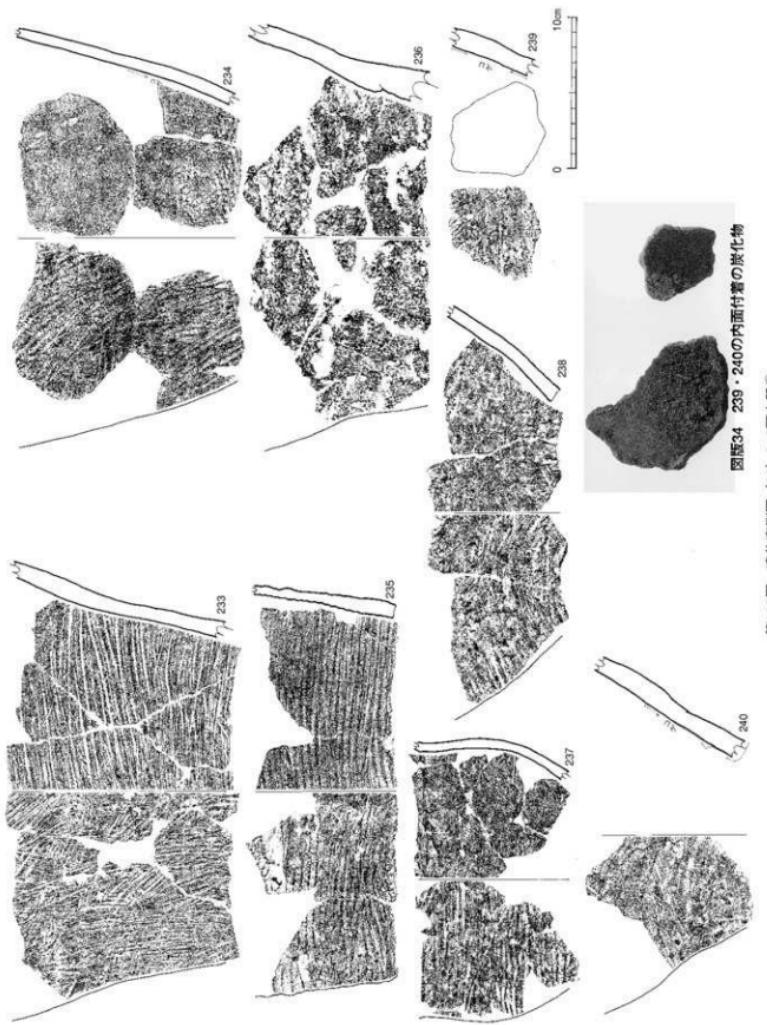
第136図 遺物実測図 (29) A10類土器③



第137図 遺物実測図 (30) A10類土器④

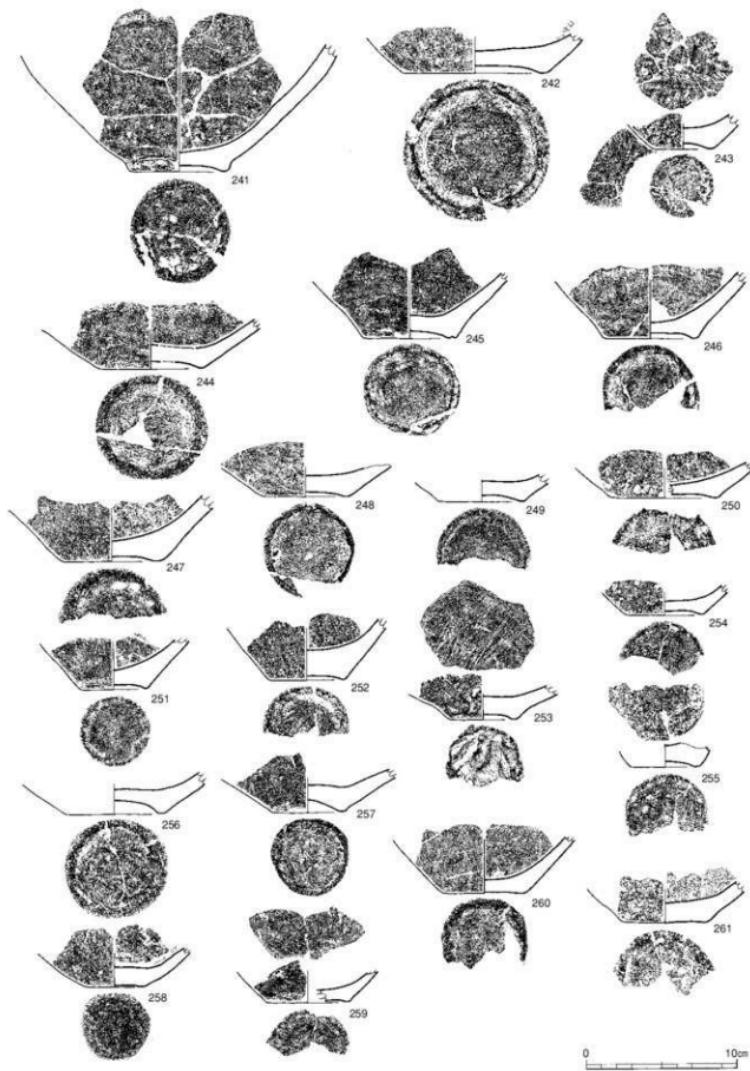


第138図 遺物実測図 (31) A10類土器⑤

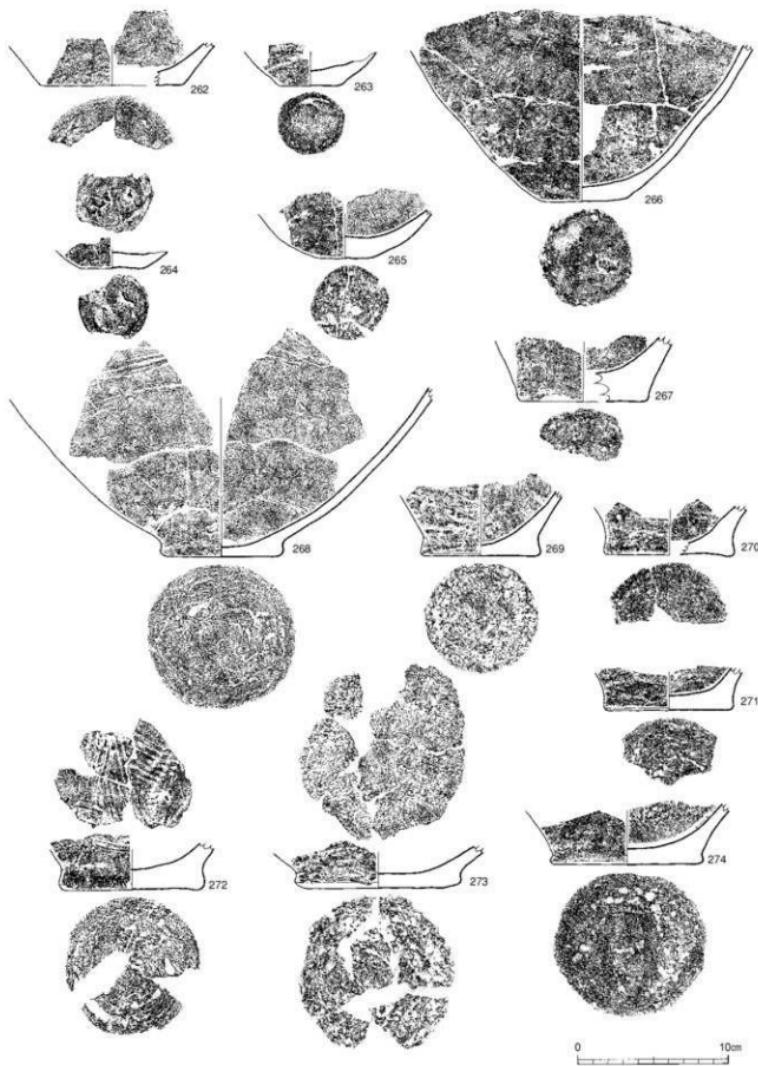


第139回 遺物実測図 (32) A10類土器 6

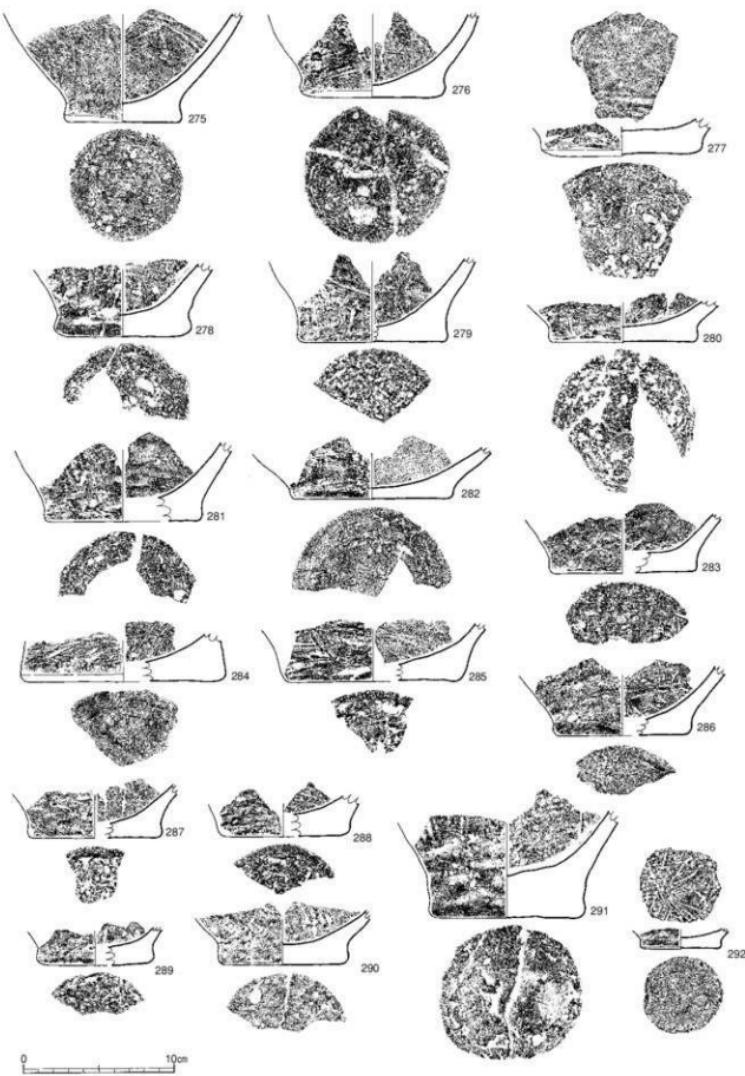
図版34 239・240の内面付着の炭化物



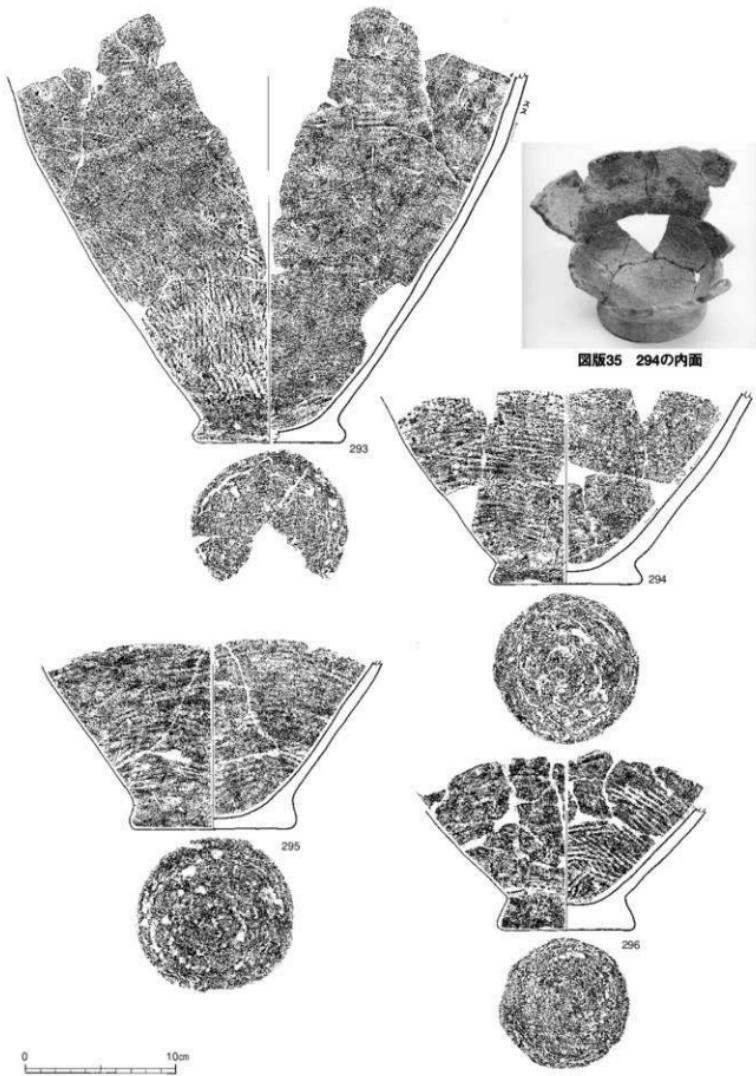
第140図 遺物実測図 (33) A11類土器①



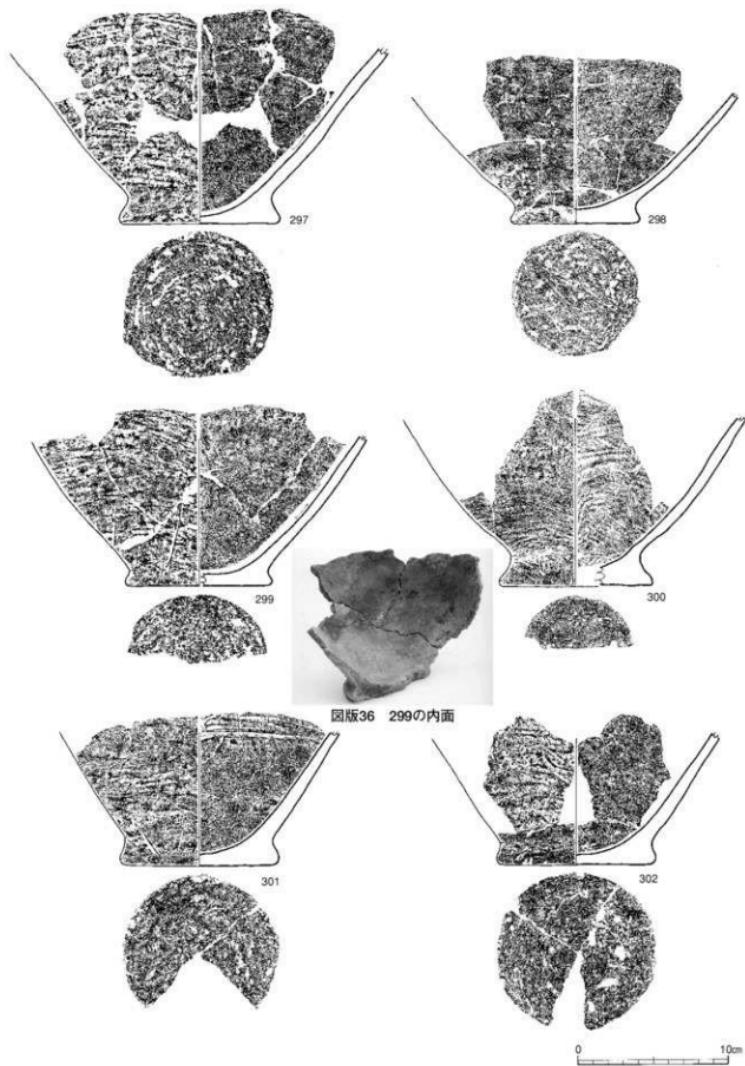
第141図 遺物実測図 (34) A11類土器②・A12類土器①



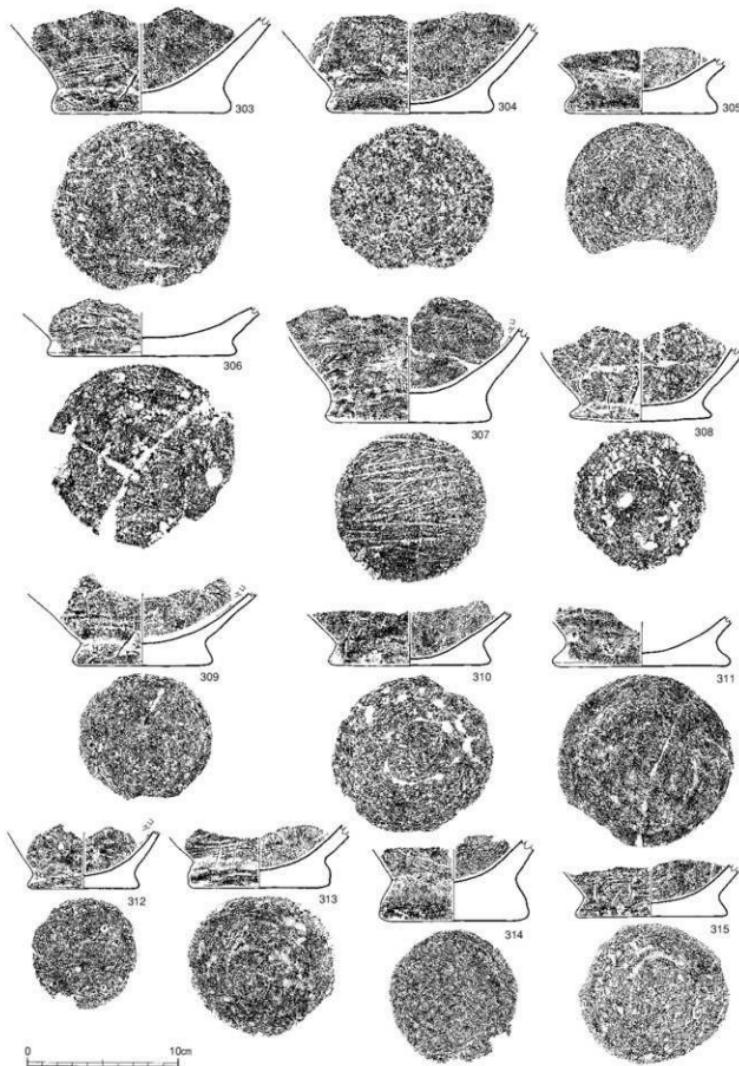
第142図 遺物実測図 (35) A12類土器②



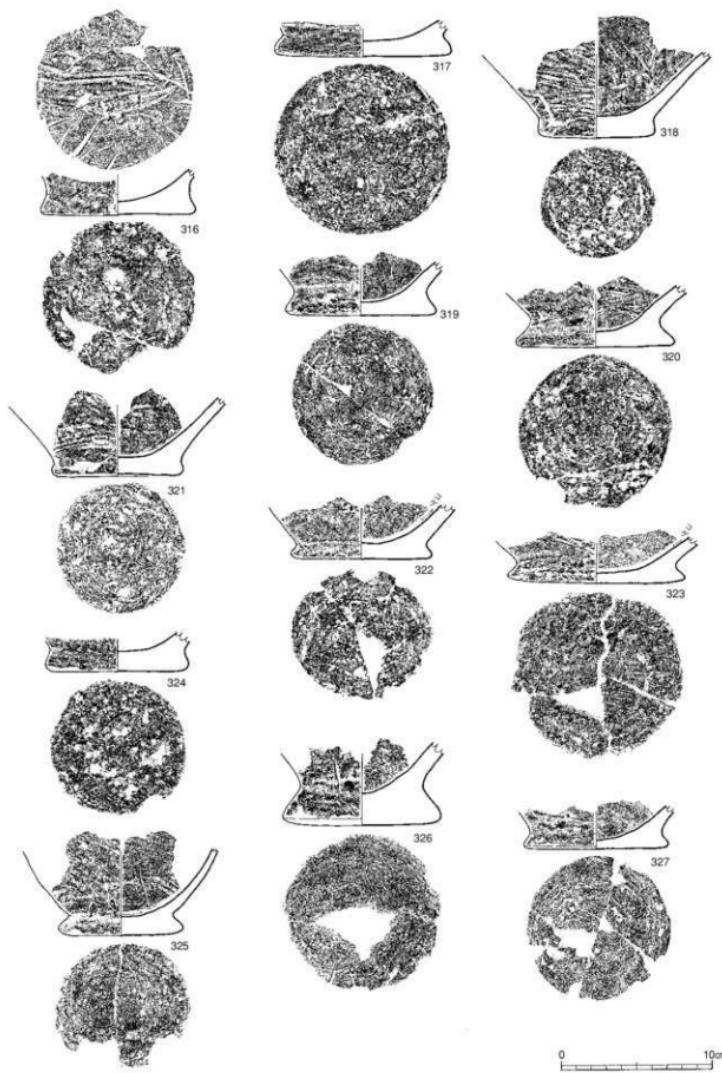
第143図 遺物実測図 (36) A13類土器①



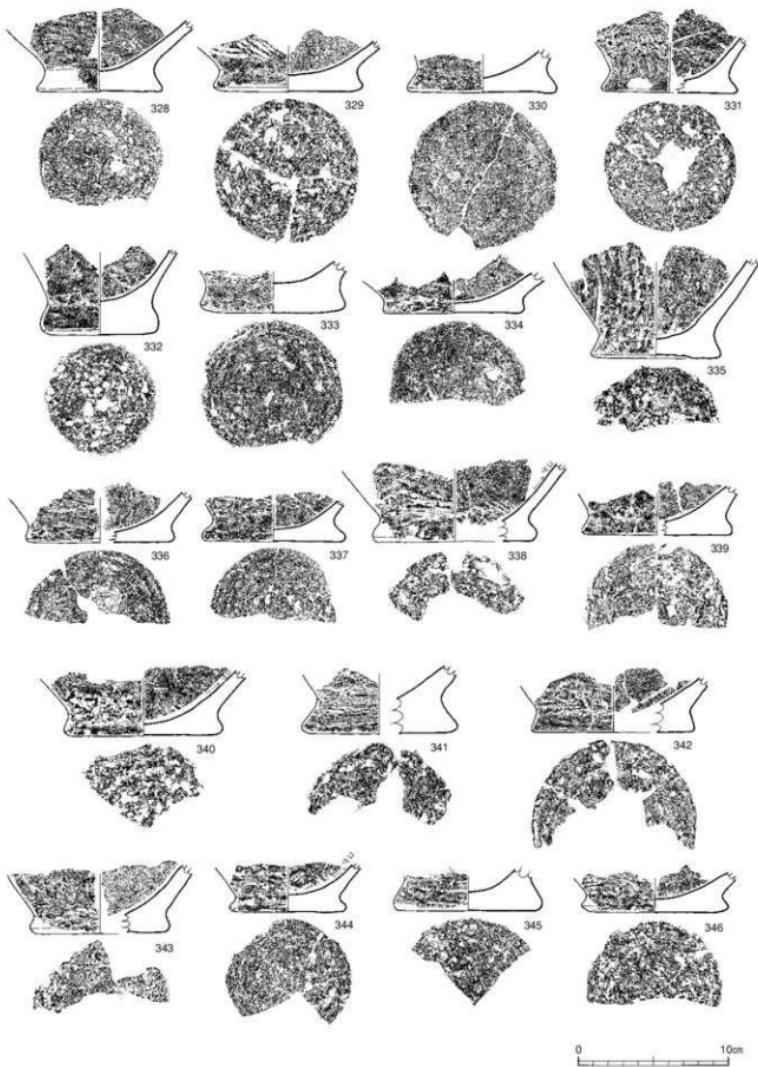
第144図 遺物実測図 (37) A13類土器②



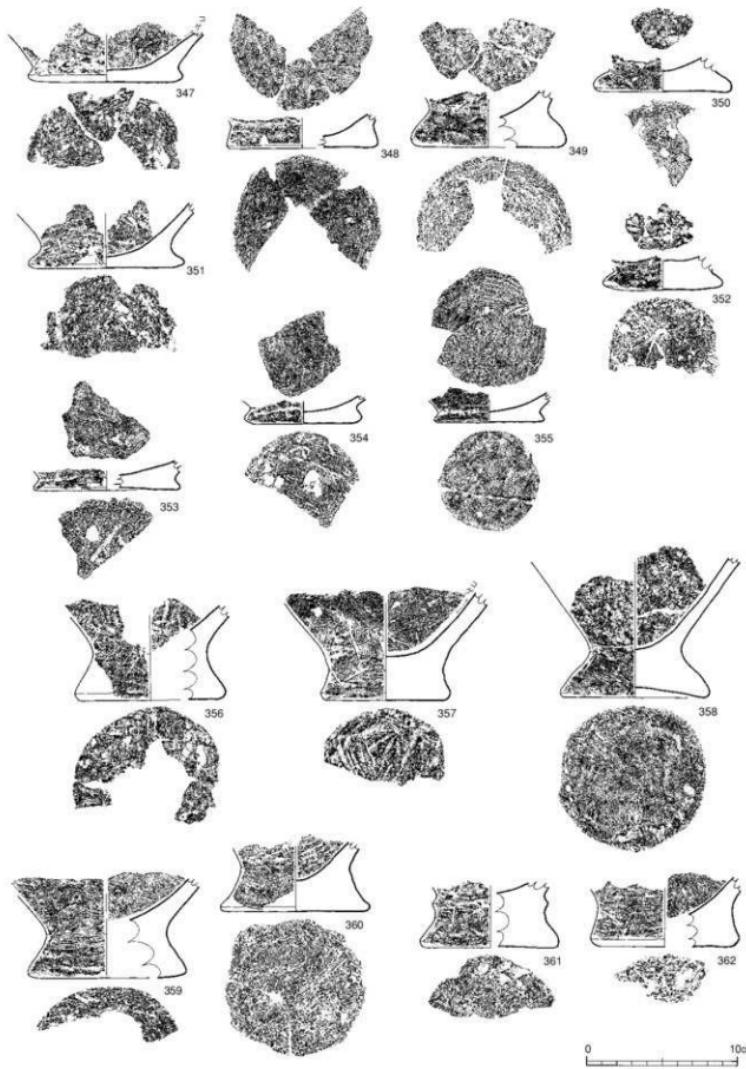
第145図 遺物実測図 (38) A13類土器③



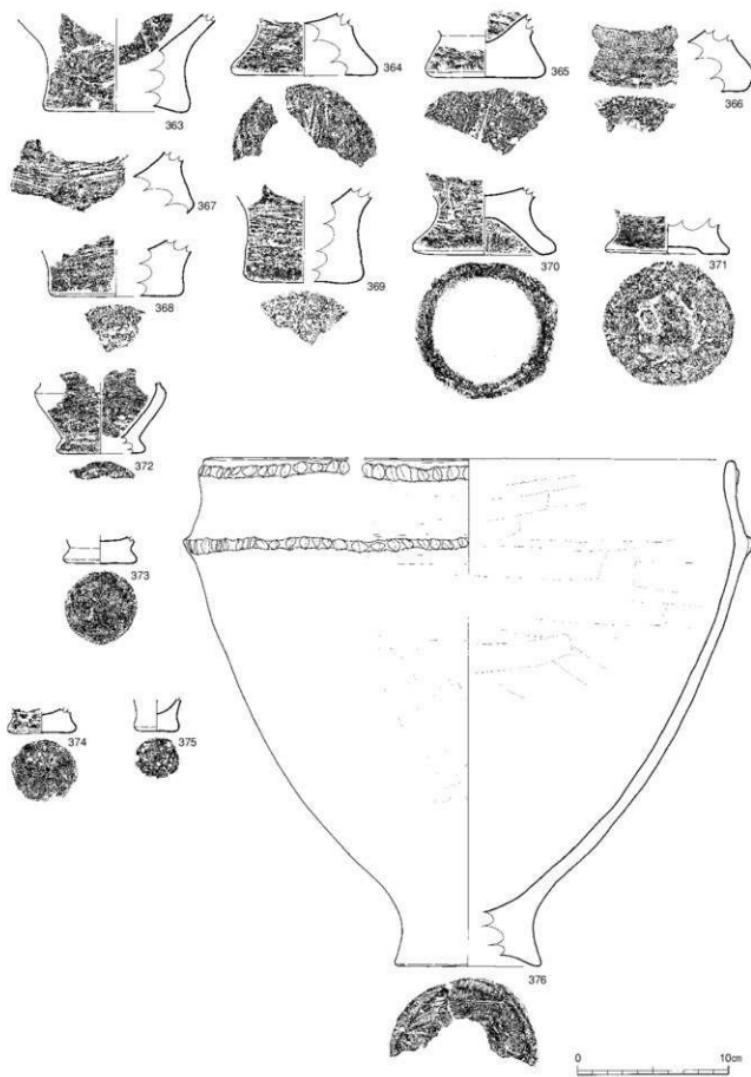
第146図 遺物実測図 (39) A13類土器④



第147図 遺物実測図(40) A13類土器⑤



第148図 遺物実測図 (41) A13類土器⑥・A14類土器①



第149図 遺物実測図 (42) A14類土器②・A15類土器・A16類土器①

炭化物が付着していたことから、放射性炭素年代測定を実施した。その結果の詳細は、第7章に掲載したが、 $2,549 \pm 24$ BPという結果が示されている。382～386は胴部の様相がはっきりしないが、384は口縁部のみの突帯と思われる。387～389は口唇部外面の端部にキザミ目を施している。

A17類（第151図390～第152図399）

口縁部が直立し、そのまま済曲して平底を意識した底部へ至る。特に粘土接合帯を外面にはっきりと残すものを見られる。31点が出土し10点を図化した。

390は口縁部が直立し胴部で屈曲する器形を呈する。

③半粗半精製土器（3群B類）（第152図400～第162図475）

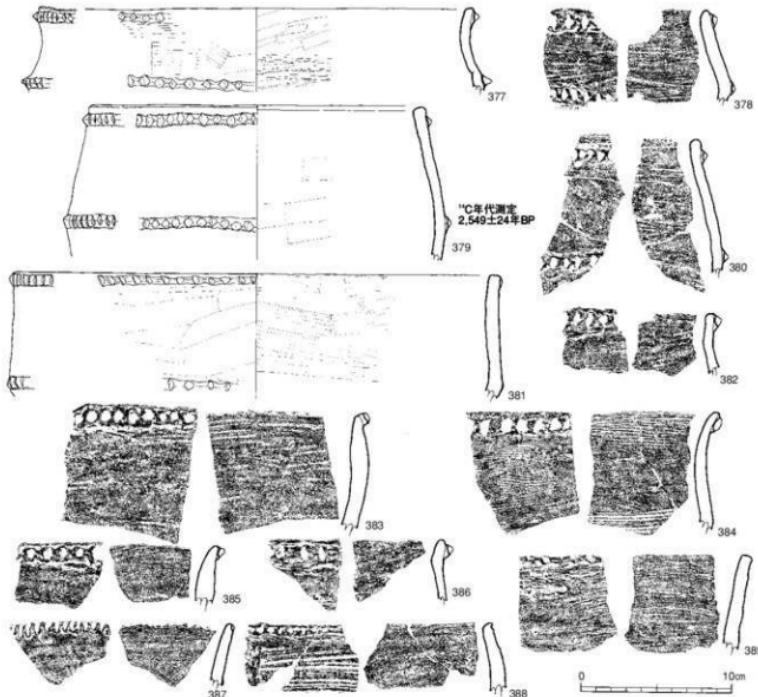
器内面にミガキを施し、外面は条痕やナデなどが施されているものを一括して半粗半精製土器と位置づけた。接合作業を経て2340点が出土し、このうち76点

を図化した。報告では、組織痕が見られるものとそうでないものとに大別した。

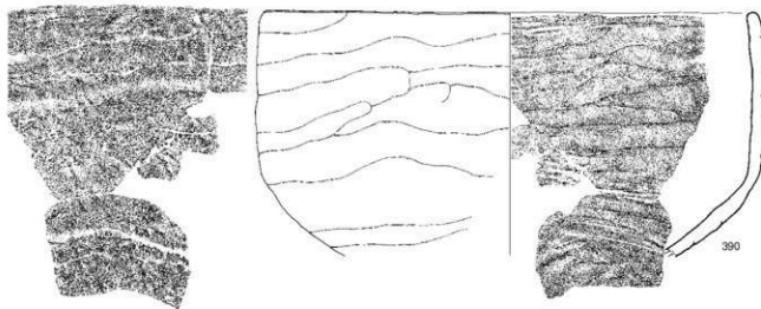
組織痕の見られないものは、口縁部が内湾して丸みを帯びているものと直線的なものがある。400は、放射性炭素年代測定を実施した。

418は胴部で屈曲が見られる。433は口縁部に長めの突起が付く。434は外面に粘土接合痕が明瞭に残されている。このような資料は他に437や438がある。437はこの中でも深めの器高である。442は底部付近の破片である。内面に黒く光沢を有するが、ミガキ込んだ結果と思われる。さらに、破断面を観察すると、図版39のように器壁内澤にまで炭素分の吸着が認められる。

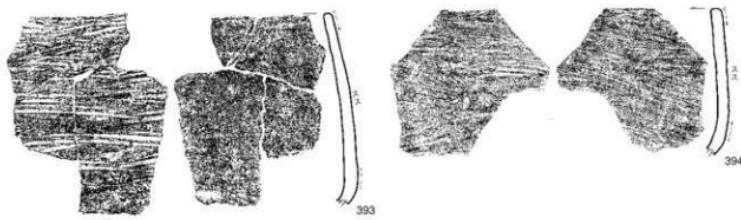
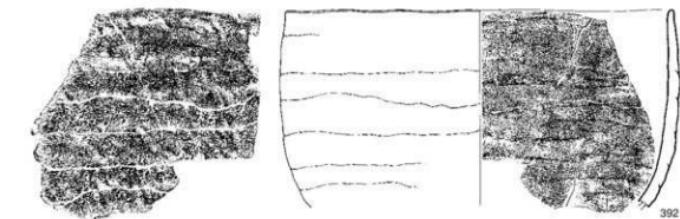
445から466は底部から胴部下半にかけて組織痕が認められるものである。図版43はそのモデリングである。451～466はアンギン編みである。445・446は底部をわずかに欠く。底部へ至るにつれて器壁内部に強く炭素分の吸着が認められる。



第150図 遺物実測図(43) A16類土器②

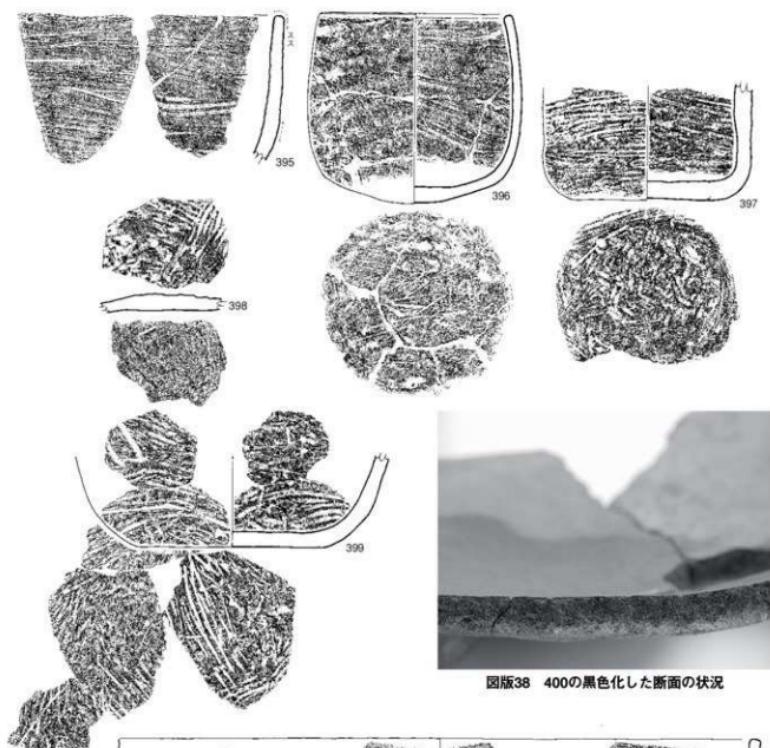


図版37 392の接合痕

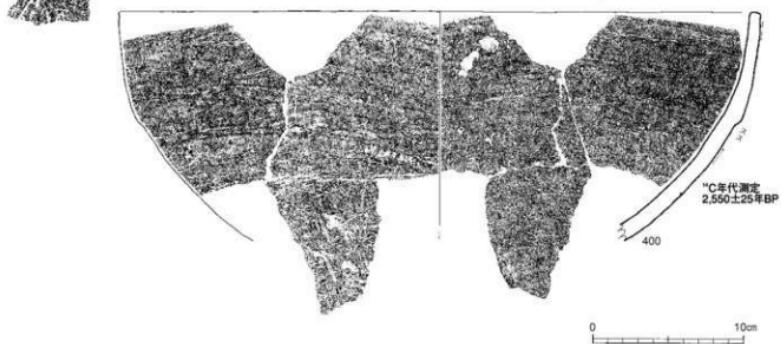


0 10cm

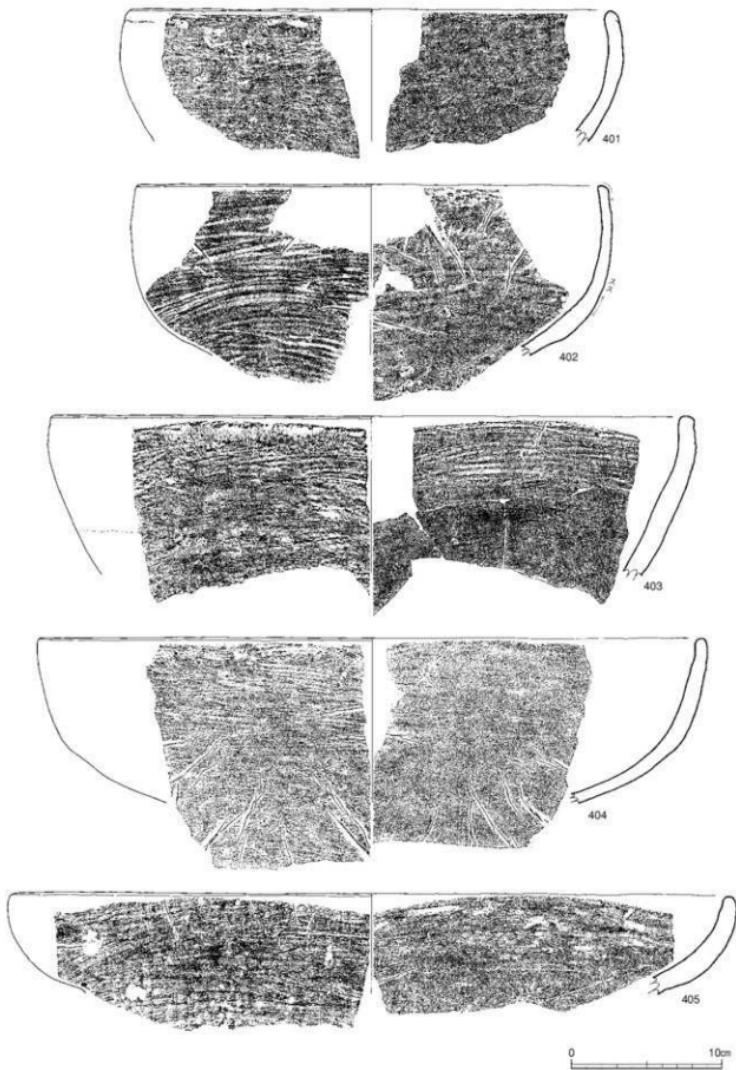
第151図 遺物実測図 (44) A17類土器①



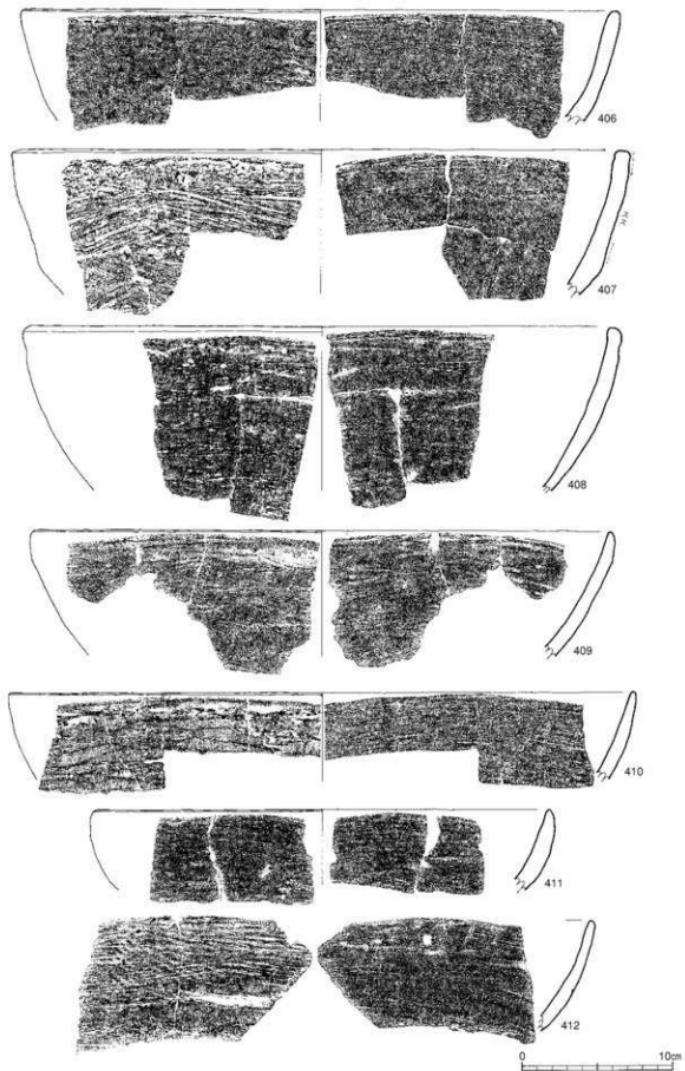
図版38 400の黒色化した断面の状況



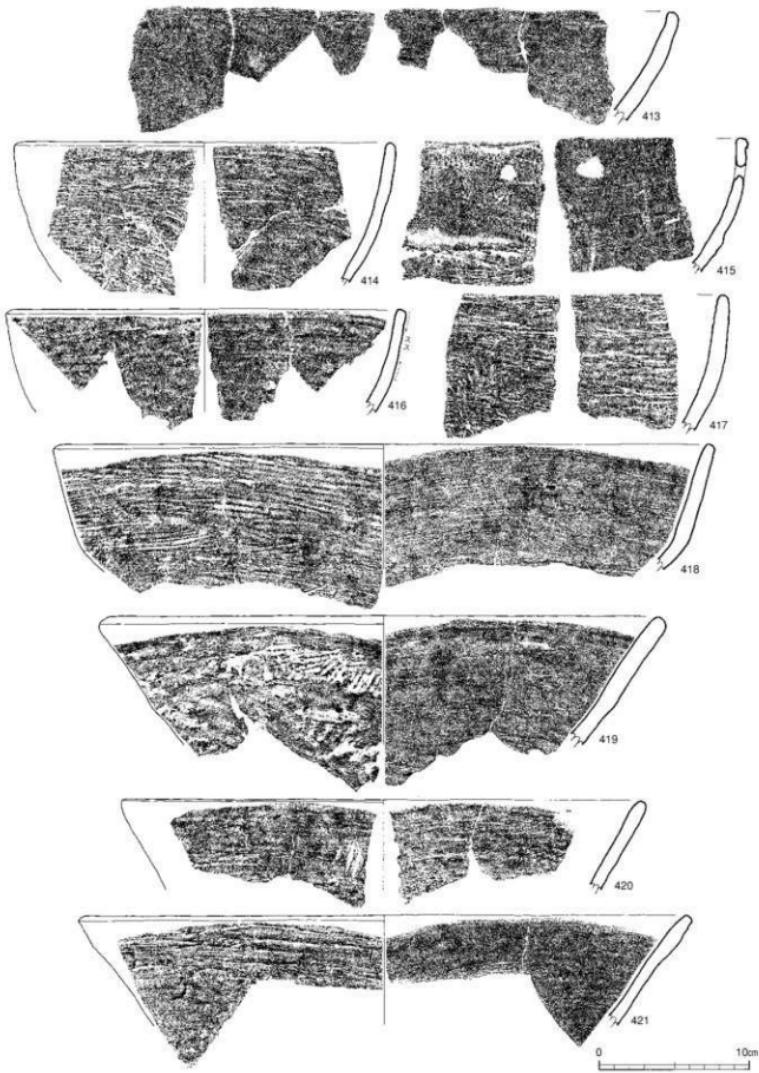
第152図 遺物実測図 (45) A17類土器②・B類土器①



第153図 遺物実測図 (46) B類土器②

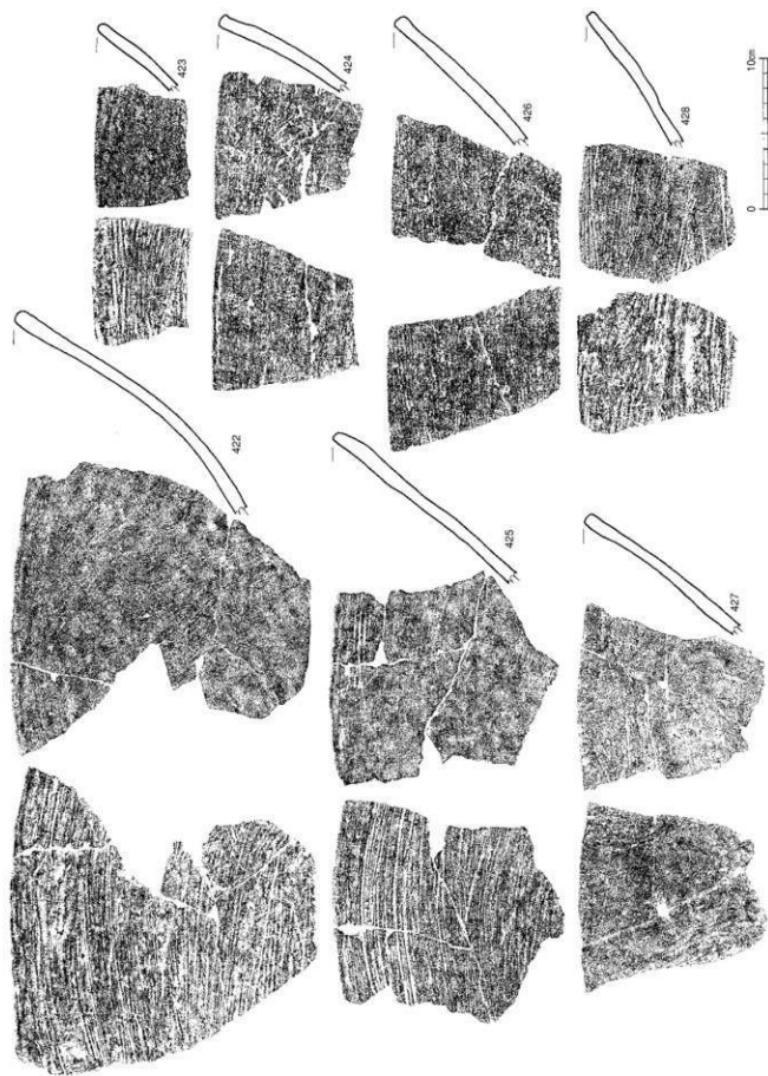


第154図 遺物実測図 (47) B類土器③

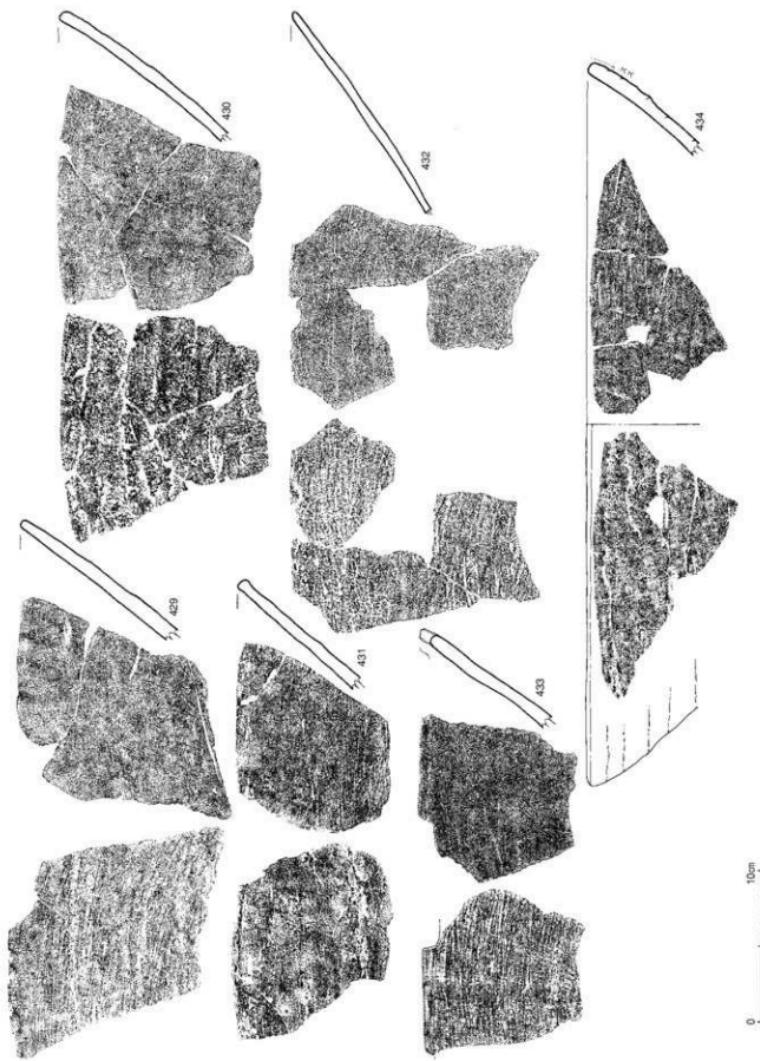


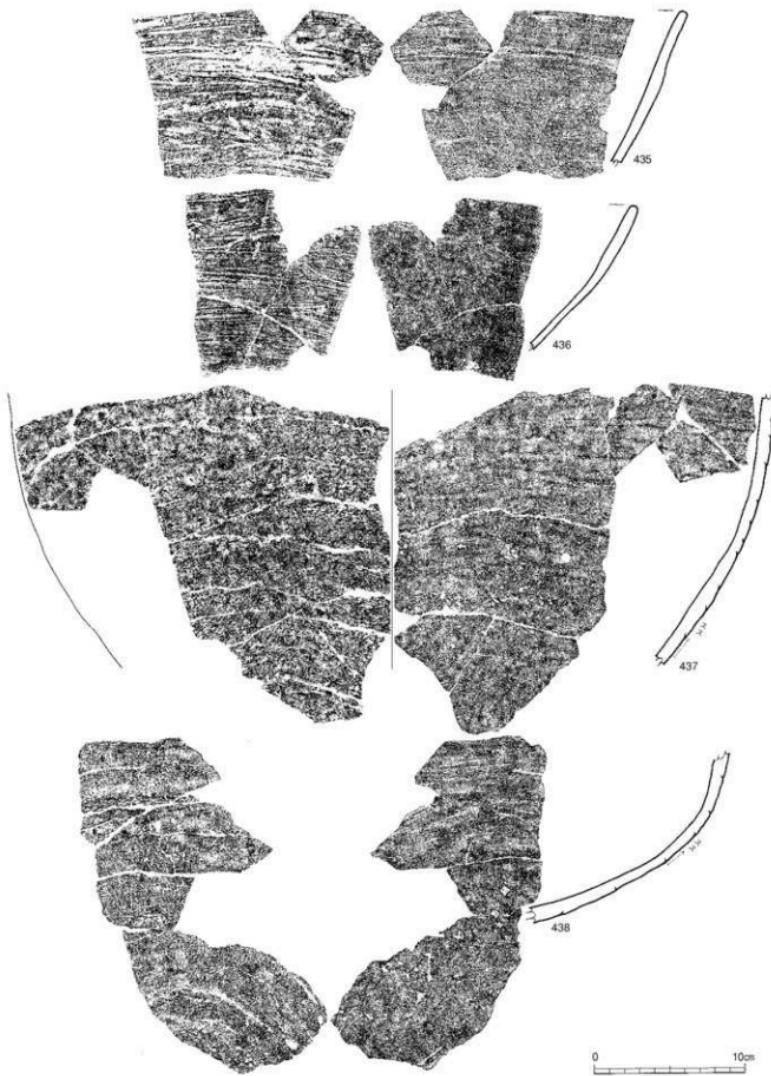
第155図 遺物実測図 (48) B類土器④

第156图 遗物实测图 (49) B项土器 ⑤

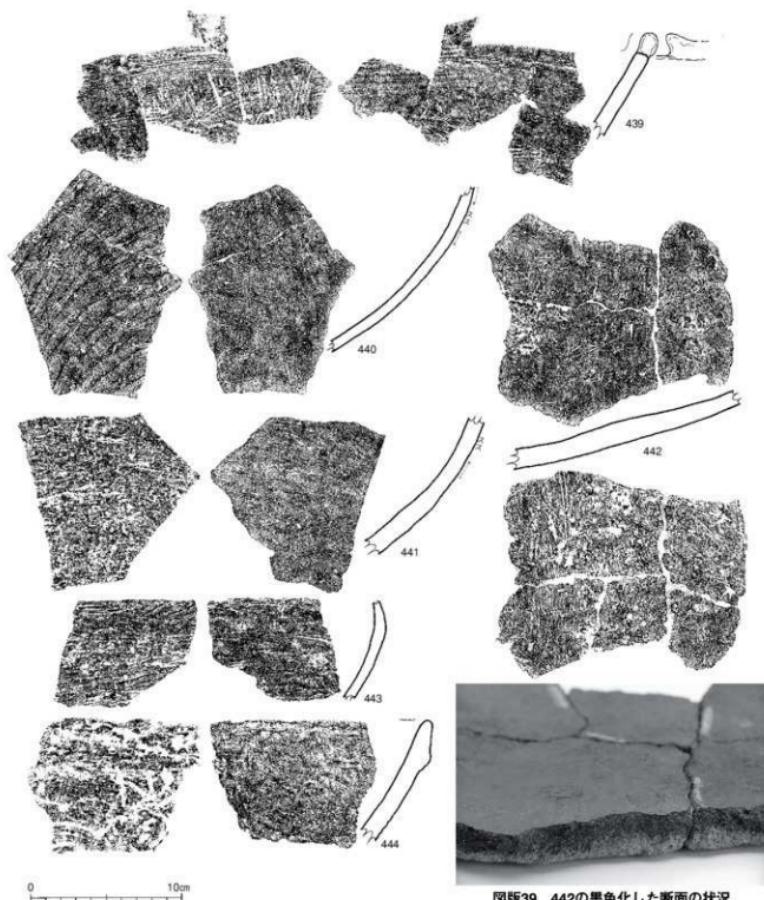


第157图 陶物实测图 (50) B类土器⑤





第158図 遺物実測図 (51) B類土器⑦



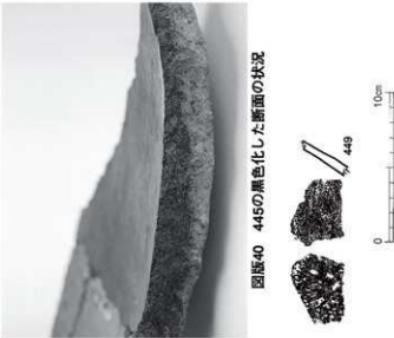
第159図 遺物実測図 (52) B類土器 (8)

467から475は半粗半精製土器もしくは粗製土器1類あるいは2類の底部と思われる。内面のミガキ痕が他の底部資料と比べて明瞭なためここに掲載した。467は器壁内部に強く炭素分の吸着が見られる。474は底部が摩滅しており、底部中央の器壁が極端に薄くなっている。

④精製土器（3群C類）（第163図～第181図）
器面内外面共に、ミガキ調整を施すものを一括して精製土器として位置づけた。接合作業を経て6102点が出土し、このうち329点を図化した。

C 1類（第163図476～488）

口縁部が短く直立し、胴部が屈曲して底部へ至る器形



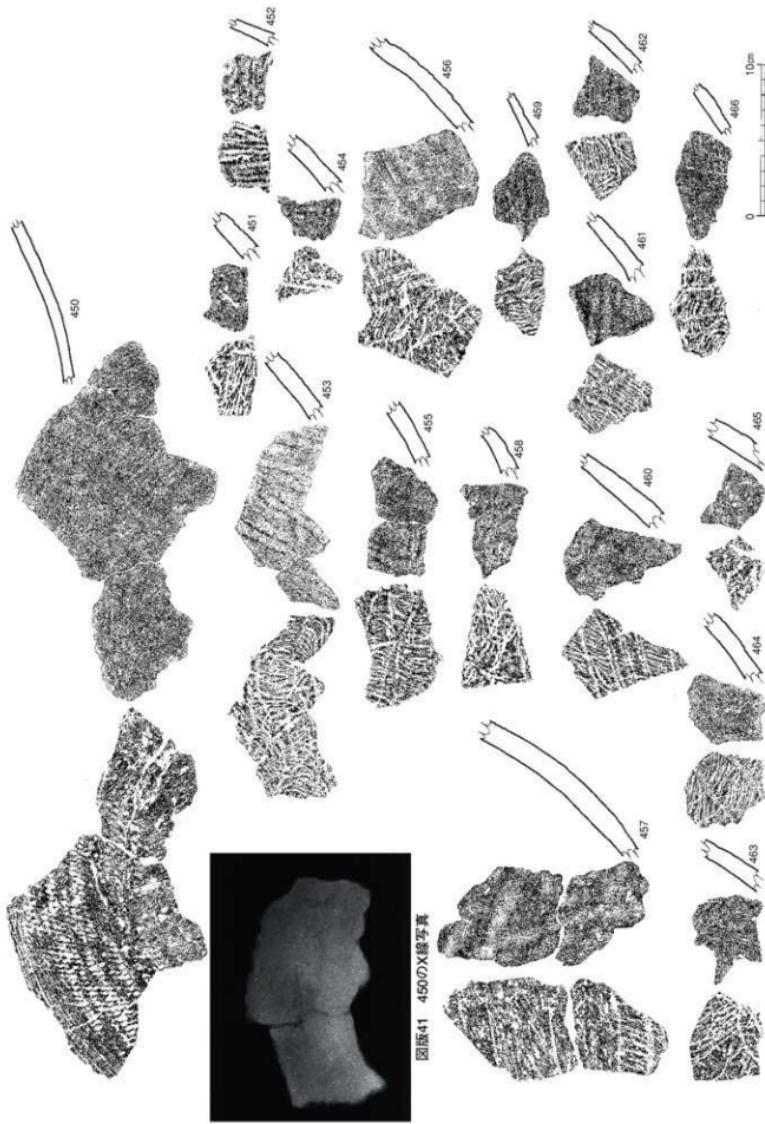
図版40 445の黒色化した断面の状況



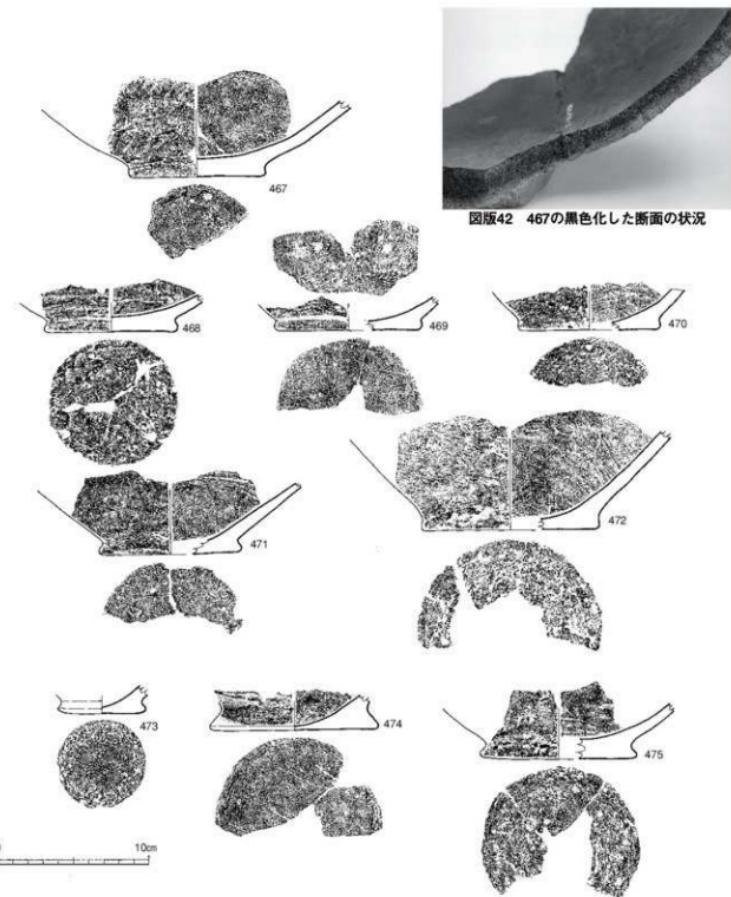
第160団 遺物実測図 (53) B類土器 9

第161圖 遺物実測図(54) B類土器①

10cm



図版41 450(?)X線写真



第162図 遺物実測図 (55) B類土器①

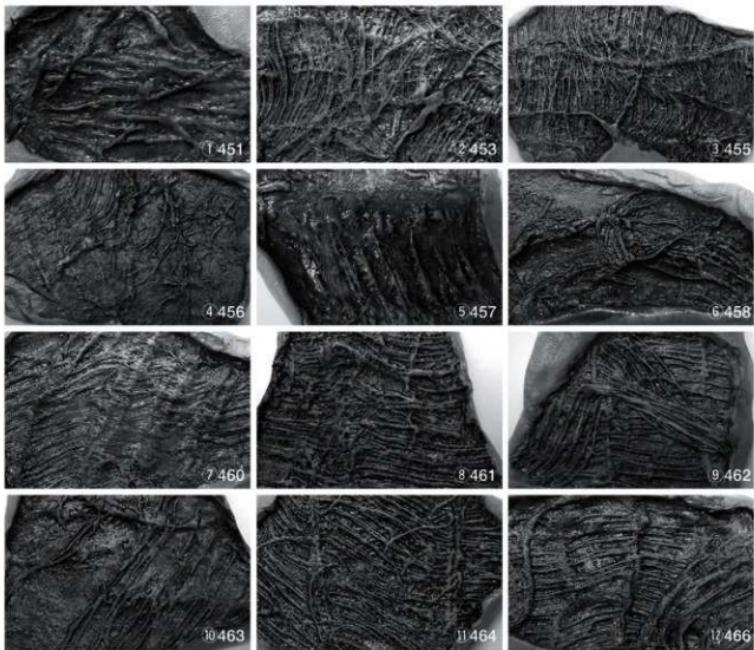
を呈する。口縁部外面には沈線が1条施される。66点が出土し13点を図化した。

476・477は口縁部が直立して胸部で屈曲し曲線的に底部へと至る。口縁部外面に1条の沈線がめぐり、内外面共に丁寧なミガキが施されている。478は、口縁部が外側へ大きく反った後に直立している。内外面の調整はミガキであるが風化のためにはっきりとしない。480は頸部が長く外への開きが小さい。483は口縁部内外面に沈

線が施され玉縁状口縁を呈している。

C 2類 (第164図489~第166図516)

口縁部から頸部までが緩やかに外反し、胸部は屈曲するが1類ほどのシャープさはない。口縁部外面には沈線が施され、その結果、口縁端部が玉縁状を呈している。124点が出土し28点を図化した。489・490は口縁部が玉縁状を呈する。492以降の資料と比べて器高が高い。497は正円形の補修孔が穿たれている。500は口縁部がやや



図版43 組織痕土器モデリング隔像

直立気味である。501は口縁部にリボン状突起が付き、左右にヒレ状突起が付く。恐らくは、リボン状突起の両側にヒレ状突起が付いていたと思われる。507は口縁部に小さな突起を2個付けている。510・511はやや厚みのある器壁で、胴部屈曲の上位に少し太めの沈線をめぐらしている。また、510は口縁部内外面に、511は口縁部内面に沈線がめぐる。512～515は499と同じく小型のものである。

C 3類（第166図517～第167図531）

口縁部は2類と同様で玉縁状口縁であるが、胴部の屈曲が強く、ソロバン玉を彷彿させる。また、口縁部径よりも胴部径のはうが大きいという特徴がある。86点が出土し15点を図化した。

517は口縁部にやや小振りのリボン状突起を有する。527～529は口縁部が他の資料と比べてやや直立気味である。

C 4類（第167図532～第169図562）

口縁部は玉縁状口縁で、頸部までが短い。胴部は口縁部の径より大きくて屈曲するが、どちらかと言えば丸み

を呈している。胴丸状の器形である。95点が出土し31点を図化した。

523・533は頸部までがやや長く、さらに532～535までは口縁部の玉縁が明瞭である。547は補修孔が穿たれており、562は器壁が厚い。

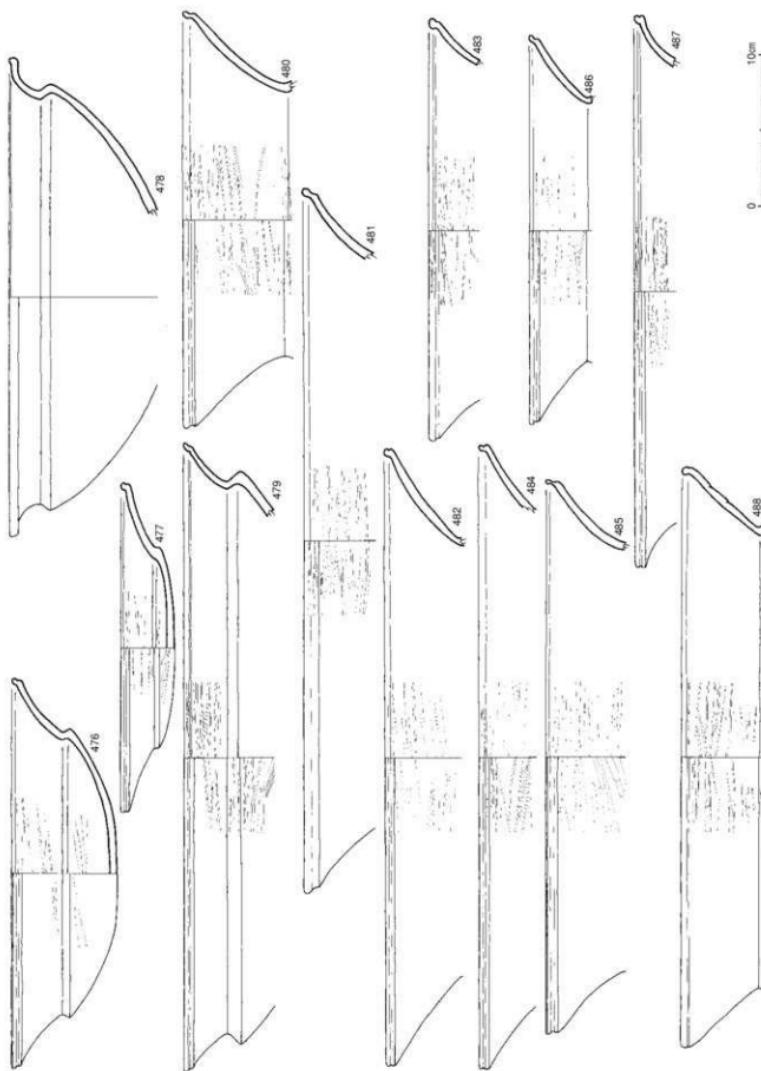
C 5類（第170図563～第174図674）

口縁部が内湾気味に立ち上がり、胴部では外反するといった流水形の器形を呈する。胴部は屈曲を持つものと持たないものとがある。底部は、立ち上がりが丸みを呈する平底である。文様は、主に口縁端部と胴部屈曲部、底部にそれぞれ沈線文を施す。平口縁はほとんど確認されず、波状口縁がその大半を占める。また、波頂部にはリボン状突起が、その左右にはヒレ状突起が付く資料も多い。加えて、沈線内には赤色顔料が残されているものも多い。この顔料は、本来全面に塗彩されていたと思われる。なお、顔料分析を行った結果、ベンガラの他に水銀朱も数点確認されている。これらについては第7章にその詳細を記している。417点が出土し112点を図化した。

564は太めの沈線を口縁部、頸部、胴部の3か所に施

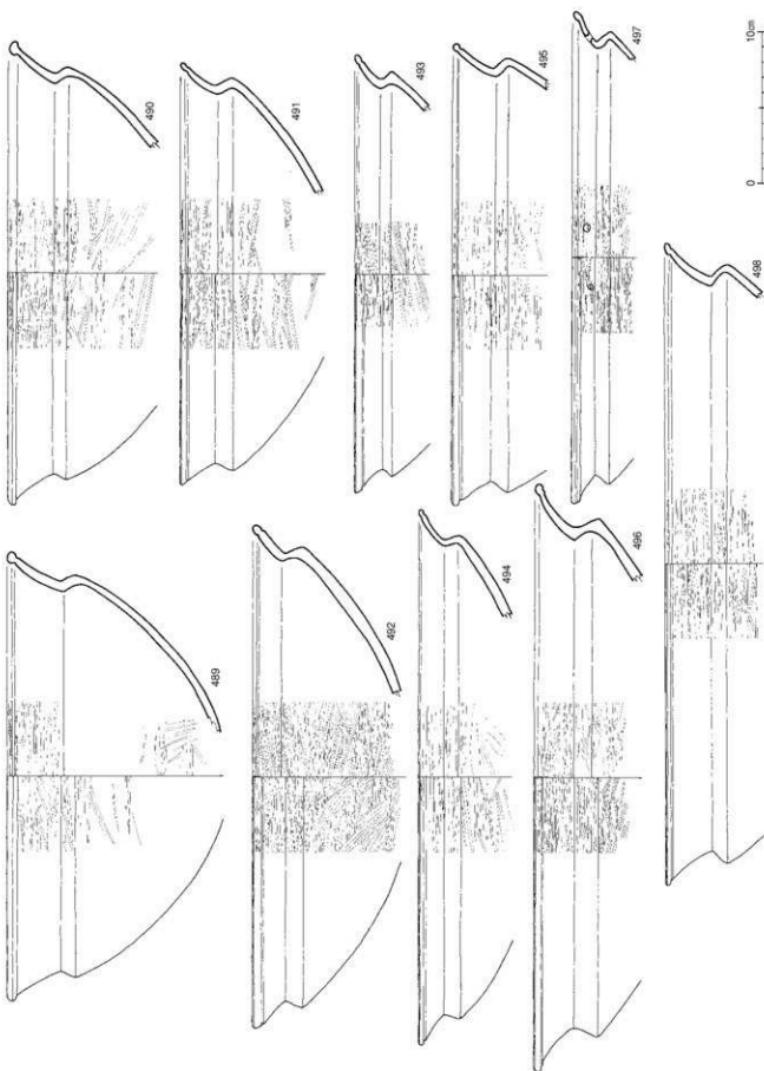
第163圖 造物測圖 (56) C1類土壤

0 10m



0 10cm

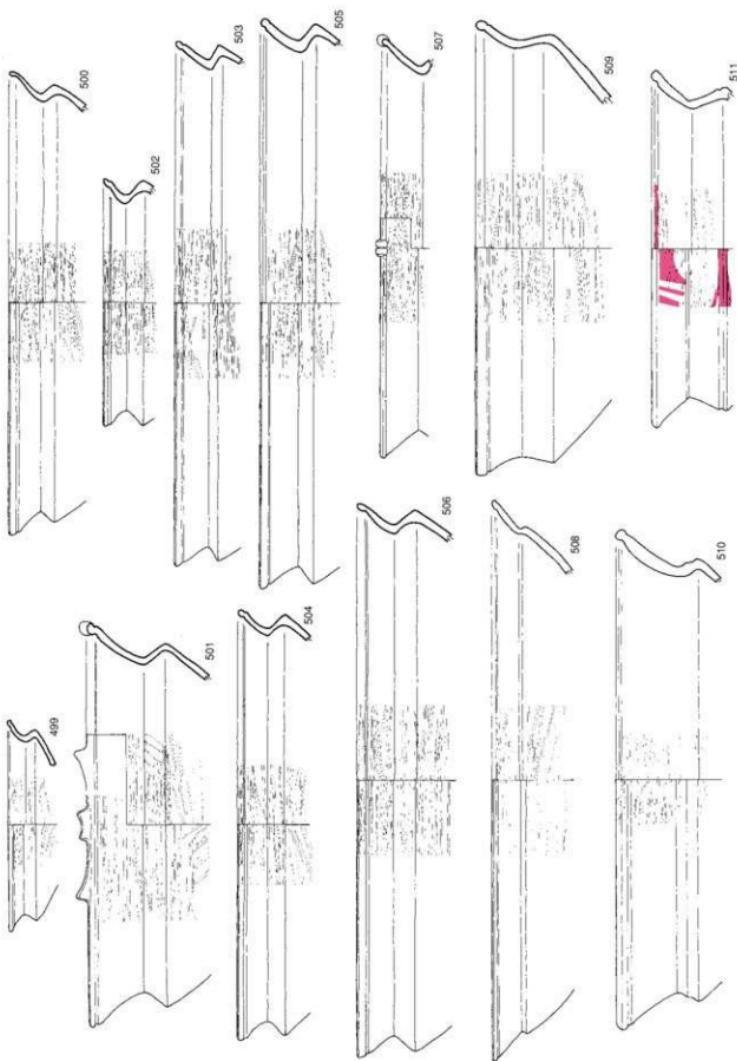
第164図 遺物実測図 (57) C2類土器①

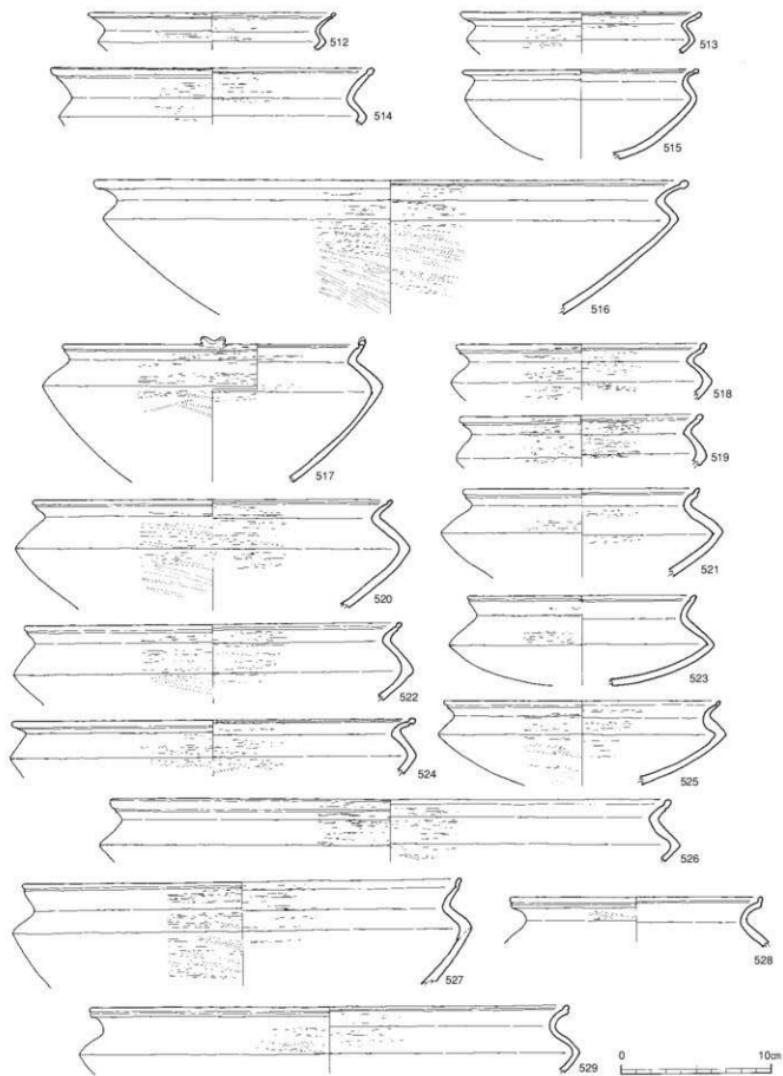


第165図 遺物実測図 (58) C2類土器2

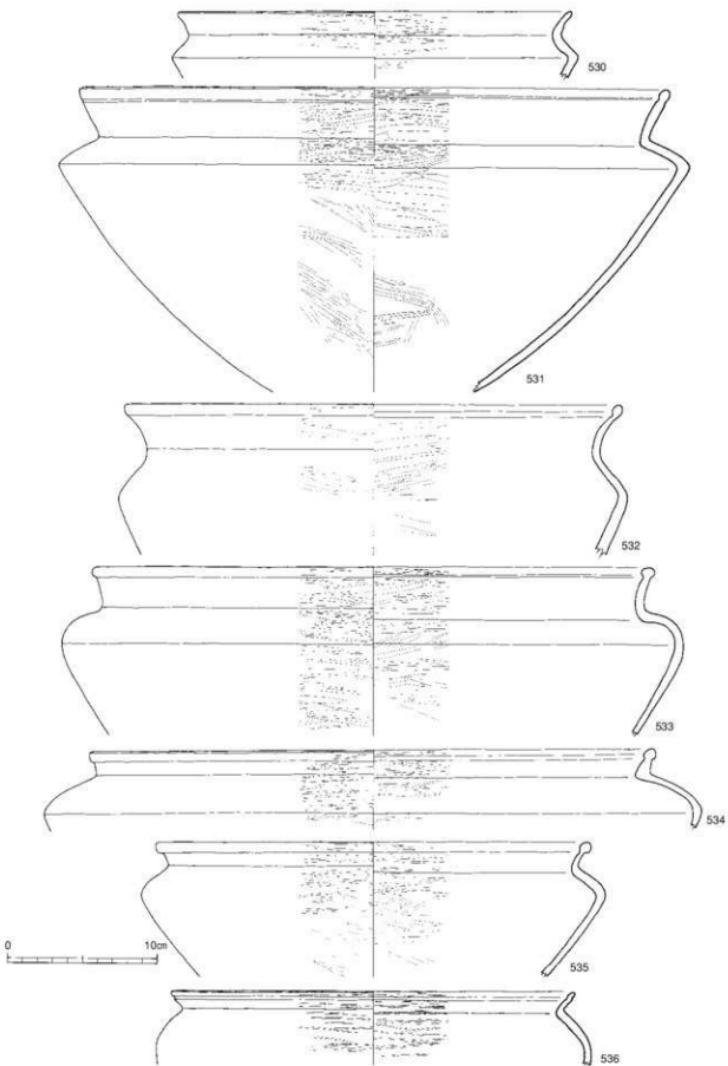
は赤色調

— 10cm —





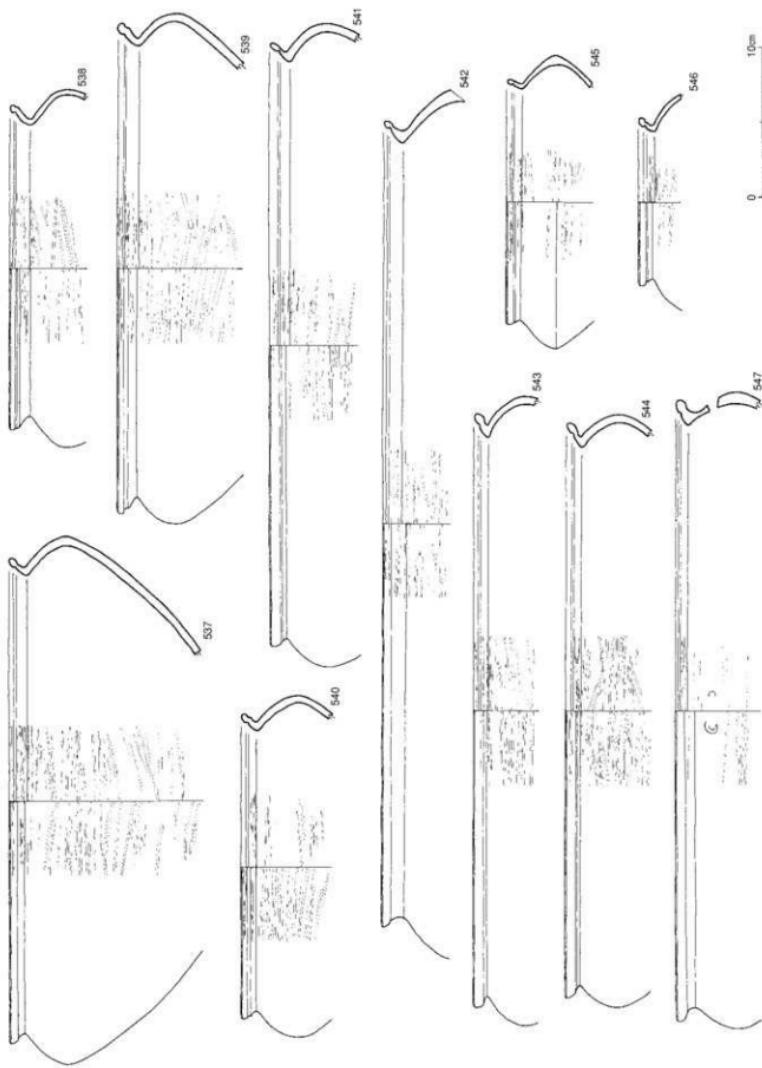
第166図 遺物実測図 (59) C2類土器③・C3類土器①

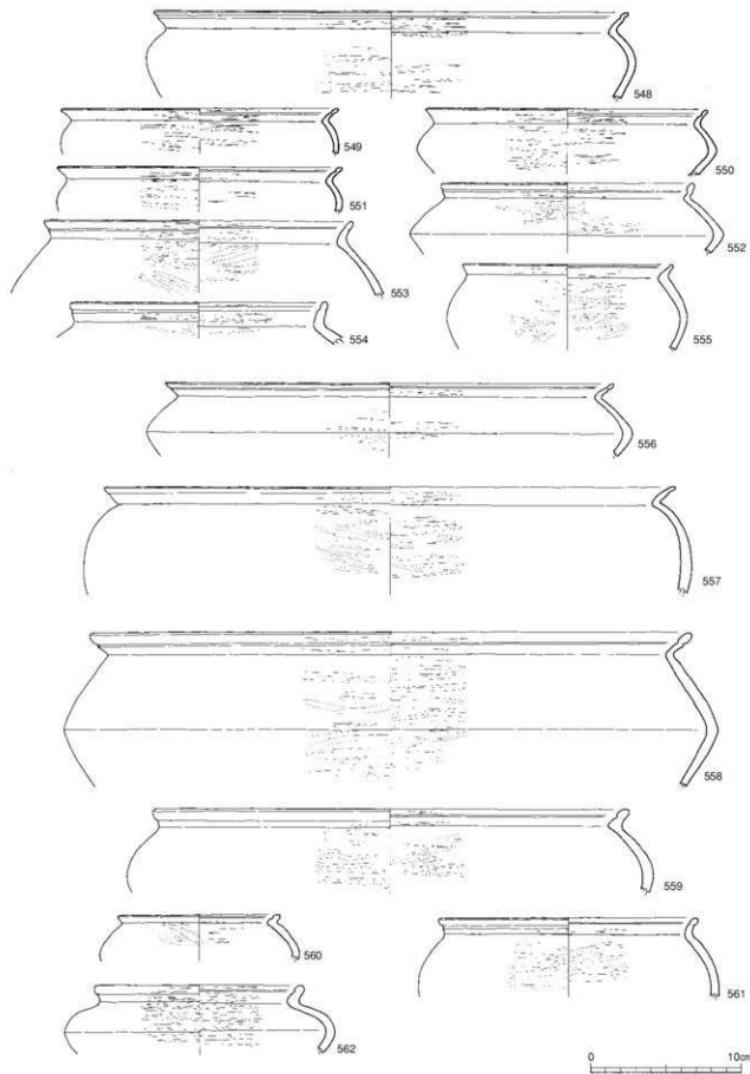


第167図 遺物実測図 (60) C3類土器②・C4類土器①

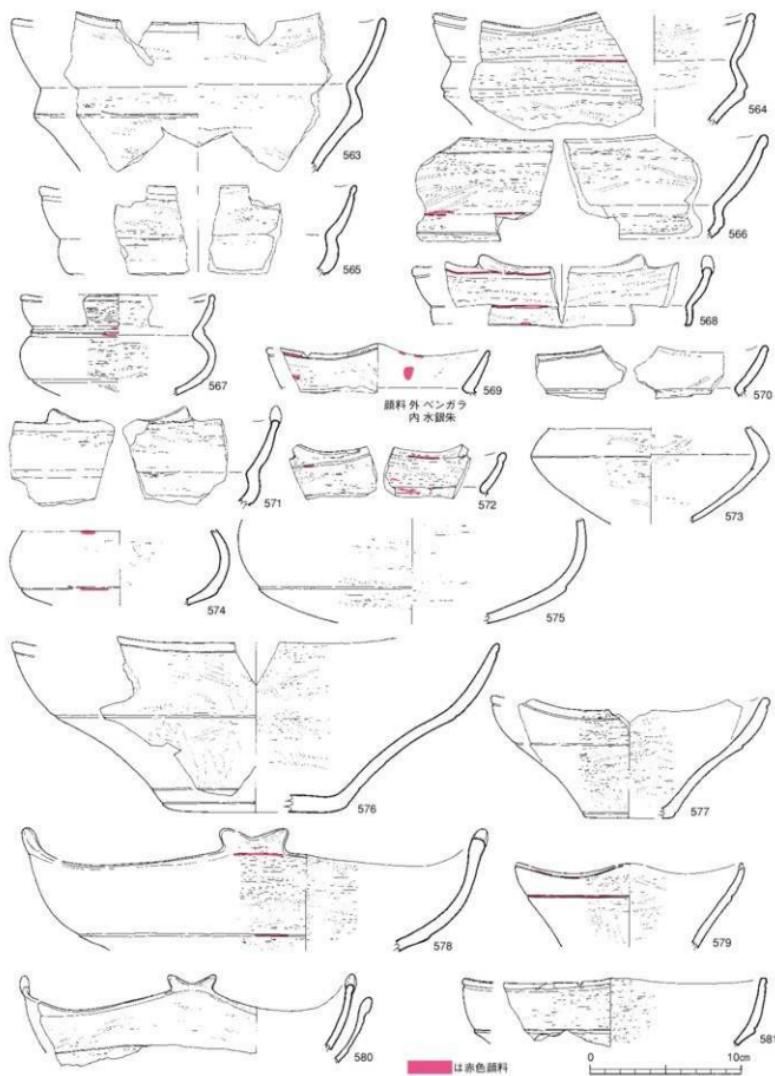
0 10cm

第168図 遺物実測図 (61) C4類土器2

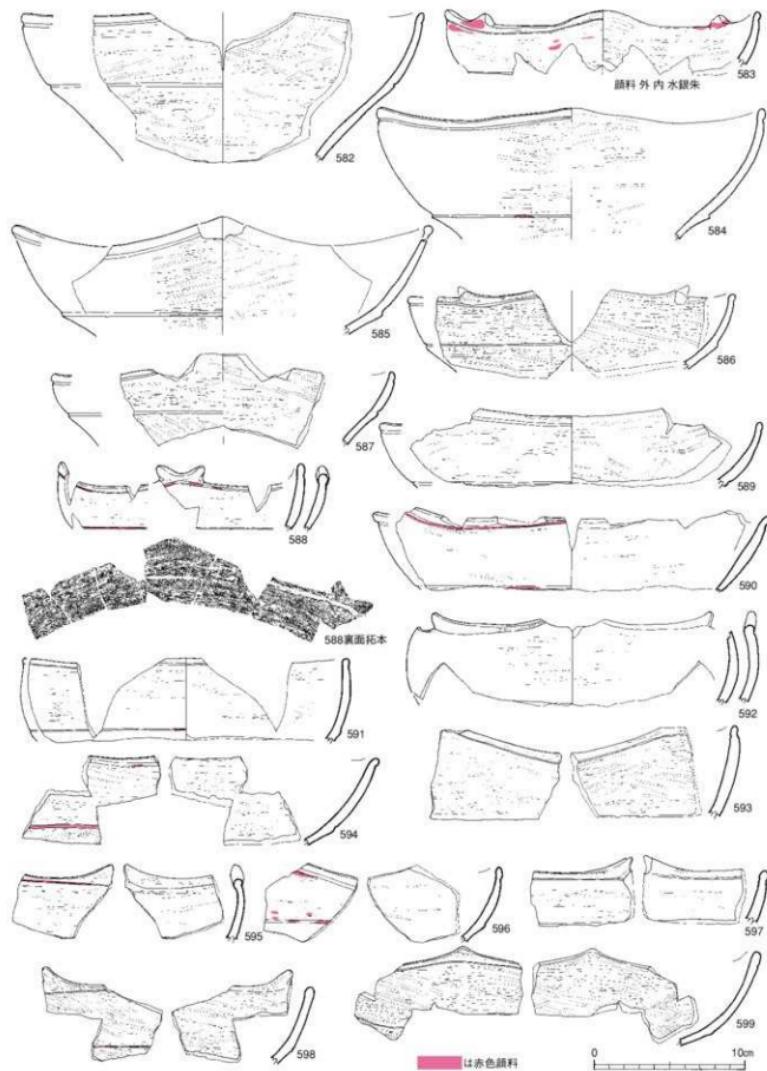




第169図 遺物実測図 (62) C4類土器③



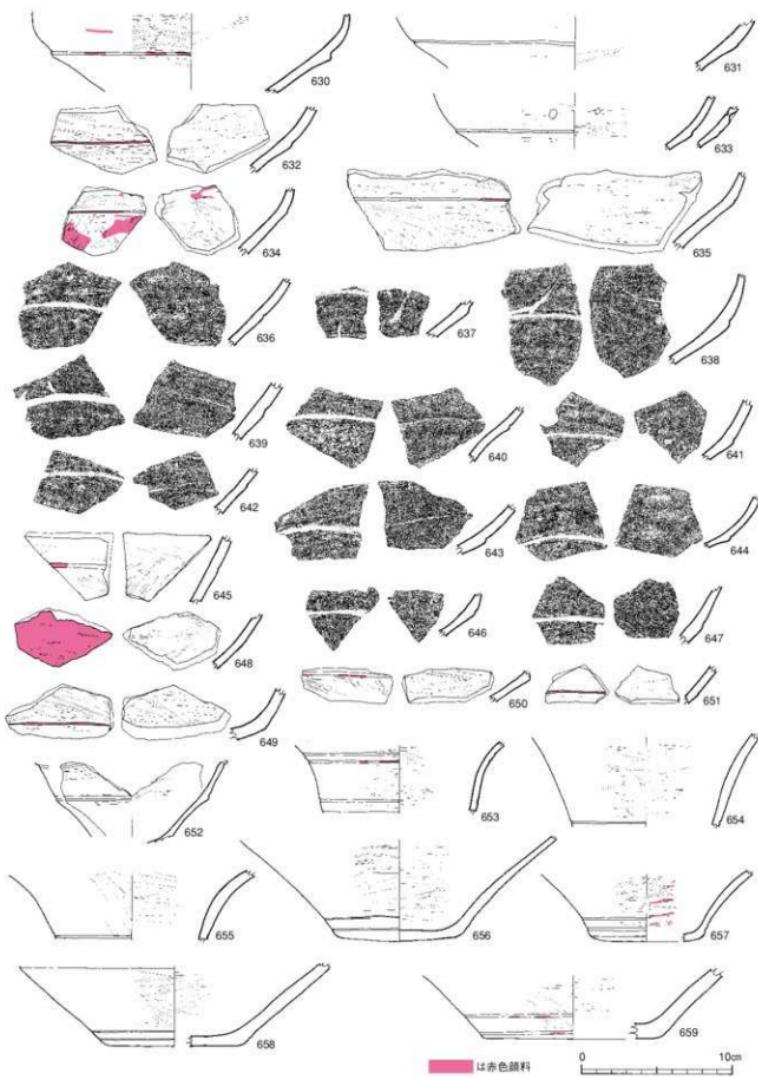
第170図 遺物実測図 (63) C5類土器①



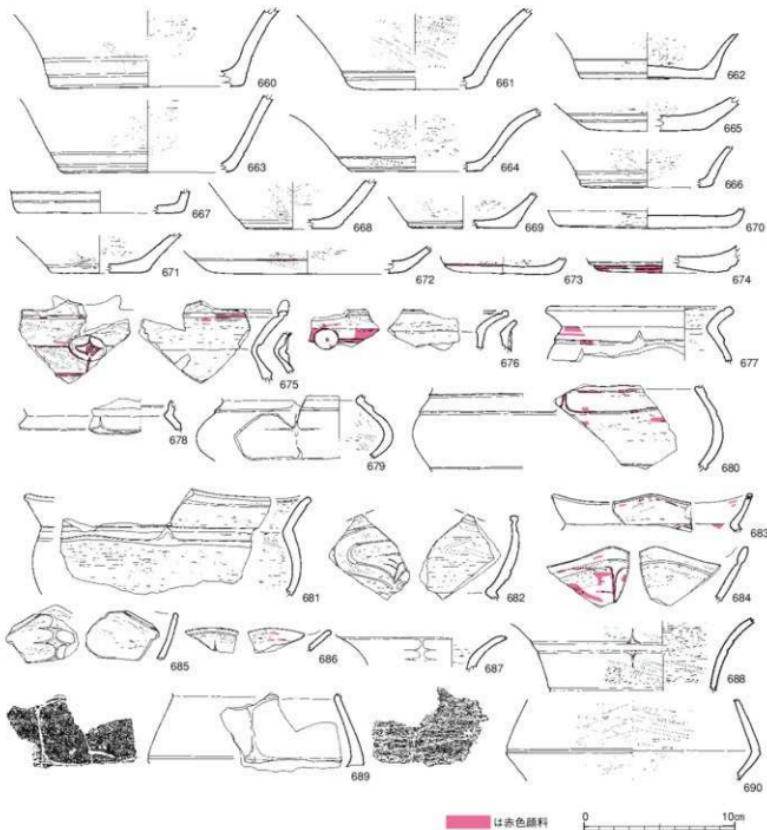
第171図 遺物実測図 (64) C5類土器②



第172図 遺物実測図 (65) C5類土器③



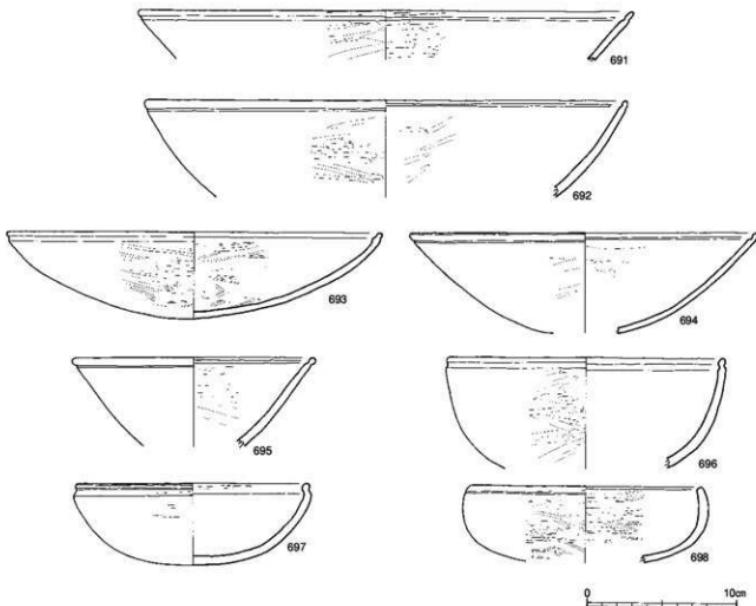
第173図 遺物実測図 (66) C5類土器④



第174図 遺物実測図 (67) C5類土器⑤・C6類土器

し、口縁部内面にも沈線をめぐらせる。565は頸部から胴部への膨らみがやや丸みを帯びている。沈線上で胴部下半を欠損する。568はヒレ状突起を有する。569~575は胴部や口縁部の様相がはっきりしなかったが、残存部位からこの類に属すると判断したものである。569には顔料が観察され、外面がベンガラであることに対し内面には水銀朱が塗布されている。576~582は胴部に張り出す屈曲を持たないので、わずかな段や沈線を境に曲線的なプロポーションを成す。576・577はその全体的な器形を知ることのできる資料である。577の口縁部は胴

部と比べて器壁が厚い。580は波頭部にリボン状突起を有し、その左右にはヒレ状突起が付くと考えられる。583の顔料は内外面共に水銀朱である。600は波頭部下に継ぎ位の細沈線が短く3本施される。603の顔料は外面がベンガラで内面が水銀朱である。613は焼成前に小さな穴が穿たれている。630~655は胴部片である。653は胴部に2条、底部に2条の沈線が施されている。656~667は底部に2条沈線が施されるものである。668~673は1条のものである。



第175図 遺物実測図 (68) C7類土器①

C 6 類 (第174図675~690)

口縁部あるいは胴部にめぐる沈線文の一部を割り込みによってトゲ状を呈するものである。いわゆる三叉文と呼ばれるものである。30点が出土し16点を図化した。

675・676は三叉文は認められないが、ボタン状の貼付文を有する。675のボタンに施される文様やその下にある垂下する沈線文からこれらと一括して考えた。677~680は同一の器形を呈する。口縁部は外反し、頸部で屈曲して胴部は膨らむ。頸部下に段を有し、その一部に三叉文が施される。679では、更にその下位に十字状に細沈線が施される。681は波状口縁を呈する。恐らくは波頂部下に三叉文が位置するのであろう。682~688は口縁部が内傾しつつ立ち上がり、頸部で屈曲して流水形の器形を呈する。5類に極めて類似した器形である。685と687は同一個体であるが器面の摩滅のためか接合できなかった。口縁部は波状口縁を呈し外面直下に沈線文が施される。そこからトゲ状に沈線が3段割り込まれる。この最下段のものは横位に展開し、おそらく687の上位に見られる沈線文に近い位置につながると思われる。687

は上位の沈線文から2段トゲ状の三叉文が削り込まれている。688は2本の並行する沈線文の一部が各々上方と下方とにトゲ状に沈線文が削り込まれている。さらに、その下位には沈線が一条めぐり、恐らくこれが653の下位2条沈線と同じものになるであろう。

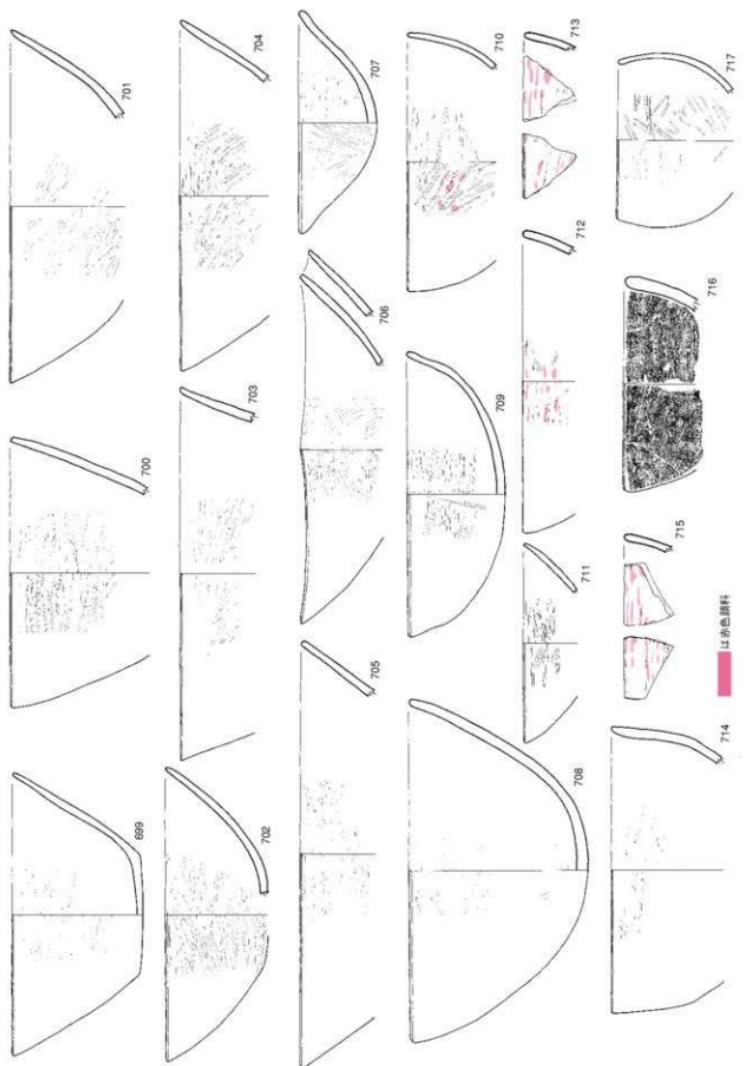
C 7 類 (第175図691~第176図717)

器高が浅く、胴部等の屈曲を持たないものを一括した。94点が出土し27点を図化した。691~698は口縁部から底部まで屈曲部を持たないもので、口縁部に沈線がめぐるものである。皿形あるいは浅鉢形の器形を呈する。695の口唇部は丸みが強い。698は口縁部が内湾気味に立ち上がる。699~717は口縁部から底部まで屈曲部を持たないもので、かつ沈線等が施されないものである。699は平底の器形を呈する。702は平底に近い印象を受けるが707~709のように丸底状のものも見られる。

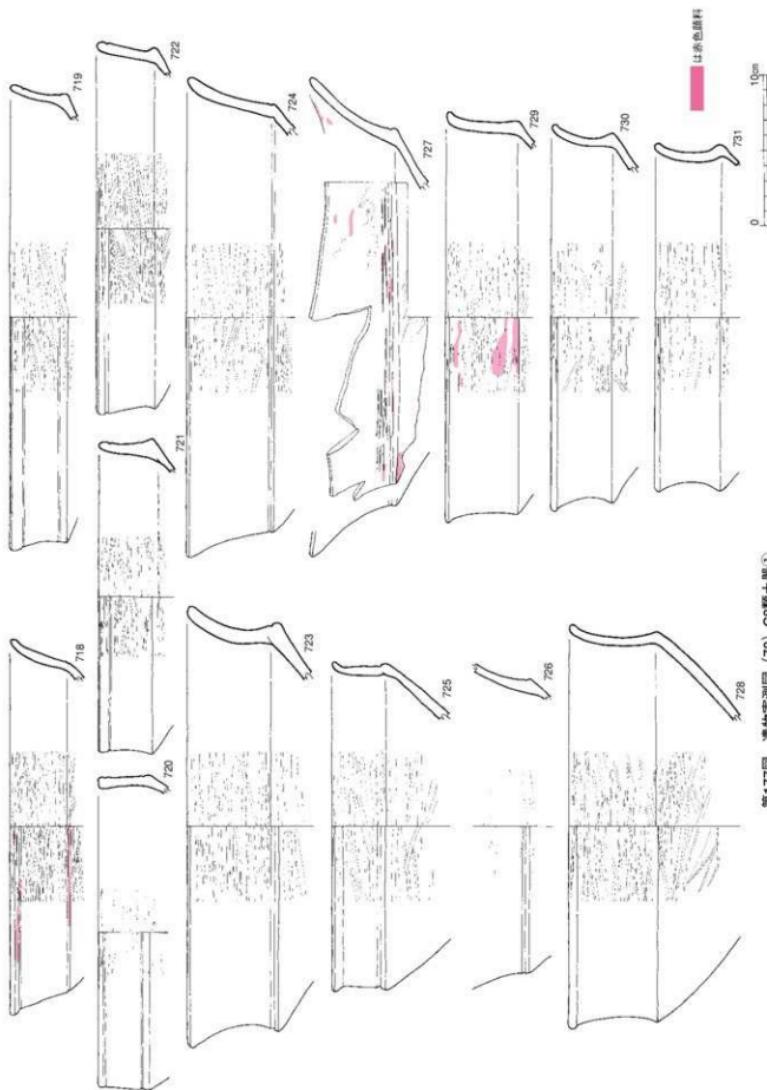
C 8 類 (第177図718~第178図745)

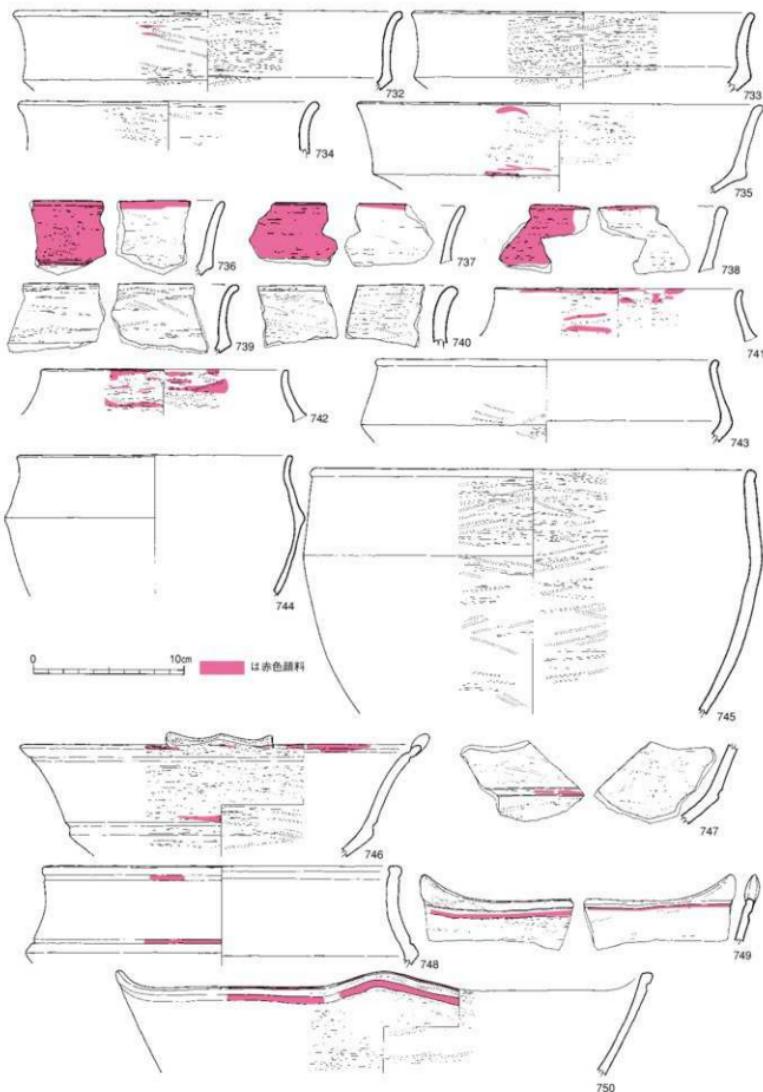
口縁部が外反し、胴部で屈曲する器形を呈する。59点が出土し28点を図化した。718~720は口縁部と胴部の両方に沈線がめぐる。721~722は口縁部にのみ沈線がめぐ

第176図 遺物実測図 (69) C7類土器2

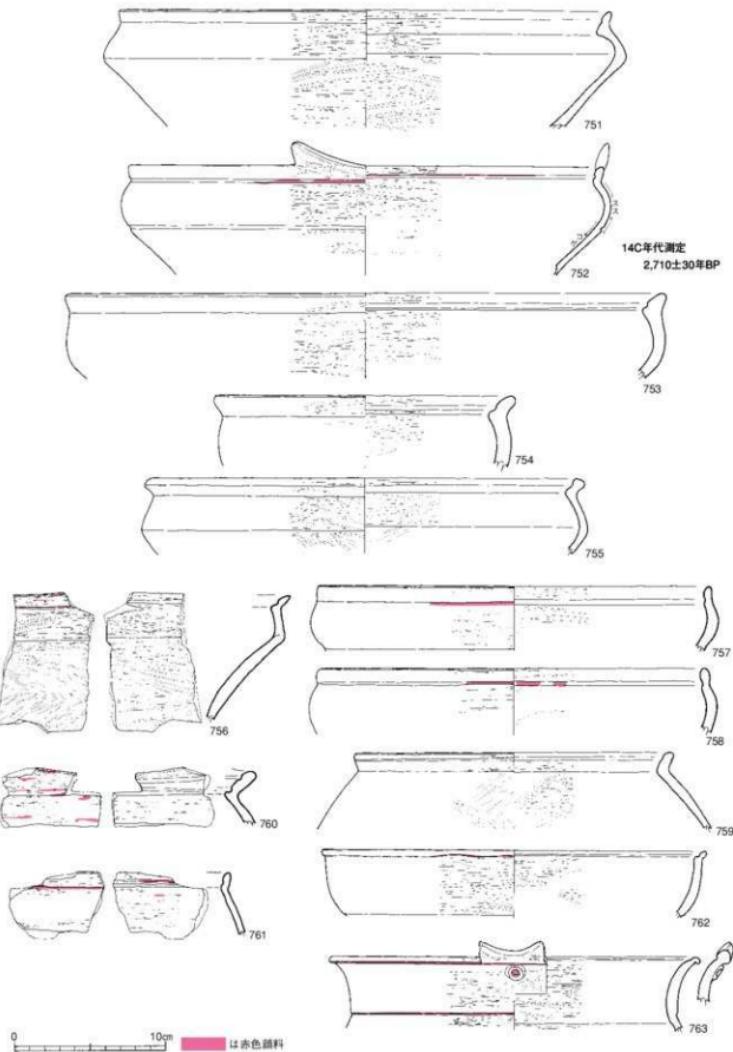


第177図 遺物実測図 (70) C8陶土器

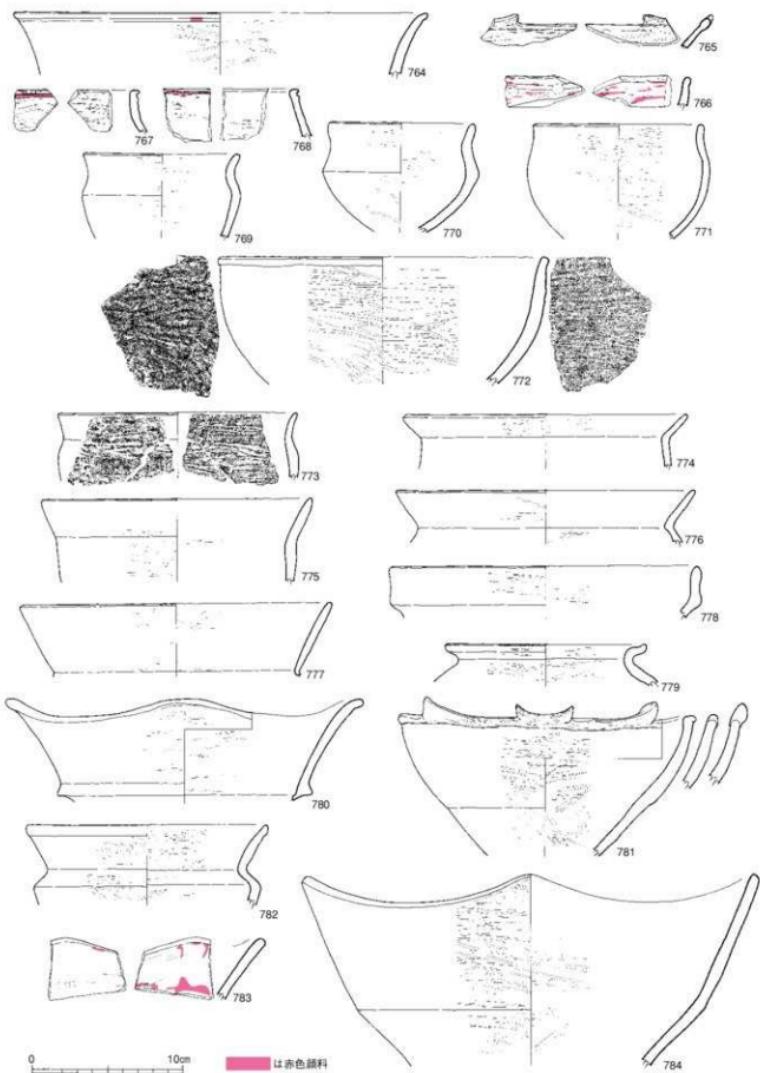




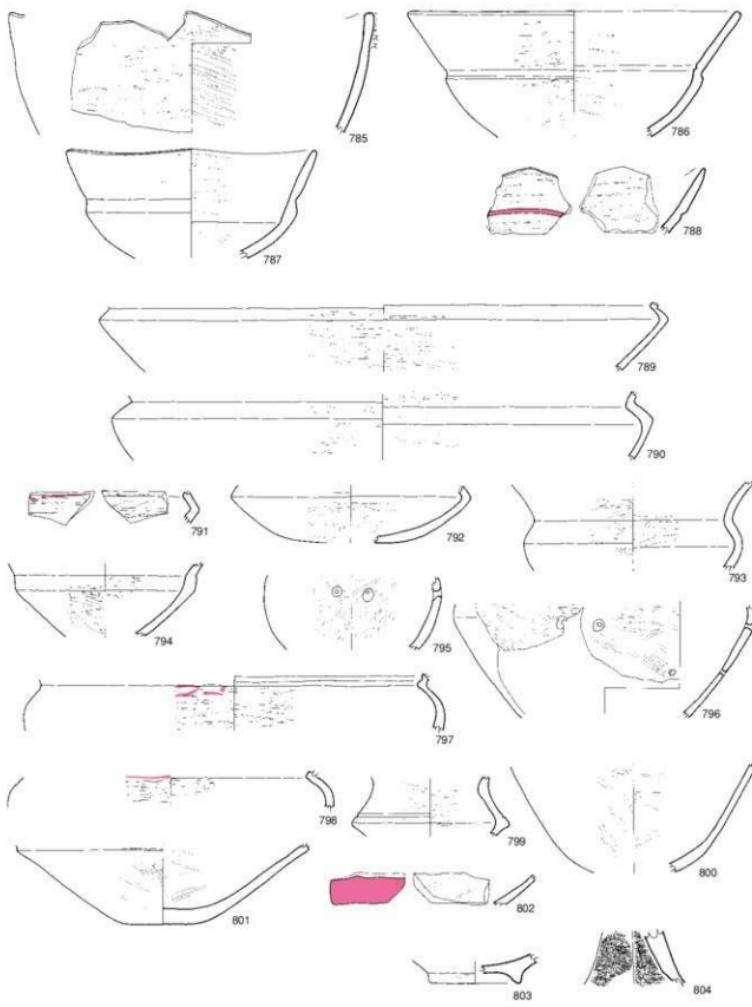
第178図 遺物実測図 (71) C8類土器②・C9類土器①



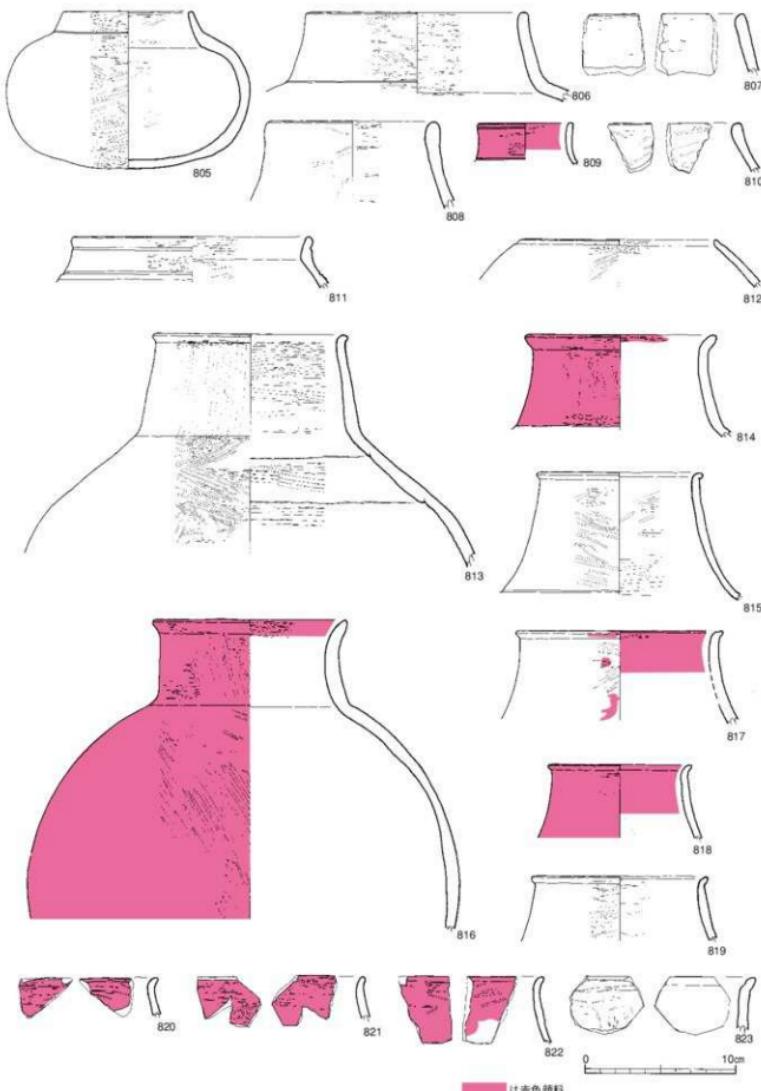
第179図 遺物実測図(72) C9類土器②



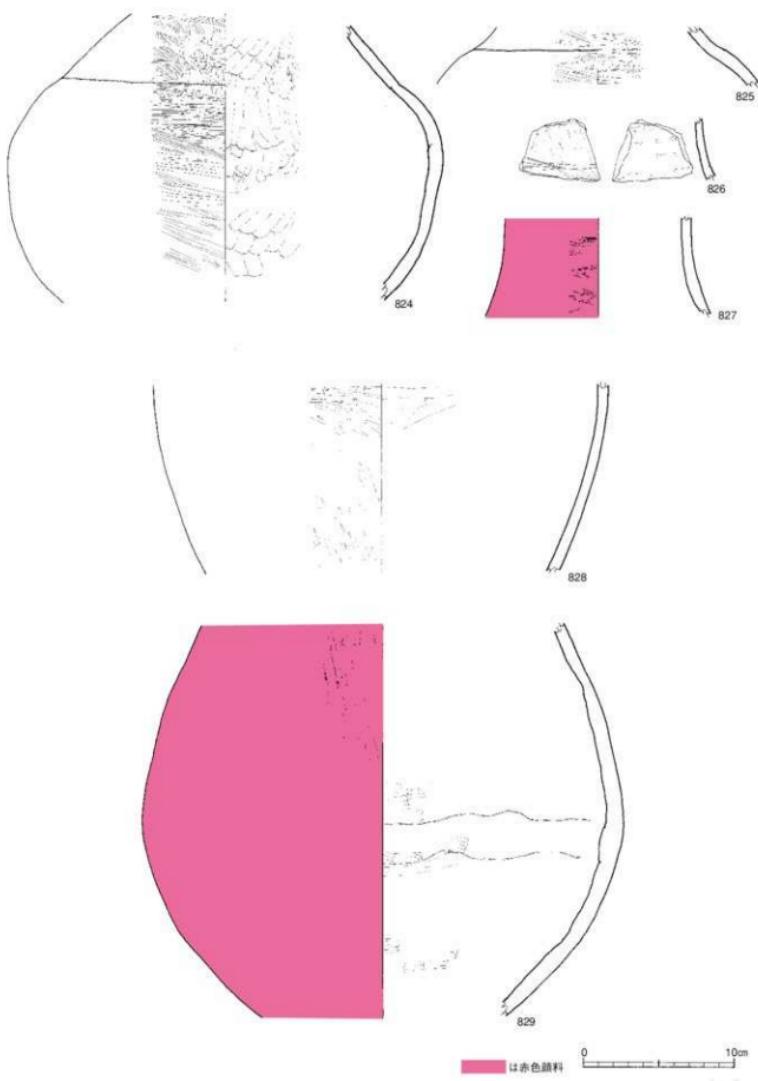
第180図 遺物実測図 (73) C9類土器③



第181図 遺物実測図(74) C9類土器④

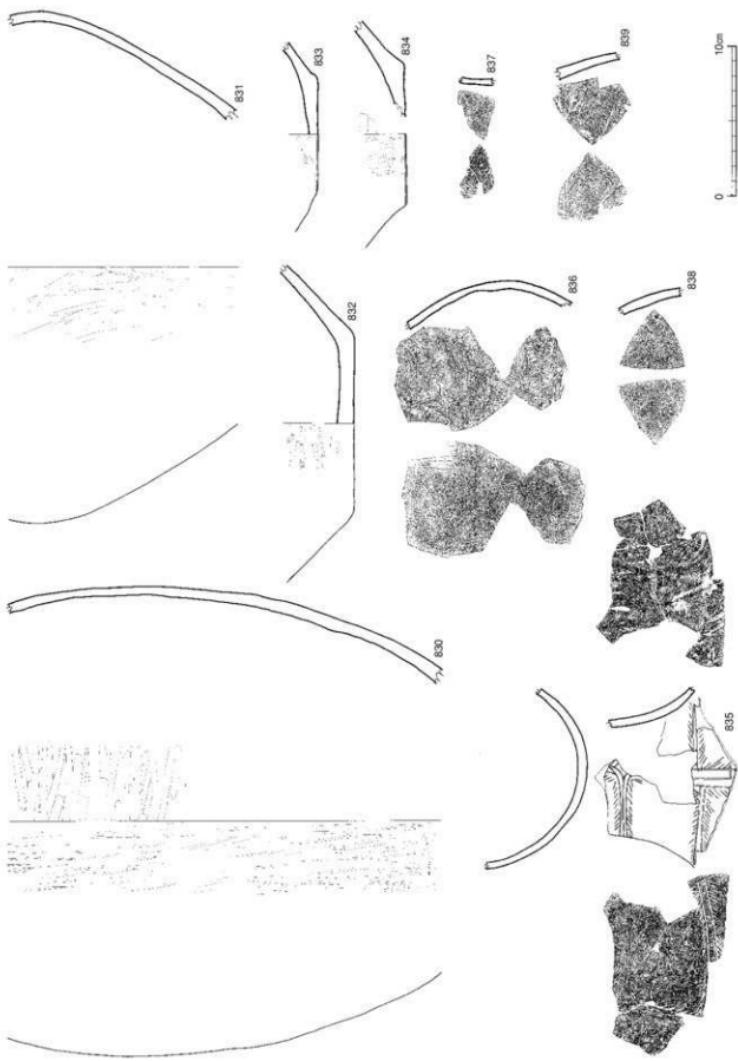


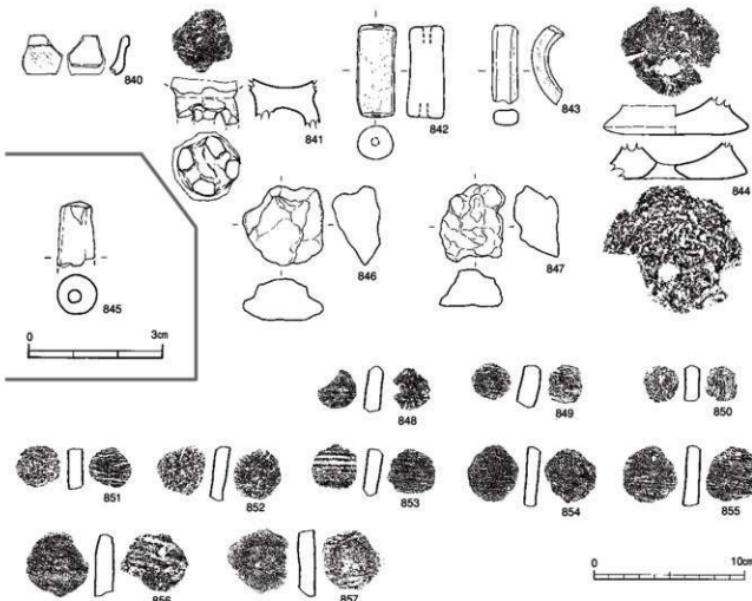
第182図 遺物実測図(75) D1類土器①



第183図 遺物実測図 (76) D1類土器②

第184圖 漢物美測圖 (77) D1灰土器 ② · D2灰土器





第185図 遺物実測図 (78) E類

る。723~727は胴部にのみ沈線がめぐる。727は波状口縁である。728~745は沈線が見られないものである。737・738は胴部屈曲部が粘土の接合部分でもあり、そこで剥落している。745は胴部の屈曲が弱く、あるいは他の類に属するものなのかも知れない。

C 9類 (第178図746~第181図804)

1から8類に分類できなかった口縁部及び、胴部片を一括してここに掲載した。746と747は同一個体である。749と750は口縁部の沈線が太く、部分的であるがケズリによって沈線化させている。751~756は口縁部が短く立ち、内面で段を有する。胴部は膨らみ、沈線あるいは屈曲によって5類のような流水形を呈する。752は放射性炭素年代測定を行い、約2,700年前という結果が示されている。763は、口縁部が外反し、頸部には段を有している。口縁部上端にはリボン状突起が付き、更にその下位には円形の貼付文が付く。781は口縁部にリボン状突起とヒレ状突起を有し、胴部でわずかな段を有する。この段から口縁部までが長いが、5類との関連性をうかがわせる資料である。787は外面で屈曲が見られるが内

面はそれと連動せずに直線的に胴部下半まで至って屈曲するという。外面と内面とで屈曲する部分が違う資料である。粗製土器の1類が出土する跡道でしばしば見受けられるものである。789~804は胴部から底部にかけての資料を一括している。出土点数は本来は多いが、紙面の関係上口縁部等を優先した結果数点しか図化できなかつた。

⑤壺形土器 (3群D類) (第182図805~第184図839)

器面内外面共に、丁寧やナデやミガキなどの調整を施す中で壺状を呈するものを一括して壺形土器として位置づけた。D 1類は、接合作業を経て89点が出土し、このうち30点を図化した。無文のものと有文のものとに大別できる。

805~834は無文のものである。805は小型の壺形土器である。806~808・810は口唇部が丸く厚ぼったい。812は無頭の壺である。813~822は口唇端部が小さく外反して末広がりに頸部へ至り段を有して球状の胴部へと至る。813は、口唇端部が小さく外反するもので、頸部に

は縦位に丁寧なミガキが施される。この頭部には工具を強く押し当てわずかな段を設けることを意識した作りとなっている。内面には粘土接合痕が明瞭に残されている。816は829と同一個体と思われるが接合させることができなかった。829に関しては、上下の判断が困難で、場合によっては天地を違えてしまっているかも知れない。824~827は頭部片、828~831は胸部片、832~834は底部片である。

835~839は細沈線文を施す土器である（D 2類）。D 2類は13点出土し、5点を図化した。835は頭部上位の横断面が楕円形で、胸部になると円形を呈する。頭部上位には横位の細沈線文が3本めぐり、4か所で渋曲して菱形文になる。その上下には細沈線文が連続する。頭部下位には2本の細沈線文が横位にめぐり、上位の菱形文から垂下した沈線文と交わる。これは、残存している部分から想定すると、4か所あったと思われる。なお、図化した全ては同一個体であると色調や胎土などから判断した。

土製品等（3群E類）（第185図840~857）

840は小型の土器である。841は4本の脚を有し、ていねいなミガキが施されている。842は円柱状の土製品で、長軸方向に穿孔されている。全面に丁寧なミガキが施される。843は土器の取っ手である可能性もある。844は底部片であるが、打ち欠きによって底面に穴があいている。845は土製の玉である。846・847は焼成粘土塊である。848~857は土製円盤である。土器片の特徴から晩期として取り扱ったが、後期に属する可能性も否定はできない。

（2）石器・石製品

①概要

縄文時代晩期の石器は、Ⅲ b層を中心に出土している。同包含層内からは、後期から弥生時代にかけての土器が出土しており、石器類に関しても、同様と想定するものである。このため、石器類に関しては、これまでの研究成果を基に磨製穿孔石器類など弥生時代相当遺物と考えられるものについて、次章で報告している。よって、晩期相当層に出土する石器類は、石錐、石錐未製品、石匙、スクレイパー、二次加工剥片、石錐、楔形石器、石核、磨製石斧、打製石斧、横刃形石器、礫器類、磨石・敲石類、石皿類、砾石、石錐、玉類、石製品である。なお、これらの分類概念については第3章を参照されたい。

縄文晩期に位置づけられる全ての石器は総点数で5,182点であり、そのうちツールが1,442点で全体の約28%を占めている。第186図~第191図の出土の様子を見ると、全石材に共通して言えることが、G-4やH-4を中心とする場所に剥片やツールの集中が見られるということである。このことから石器製作がG-4やH-4を中心に行われたことをうかがい知ることができる。第186図

の黒曜石I・IIに関しては、分布の範囲が広範囲にわたっていることが見て取れる。石器の集中はないが黒曜石IIの剥片でG-4にやや多く集まっている。また、黒曜石IIIについては剥片が10点、黒曜石IVについては剥片が842点、ツールが96点である。黒曜石Vは全黒曜石の約75%を占めている。剥片もツールもC~Iの範囲に多く分布していることが分かる。同じような傾向が第187図の黒曜石Vにも当てはまる。報告書掲載のツールを見てみると、黒曜石Iでは、石核6点、石錐が2点、楔形石器が1点、黒曜石IIでは、スクレイパーが1点である。黒曜石IVでは、石錐29点、スクレイパー8点、石核6点、石匙が2点、二次加工剥片1点で、黒曜石Vでは、石錐が7点、石錐未製品、スクレイパー、石核がそれぞれ1点である。黒曜石に際しては石錐、石核、スクレイパーの割合が高くなっている。第188図の安山岩Iと安山岩IIについても黒曜石同様H・G-4での剥片の集中が見られる。安山岩Iのツールは広範囲に分布しているが安山岩IIのツールは剥片集中区付近に分布しており広範囲の広がりはない。安山岩IIではツールの広がりが広範囲にわたっている。報告書掲載のツールを見てみると、安山岩Iでは、石錐28点、石錐9点、石匙と礫器類がそれぞれ4点、スクレイパーと石核がそれぞれ3点、磨製石斧と横刃形石器がそれぞれ1点である。安山岩IIでは、石核2点、石錐、石錐がそれぞれ1点である。安山岩IIでは、磨石・最穀類が11点、石皿類が2点、石錐が2点、打製石斧が1点である。第189図のめのう系では、剥片の集中がH-4に見られる。報告書掲載のツールでは石錐が3点、石匙が2点、スクレイパー、石核、磨石・敲石類、勾玉がそれぞれ1点である。同じく第189図の頁岩I・IIでは剥片の集中がH・G-4で大量に見られる。頁岩IIでのツールは、H・G-4を中心にして近辺に分布している。第190図の頁岩IIIでは、頁岩II同様剥片がH・G-4に集中しツールはそこを中心とした近辺での分布が見られる。頁岩I・II・IIIで頁岩全体の約90%を占めている。報告書掲載のツールを見てみると、頁岩Iでは、打製石斧が12点、礫器類が5点、横刃形石器が3点、石錐、磨製石斧、石核がそれぞれ1点で、頁岩IIでは、打製石斧が46点、礫器類が15点、横刃形石器が11点、磨製石斧が7点、磨石・敲石類と石錐がそれぞれ3点、石錐が2点、二次加工剥片が1点である。頁岩IIIでは、打製石斧が39点、磨製石斧が15点、石錐が14点、礫器類が6点、磨石・敲石類が4点、横刃形石器が3点である。頁岩IVでは、石錐が3点、打製石斧、磨製石斧、石錐がそれぞれ1点である。頁岩Vでは、石錐と礫器類がそれぞれ2点である。頁岩VIでは、石錐2点、頁岩VIIでは、打製石斧が2点、磨製石斧が1点である。頁岩VIIIでは磨製石斧が1点である。これらのことから、頁岩については、打製石斧や磨製石斧への加工が多く行われているこ

とがうかがえる。

②石鐵（第197図～第201図）

石鐵と判断できるものは、Ⅲb層から80点、Ⅲa層から20点、Ⅲa'層から37点出土し、そのうちの98点を図示した。

I類（1～9）

側縁が直線的であり全体の形状が正三角形を呈するものである。基部の抉りの状態により3つに分類した。

1～3は基部に抉りが浅く入るタイプのもので、2と3は1.5cmを超える中型～大型のものであり、2について表裏とも剥離面を利用したものである。4は基部の抉りがV字状に深く入るもので、正三角形タイプでは9点中1点のみが該当した。石材は佐賀県腰岳の資料に類似し、左右のバランスや厚み等均等に整形されている。

5～9は基部に抉りがみられないものである。5は基部がややふくらんだ形態となっている。8は自然面を大きく残している。

II類（10～31）

側縁が直線的であり全体の形状が二等辺三角形を呈するものである。大きさは底辺が広いタイプと長身タイプ、長身で大型のタイプに分けざるに抉りの状況で細分化した。

10～12は二等辺三角形で底辺が広く抉りが浅くみられるものである。10は脚部が一部欠損してはいるが、全体的に丁寧な剥離が施され左右対称となっている。13～14は二等辺三角形で底辺が広く抉りがないものである。14は、どちらかといふと円錐とも捉えることができる。15～19は長身タイプの二等辺三角形で抉りが浅くみられるものである。15は、背面の剥離面を残し両縁に深い剥離を施している。16～18は側縁が緩やかな曲線（外反）を描いている。20～23は長身タイプの二等辺三角形で抉りが深く施されているものである。20は脚部が左右対称となっていないが、脚部先端が突っている。24・25は長身タイプの二等辺三角形で抉りがほとんど見られないものである。25は剥離面の大小が激しく雑な様相を示している。26・27は脚部が一部欠損している為、明確に分類できないが、長身タイプの二等辺三角形で抉りが入る可能性が強いと思われるものである。26は背面が平たく腹面が丸みを帯びやや肉厚な形状となっている。28～31は最大2.4cm以上の大型長身タイプの二等辺三角形で、抉りの浅いものから深いもので配列した。28は先端部が鋭く尖り両縁に細かな整形剥離を施している。

III類（32～47）

先端が尖り側縁が緩やかに曲線を描き抉りが浅く入るタイプのものである。全体的に中型から大型のものが多い。形状の特徴から正三角形タイプと二等辺三角形タイプに大きく分類した。

32～39は全体の形状が正三角形タイプのものである。

ほとんどのものが、先端から脚部に緩やかな曲線を描くが、33は先端の尖りを強調する形状（先端から胴部中央や上までは内湾しその後緩やかに外湾しながら脚部に向かう逆S字状の側縁）となっている。40～45は全体の形状が二等辺三角形タイプのものである。40と41は先端の尖りを強調する形状となっている。45は側縁の細かな剥離があまり見られない。46・47は先端や脚部が欠損しているが、その形状の特徴からⅢ類の可能性が強いと考えられるものである。

IV類（48～66）

全20点中黒曜石を用いたものは15点で、その中でも腰岳産資料に類似したものは14点含まれている。残りの1点は上牛鼻産資料に類似したものと考えられる。抉りの状態や肩部の位置、肩部と脚部の広さ等の特徴から次のように分類した。

48～55（I Aa類）は抉りが浅く入り肩部が上位に位置し脚部へ行くにしたがって広がるタイプのものである。全体で8点と一番多い数である。48～50は肩部の張り出しを強調し脚部を意識した形状となっている。52・53は先端部が欠損しているがその形状の特徴からこのタイプの可能性が強いと考えられる。54は主剥離面を大きく残し側縁の一部を整形しているのみであり、いびつな形状である（製作途中のものか）。55は先端部が欠損しているが肩部の張り出しや脚部が強調された形状である。56（I Ab類）は抉りが浅く入り肩部が上位に位置し肩部の幅と脚部の幅がほぼ同等のものである。側縁が内湾し肩部の張り出しがより強調されている。57（I Ba類）は脚部が一部欠損しているが、肩部が中位にあり肩部の幅と脚部の幅がほぼ同等のものである。側縁が内湾し肩部の張り出しがより強調されている。

58～61（I Aa類）は抉りが深く入り肩部が上位にあり脚部へ行くにしたがって広がるものである。58は細かな整形剥離が丁寧に施されている。61は肩部がより先端近くにありU字状の抉りが入り脚部の作出を斜めに行っており。62（I Ca類）は肩部が下位に位置し脚部が広がるもので、小型で薄い作りとなっている。肩部から先端部へ直線的に側縁が伸び先端部を尖らせている。

63～65は抉りがみられないタイプのものである。63（III Aa）は肩部が上位に位置し、脚部が広がる。小型ではあるが厚みのある形状となっている。64（III Bc類）は肩部が中位に位置し、肩部の広さが脚部の広さよりやや広めとなっている。65（III Cb類）は肩部が下位に位置し、肩部の広さと脚部の広さが同じものである。66と67は未製品である。66は押圧剥離が全体に施されていない。67は、製作の途中で先端部分が欠けたであろうと考えられる。

V類（68～72）

剥離が大きく施され、しかも厚みのあるタイプの石鐵である。72は一部に細かな整形剥離が見られる。

VI類（73～98）

欠損品及び未製品を集めた。多くのものが先端部の欠損が目立つ。75・76・79・80・82・84・86は主要剥離面が広く残っている。84は、細かな整形剥離が目立つ。87は鋭く尖った先端部が残っているが形状は不明である。

91は製作途中の石鏃であるが、96～98はスクレイバーの可能性も残る。

③石匙（第202図）

11点中8点図化している。いずれの資料も、抉り部は1.5cm～2.5cmの範囲に収まり定型的と言えるが、刃部の器形や大きさ等個体差が大きく、石器の使用→欠損→再加工過程を通じて生じた差異と見てよいだろう。基本的な器形により、欠損部位の再加工調整の丁寧さに差異を感じられる。柳葉形は側縁部の欠損に対し、細かで丁寧な刃部調整を施しているが、横長楕円形の資料は、下側縁部の再加工は丁寧に行なうが、側縁部及び上側縁部の調整は粗雑である。器形上の差異は、単に素材剥片の器形に由来するのではなく、中心的な作業部位が側縁部である柳葉形と下側縁部である横長楕円形の機能差に起因し、両形式に用途的差異があった可能性を示すと思われる。

I類（99～103）

99は器形が柳葉形を呈し、刃部のエッジが鋭い。100は、使用による刃部の磨滅が顕著である。101・102は欠損後再加工を施しているが、101は再加工後、更に欠損している。101・102の再加工部分を観察すると、刃部の表面観が内湾している。歯の解体処理等、用途を推定するのに一助となる視点である。103は表面左側縁部が大きく欠損し、つまみ部を含めて整形や刃部作出が不十分なことから未製品の可能性が高いと思われる。

IIa類（104）

表面右側縁部を欠損後、比較的粗雑な再調整を施している。

IIb類（105・106）

いずれもつまみ部の中心軸は、やや右側にずれている。右手を利き腕とする人が多い状況下で、中心軸の右側へのずれには合理性があると言える。206はつまみ部が欠損し刃部調整も粗雑であることから、つまみ部欠損により破棄した未製品の可能性がある。

④スクレイバー（第202・203図）

17点中14点図化している。

I類（107～111）

107はめのう製で母指状を呈する削器である。刃部尖端部に微細な調整痕と使用によるエッジの潰れが見られる。108は礫素材を縦に分割し、表面のみを周縁部から中央部に向けて剥離整形している。左右側縁部の横断面に45度程度の傾斜がつくことから、搔器と考えられる。109は上縁部及び裏面左側縁部に使用痕が確認される一方、裏面右側縁部の調整も丁寧で刃部と思われる。110・111は尖頭状石器もしくは石鏃の未製品の可能性も考慮に入れておく必要がある。

II類（112～114）

112は長軸長1.7cm程の極小の資料で、削器と考える。113は右側縁部に基部調整を施し、左下側縁部には微細な刃部調整及び使用痕が観察される。114は下縁部に使用痕が確認され、刃部縦断面が45度程度の角度を有することから、搔器であろう。

III類（115）

鋭利なエッジを有する剥片を素材とし、表面上部の鋭利な角を潰し指で抉みこむ面を確保し、下縁部の刃部加工は微調整にとどまる削器である。

V類（116～118）

116は両側縁に内凹弧状を呈する2つの刃縁部を有する削器である。117は器厚3mm未満の極薄の剥片の左・下側縁部に微細調整を施した削器であり、使用痕が明瞭に残される。右側縁が欠損しており、右側縁部にも刃溝を有していた可能性がある。118は削器である。上端部の角潰しにより基部とし、両側縁部に表面側から微細な刃部調整を行なっている。特に右側縁部の使用痕が顕著である。

V類（119・120）

119は、右側縁部及び右下縁部に使用痕が確認できる。120は搔器と考えられ、右側縁部には刃潰しを行い左側縁部には使用痕が確認される。

⑤二次加工剥片（第203図：121・122）

174点中2点図化している。

121は左下側縁部に、122は下側縁部に微細な調整痕が確認できる。

⑥石錐（第203図）

22点中14点図化している。つまみ部及び錐部をもつ資料はもちろん、明瞭なつまみ部は確認できないが、丁寧な整形及び調整により長軸状の器形を有するものは、本類に含めた。いずれの資料の錐部にも、回転線条痕や頗著なエッジの磨滅は確認できないことから、木や革など比較的軟質の素材に對して使用したのではないかと推察される。

I類（123～128）

いずれも器形が待ち針状を呈し、錐部の横断面は四角形状を成す。123～125はつまみ部が横幅1cm程度で厚さが5mm程度の扁平な面で構成され、126・127は厚さが8mm～1.5cm程度と若干厚い。つまみ部作出に際し、主要剥離面や礫皮面等の平坦もしくは微細な凹みを意識的に生かしていると考えられる。つまみ部の縦線に微細な磨滅が確認できる資料も散見され、直接手を持って反転回転させて使用したものと考えられる。128のつまみ部は左右が非対照である。欠損している錐端部～1cm上部の部位と錐端部上部2.5cm～3.5cmの部位の縦線のエッジには微細な磨滅が確認できる。縦線の磨滅範囲が2か所に見られるることは、一度反転回転させて穿孔を施した後、再度捻じ込んだ後に反転回転させたことを示すと考えられ

る。そのことは、穿孔対象物が比較的軟質で薄いもの（皮革など）であったことを示唆していると捉えられる。

IIa類 (129)

129は明瞭なつまみ部を持たない。錐部上部の枝線のエッジには微細な磨滅が確認でき、着柄との関連の可能性も考慮に入れたい。

IIb類 (130・131)

130は錐部正面観が若干波状に湾曲しているが、長軸の中心はずれていない。錐端部2cm上部から錐部中程にかけての枝線のエッジに微細な磨滅が確認でき、IIa類の129と同例と思われる。131の錐部下端部周辺の稜には、若干の磨滅が見られる。

III類 (132~134)

いずれも、つまみ部を直接手に持ち使用したことが明瞭にうかがえる資料群である。132は主要剥離面の多くを残し、直接指でつまむのに十分なつまみ部を有する。錐下端部1cm程度には、微細な磨滅が確認できる。133は錐下端部8mmに横走する回転線状痕が明瞭に残され、回転による磨滅が円形の横断面を作出している。134は左側縁部を中心に調整加工を施し、刃部を作出するスクレイパーと考えられる。しかし、主要剥離面のはとんどをつまみ部とし、下端の尖端部に部分的な錐部を作出している可能性があると考え本類に含めた。

IV類 (135・136)

いずれも棒状の錐部を残す欠損品であり、本来はI・IIa・IIb類に属する可能性が高い。

⑦楔形石器（第203図：137・138）

5点中2点図化している。

137の基部の縦断面観はレンズ状を呈する。本来基部（敲打面）は138のように平坦をなし、使用による剥離により平坦面が崩れて137のようにレンズ状に変形していくと捉えられる。138は縦断面観が三角形状で基部に自然面を残す。上下端部に位置する基部と刃部には使用痕が明瞭に確認できる。

⑧石核（第204図～第206図）

石核は、64点中20点図化している。

Ia類 (139)

一撃で打面を形成し、表裏一枚ずつ剥片をとっている。

Ib類 (140~143)

140は自然面を打面として剥片をとり、形成された面を打面として更に剥片をとっている。141・142は表面では同一打面から剥離がなされ、裏面は周縁部から剥片をとっている。143は表面を中心に、部分的に裏・側面でも剥離面が見られる。

IIa類 (144)

自然面を打面とし、主要な縦長の剥片と別打面からの剥片がそれぞれ1枚ずつ作されている。

IIb類 (145~147)

146の表面右側には細かな剥離が見られる。147は表面左側に若干の打面転移が見られる。

IIc類 (148~150)

148には剥離が数か所なのに対して、149・150は微細剥離が数多く見られる。150には左側面にも剥離面が形成されている。

IIIa類 (151・152)

151の上縁部には比較的細かな剥離痕と若干の磨滅が見られることから、上縁部を刃部とする砾器類の可能性もある。152の石材は安山岩I類である。上面からの剥離を中心とするが、151は右側面に、152は下面にも剥離痕が見られる。

IIIb類 (153~156)

153は安山岩I類製である。裏面左側に細かな剥離痕が集中し、刃部の可能性も考えられる。154は安山岩IV類である。裏面右側縁部に細かな剥離痕が見られ。未製品の可能性も考えられる。155は左上縁部のエッジが磨滅し、右側縁部に細かな剥離が集中する。基部・刃部と見なし、砾器類に含まれる可能性もある。156はめのう製である。上端部に細かな調整痕が見られ、刃部の可能性もある。

IVc類 (157・158)

157は自然面を打面とし、表面及び右側面から主要な剥片をとった後、打面転移による細かな剥離を行っている。158は安山岩IV類の長軸長20cm程度の本遺跡最大の石核資料である。自然面を打面とし、打面転移による剥離を行っているが、一部別打面による剥離面も形成されている。

⑨磨製石斧（第206図～第208図）

磨製石斧には、打製石斧や敲打石に転用する事例が見られるが、側縁部等に著しく再加工の剥離を有するものでも刃部が磨製石斧の特徴を留めている資料については、本類に含めた。

96点中28点図化している。石材は、頁岩でも硬質頁岩の類がほとんどで、樹木切断や加工のツールとしての硬性に留意した石材選定がなされていると捉えてよい。

I類 (159~170)

159・160・162・164~166・167は両側縁部の中央部から基部側にかけて、敲打痕が顕著に見られる。162・164・167については、敲打痕が側縁部から裏表面上をめぐっている。159の敲打痕は側縁に直交する筋状に形成されていることが見て取れる。159~163・167は、基端部にも敲打痕が明瞭に残される。166の側縁部には使用痕が顕著に残される。これらのことと総合的に勘案すると、I類に属する資料には、真ん中を削り貫いた棒状の柄に磨製石斧を装着した状況がうかがえる。ただし、確実な固定のための着紐や楔の使用などの痕跡は観察から確かめることはできなかった。歯先か横糸かという問題が出てくるが、刃部見通しについては、159・161・164・168は刃縁部のラインが表裏面の中心軸を通り、上下の偏りは見られない。しかし、表面観に転じると、

159・164・168など僅かではあるが、左右のいずれかに刃部の偏りが見られる。161は表面右刃縁欠損後著しくバランスを失った後も再加工を施し使用を続いている。163は表面右刃縁欠損後、使用を継続している。以上のことから、これらの資料が偏刀であった可能性が想定できる。一方、刃部見通しで刃部のラインが表面側に円弧状を呈する160・165・166・169については、器厚が2cm未満と薄い点が共通する。169に至っては裏面刃縁部にのみ刃縁に直交する削痕が確認できることから、以上の4点については、横刃の可能性を否定できない。170は長軸方向に折損後整形を施したと思われるが、刃部作出が不明瞭なため用途特定は困難である。

II類 (171~175)

171・173~175は器面上に丁寧な整形の一端が観察できることから、定格式石斧の再加工品や欠損品と考えられる。172は、両側縁部に敲打痕や剥離痕を有し着柄を想定させる。刃部見通しで刃縁に偏りがあることや刃部裏面側に削痕が見られることは、横刃を示唆すると考えられる。

III類 (176~186)

この類に属する資料は、176のように両端部に刃部を有するタイプと177~179のように刃部と対軸上に基部を有するタイプが存在する。刃部の形態に目を転じると、179のような刃部が尖頭状を呈するタイプと他の資料のように刃部が直線を呈するタイプに分けられる。本類の着柄の可能性については、着紐痕は確認できないが、178・179・181・182のように側縁部に凹み状の剥離痕を有する資料は散見できる。176は刃部の剥離欠損後、再加工を施している。178は本来I・II類に属する資料だったと思われるが、長軸方向に折損後、ノミ形再加工した資料と想定される。179は再加工品であるが、側縁部に意図的な凹みをなす剥離痕と部分的な使用痕が見られ、着紐の痕跡をうかがわせる。180の器面には微細な削痕と刃縁部に若干の刃部整形痕が確認される。裏面刃部に見られる粗雑な剥離痕には微細な使用痕が見られることから、実際に使用したものと捉えうる。181~183は基部を残す欠損品、184~186は刃部を残す欠損品である。182は刃部の剥離面に微細な使用痕が確認され、再利用の可能性を含む。

⑩打製石斧 (第208図~第215図)

214点中101点国化している。打製石斧全資料中の横長剥片と縱長剥片の素材割合に大差なく、礫素材からどのように剥片を抽出するかには規則性はうかがえない。

I類 (187~193)

187~190は刃部周辺でふくらみをもつ器幅がやや縮まり、一定幅で基部に至る器形で側縁の横断面は円形状で、エッジは鋭くない。いずれも完形品である。187・188は磨製石斧の転用品である。191は基部の欠損品である。192・193には使用痕が明瞭に確認できることから、基部の可能性を否定できない。

II類 (194~197)

194は剥片の主要剥離面及び礫皮面のほとんどが残される。195は基部に大きな欠損があるが、基端右部には使用による磨滅があり、欠損後も使用が継続されたと思われる。左側縁部の磨滅が進んでいる。また、表面に顯著な擦痕があり、磨製石斧を再加工・再利用した可能性がある。196・197は欠損品である。197は器厚1cm程度、幅長10.5cmと扁平で極幅広である。両側縁部及び刃縁部ともに、使用による磨滅が著しい。

III類 (198~285)

198~215は扁平打製石斧の完形品である。いずれも抉り部幅は4cm~5cm程度の範囲に収まる。体部の長軸長及び短軸長、刃部の形状等個体差が大きいが、欠損・再加工等による器形変化に起因すると考えられる。198~207は刃部幅に対して長軸方向に長いスマートな器形を呈する資料群である。一方、208~222は刃部幅の広いラケット形の資料群である。223~238は欠損後再加工・再利用が確認できる（想定される）資料群である。227の刃側縁部の磨滅は、打製石斧が側縁部も作業部位として（刃部を倒して）使用されたことを示すものである。238はII類に属する資料である。刃部の使用による磨滅が著しい。239~285は欠損品である。239~250は剥離により使用を中止したと考えられる資料群であり、元の器形をとどめる。252~279は基部残存欠損品、283~185は刃部残存欠損品である。

IV類 (286)

ノミ形石斧（本稿では磨斧Ⅲ類に分類）の転用品である。基部側・刃部側共に欠損しており、刃部側の粗い調整により再加工・再利用している。側縁部の銳利な角を剥離により潰している。

V類 (287)

基部側及び刃部側が共に欠損した資料と思われる。部分的に擦痕が残されることから、磨製石斧の転用品であろう。

⑪横刃形石器 (第215図~第219図: 288~305)

36点中18点国化している。

288~253は刃部が直線的若しくはやや外円弧状を呈する資料群である。そのうち、礫皮面を多く残すのは、288・290・291・294・295・297・298については、細かな調整が施されている。特に297の刃部には、顯著な使用痕が確認できる。299は刃縁部を細かな調整で整形し、剥離面が等間隔・等寸で丁寧である。300~304は刃部が大きく外円弧状を呈する資料群である。礫皮面を多く残すのは、300~302が挙げられる。304の刃部の表面觀はS字状を呈し、ナタを想起させる形状である。305は刃部の表面觀が波状を呈し、特徴的である。

⑫礫器類 (第219図~第224図)

54点中33点を国化している。

II類（306～321）

306・320は頁岩製の縦長剥片を素材とする。主要剥離面を異にするだけで、器形的・機能的には横長剥片と同様と想定される。307・319の刃部には使用痕が確認され、319は2辺の上下縁辺部に使用痕が確認される。円弧状を呈する刃部は、横長の器形とあわせて空中上で対象物を切断する鎌状の機能を示すものと思われる。312の刃縁部右側は両面側から調整を施し、使用による磨滅が著しいに対して、左側は片側からの調整のみで使用痕も不明瞭である。調整部位及び使用部位の偏りは、対象物を空中で切断する削器の使用法をうかがわせるものである。なお、右側縁部は欠損の可能性もある。313は調整痕が一面からのみで粗雑である。打製石斧の未製品の可能性も考えられる。310・311・315は、刃部右側縁部を中心に使用痕が確認できる。310は器厚5mm未満の極薄の剥片を素材としている。317・318は刃部に微細な使用痕が見られる。320・321は円錐状素材を使用し、基部は自然面を利用し一辺のみの調整により内円弧状の刃部を作出していることから、空中上で対象物を切断する使用法を示唆している。

IV類（322～324）

322は表面右側縁部に部分的な使用痕が確認できる。右側縁部の断面が45度程度の斜角を有することから、搔器の可能性も考えられる。323は縦長剥片の2側縁部に刃部形成を施し、鎌状の用途を持っていたと想定される。324は調整が粗く、刃部作出が明瞭でない。打製石斧等の未製品の可能性もある。

V類（325～336）

325・327・331・333・336には繩皮面が残される。特に333は表裏面に繩皮面を多く残す。表面左側縁部は調整痕が細かく刃部と考えられ、一方右側縁部は基部調整と考えられる。334・335は打製石斧の基部残存部の再加工の可能性もある。336は幅長12cmと幅広で、打製石斧Ⅲ類の刃部残存の欠損品の可能性も考えられる。V類のほとんどの資料は15cm～2cm程度と比較的厚みがあり、頁岩製で刃部の使用痕が打製石斧同様な顕著な使用痕を有することから、打製石斧同様掘り具の機能が想定できる。しかし、332は器厚が1cm未満と薄く、V類中唯一安山岩Ⅲ類で刃部調整も細かく丁寧であることから、削器の機能も考えられる。

VI類（337・338）

337は刃部が円弧状に形成され、表面右下部の刃縁には使用痕が確認できる。基部には2か所の半円状の穿孔が確認され、用途（起因？）は不明である。338の左側縁部には1か所半円状の穿孔が確認できる。打製石斧や石錘の欠損品もしくは再利用品の可能性もある。

⑪磨石・敲打類（第224図～第228図）

449点中49点図化している。磨面や敲打痕、凹みの有無は同一資料中に混在しているため、機能的に区別せず磨石・敲打類と一括して扱うこととする。また磨製石斧

等からの転用品等も本類に含めた。

I a類（339・340）

いずれも長軸長3.5cm程度の小砾素材であり、明瞭な敲打痕は確認できない。

I b類（341～363）

341～347は器厚2.5cm未満の扁平素材を利用している。342は敲打痕が比較的明瞭に残される。344・345は上面観の変形を伴う程度に両側面部に集中的な敲打痕が見られ、345は更に下端部に両側から顕著な磨りを伴う敲打痕が特徴である。349～357は器厚が2.5cm以上の資料である。355～357は集中的な敲打により器形変化が見られる。356は下端部を中心に磨面が顕著で、357は上下端部を両面側から敲打及び磨りにより集中的に使用している。358・359は比較的扁平な素材である。358の表裏面の凹みが微細であるのに対して、359・360は比較的明瞭であり、3点とも敲打痕が周縁をめぐる。361～363の表裏面の凹みはいずれも浅い。361は表面右上部に平坦面を作出する程の顕著な磨面が見られ、362は敲打が著しい。363は側面部の稜に対しても直交する筋状の敲打痕を形成する。棒状の敲石にも同様の筋状の敲打痕が確認される資料が、本遺跡において複数確認されており、同様な事例は他の遺跡においても認識されつつある。出土する時代検証や同資料の確認など、今後検討を要する。石器製作用の工具等用途の可能性も含め、一考すべき資料である。

I a類（364・365）

極微細な敲打痕が側面部に見られる程度である。

I b類（366～374）

365～371は側面部を中心に敲打痕が見られる。一方、372～374は側縁部に加えて、表裏面にも敲打痕が形成される。371の表裏面の敲打痕は浅めであるのに対して、372～374の表裏面の敲打痕は顕著である。

III類（375～387）

382～379は器厚が2.5cm未満の比較的扁平で棒状を呈する。375は特に使用の痕跡は確認できない。376～379には、378・379の端部の欠損・剥離のような敲打使用に起因する可能性の他に、微細な削痕が見られたりする資料があり、磨製石斧の未製品や礫器類の可能性も考えておく必要がある。なお、378の下側縁部は剥離後に使用した痕跡もうかがえる。380・381には顕著な敲打痕等確認できない。382は上下端部に、383には右側縁部に敲打痕が見られる。なお382は石英製である。384・385は欠損品である。384は石斧の可能性の他に、欠損部位に使用による磨滅が確認できることから、礫器類としての再利用の可能性もある。386も敲石もしくは磨製石斧等の欠損後の再利用品と思われる。387は磨製石斧の欠損後の再利用品と考えられる。上下側縁部に著しい敲打痕が見られる。

⑫石皿類（第228図～第230図：388～395）

57点中8点図化している。

388は、表面の縦軸上に凹みが形成され、削痕も縱走することから、砥石の可能性も考えられる。389・390・393は作業面が平坦で、磨面が顯著である。391は表裏面下部が段をなし、磨面は平坦面を構成する。392は表面の他に左右側面にも磨面が確認できる。394の裏面上部には敲打痕が確認されることから、台石としての機能も想定される。395は作業面の凹みが顯著である。

(⑩) 砥石 (第230図: 396~398)

23点中3点図化している。石材はいずれも肌理の細かい砂岩製である。

396の石材には、ガラス質の粒子が含まれる。刃部は直線的な2辺に施され、器厚は8mm程度と薄い。表面上に折損部の棱線に比べて下部の折損部の棱線は磨滅しており、折損後使用を継続したことがうかがえる。刃部の削痕は概して側縁辺に対し斜交しており、左下側縁の磨痕が進んでいることから、長軸斜方向に使用したと考えられる。刃部断面観が圓丸方形でエッジが鋭くないとことわざで、磨製石器製作に要した砥石の可能性を考えたが、形状や刃部形成から、擦切石器の可能性も一考に入れておきたい。397の表面には長軸方向に顯著な凹部が形成され、縱走する削痕も確認される。398は長軸長30cm強、短軸長8cm未満の器形である。表面の作業面には削痕が無数に縱走し、明瞭な凹みが形成される。

(⑪) 石鍤 (第230図~第232図)

52点中25点図化している。本類のほとんどが円状(長楕円状)の自然縫を用いた砾石鍤である。万之瀬川周辺に位置する本遺跡の地理的環境からも、漁労具が想定される。長軸上の2側面もしくは長・短軸上の4側面に打ち欠きによる抉りを作出し、網掛け部とする。概して、抉り部には敲打による刃潰しが顯著に見られる。

Ia類 (399~404)

399~401は円錐(長楕円錐)を素材とし、402~404は長方形を素材とする。403は上下側面に自然の凹みを有し、着紐痕等確認できないもののIb類の可能性もある。

Ib類 (405~421)

405~408は円錐(長楕円錐)を素材とする。405は上下側面に、406~410は上側面に浅い敲打痕が見られる。407は下側面に自然の凹みがあり、これらの資料は機能的にはIIb類に属する可能性もある。410~413は方形状の縫を素材とする。上下側面に抉り部を作出せずとも、本来有する平坦面を着紐に利用する可能性はあると思われる。410の側面部には側縁に直交する削痕が確認できる。抉り部を作出せずとも、自然の凹みを生かして着紐をしていった可能性を裏付ける資料である。413は上側面に明瞭な敲打痕が確認できる。414~420は不定形状の縫を素材とする一群である。416~418は上側面に、419は下側面に凹みが見られる。420は上側面に側縁に直交する擦痕、下側面には自然若しくは人為的な凹みが確認できる。421は上側縁から表面の剥離面にかけて磨滅が広がり、裏面下側縁のエッジは數条凹みを呈している。い

ずれも着紐痕と思われる。

II類 (422・423)

422は上下側面に磨滅による凹みが確認でき、本類に分類した。

⑫) 尖頭状石器 (第232図: 424・425)

全2点図化している。

いずれも正三角形状に近い器形である。424は周縁から中央部に向けて5mm~1cm程度の粗い刃部調整に伴う剥離痕がめぐる。刃部に使用痕や欠損等見られない。425は尖端部のエッジが鋭く、調整が粗い。

⑬) 五類 (第232図: 426・427)

全2点図化している。石材は、蛇紋岩と玉髓系である。同石材の剥片及び石屑が全く出土していないことから、2点ともを持ち込み品と考えられる。

426は勾玉で「く」の字形を呈する。穿孔中央部が狭く両端部が広いことから、両端から穿孔を施したことがうかがえる。427は管玉で、本来長楕円状の上面觀をしていたと類推される。穿孔の径が同一で円形を呈していることから、穿孔は両端から施されたことや竹串状の道具を使用して穿孔したことが想定される。中心軸が大きくなっている。

⑭) 石製品 (第232図: 428・429)

全2点図化している。

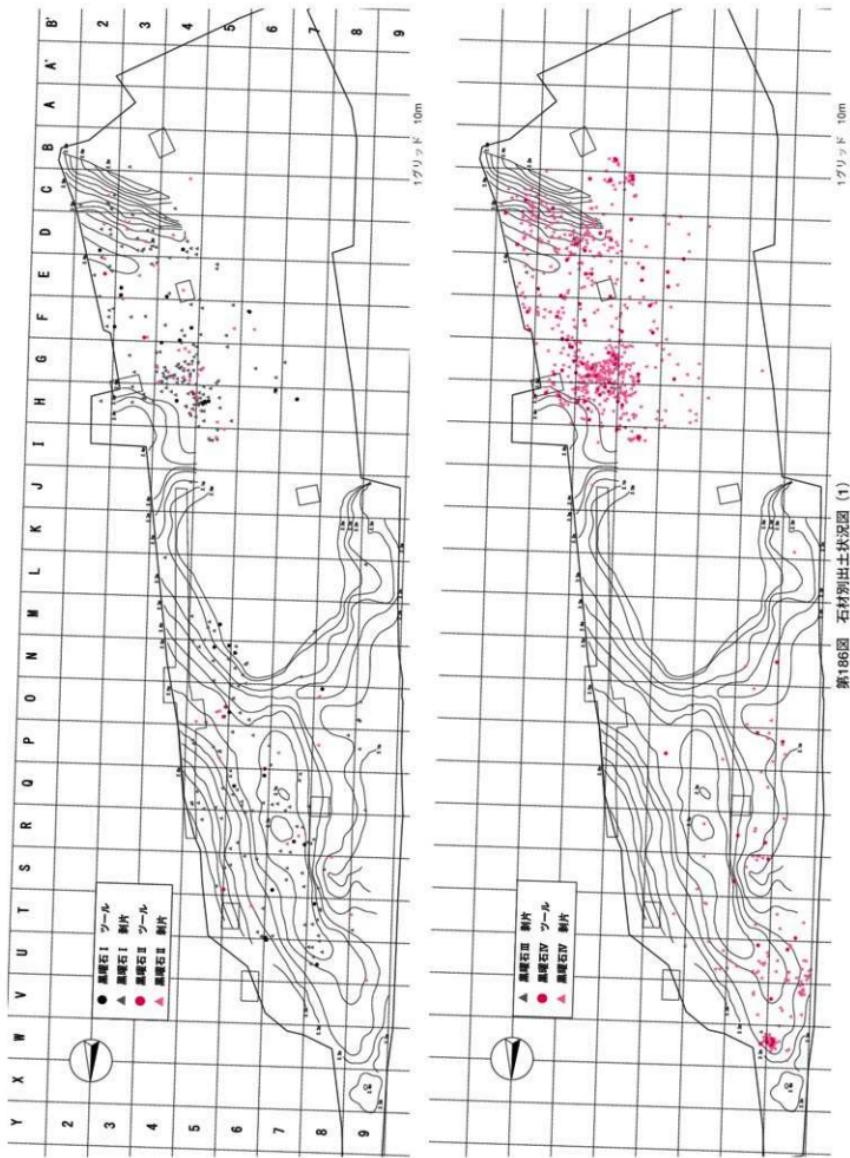
428は部分的に削痕が確認されることから、製品であると考えられるが、用途等不明である。429は凝灰岩製で、本遺跡の調査区内D-6区から斜立して出土した。幅20cm程度の縄文晩期土器が2個体密着して接し、周囲には同種の晩期土器及び輕石製の長楕円錐が2個程散在していた。自然石の利用の他、男性性器を敲打等により表現してある可能性も考えられ、縄文時代晩期相当の陽石と認定するならば、県内ではその類例は極めて少ない。

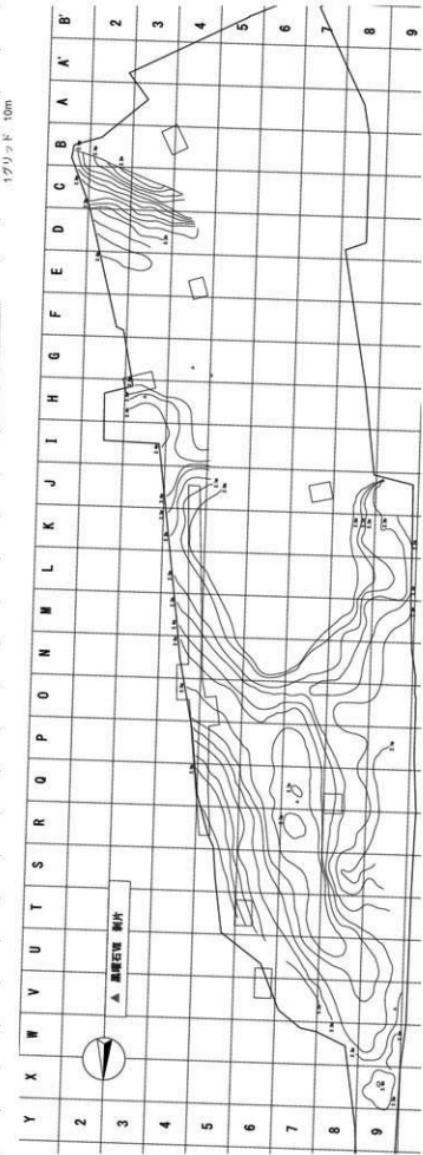
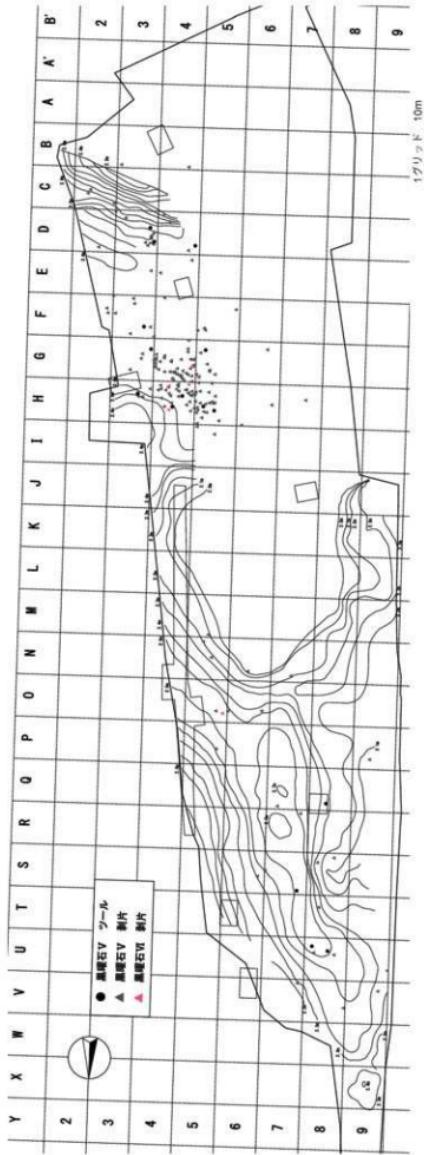
⑮) 軽石製品 (第233図: 430~435)

7点中6点図化している。

430・431はいずれも両面側から穿孔を施したリング状の垂飾品類と考えられる。430の穿孔部半径は1.1cm、431は0.85mmである。穿孔具として石錐を仮定した場合、穿孔部の径と石錐の使用痕部位の断面径が合致するのは、430については該当資料はなく、431については133が該当すると思われる。431は半分程度残存する欠損品である。432・433は表裏面に穿孔をもち、穿孔部位は433が中央部に、432は偏在する。434は直径3cm程度の凹み部をもつ楕状製品である。本県では、草野貝塚や中原遺跡、山ノ中遺跡等で出土例が見られる。435は凹み面を有する石皿状の器形である。表面に2か所穿孔部位をもつ。

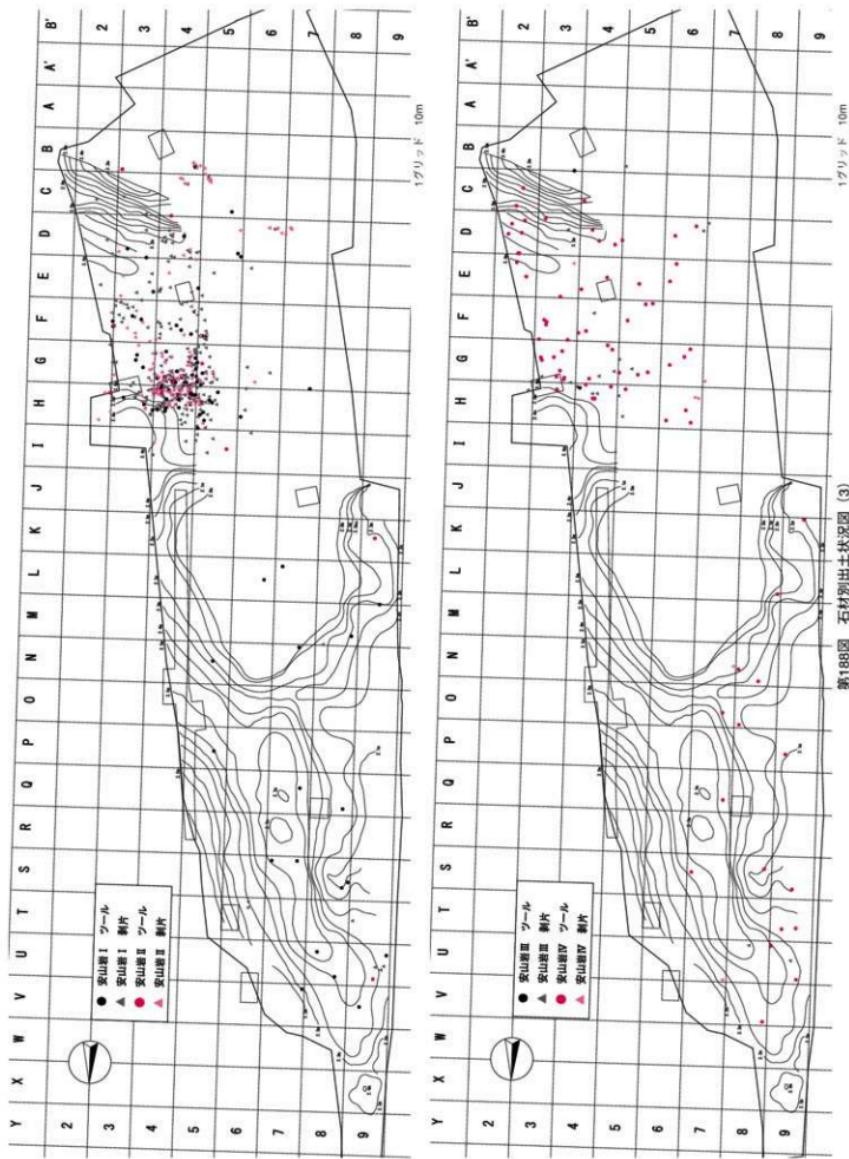
第186図 石材別出土状況図(1)





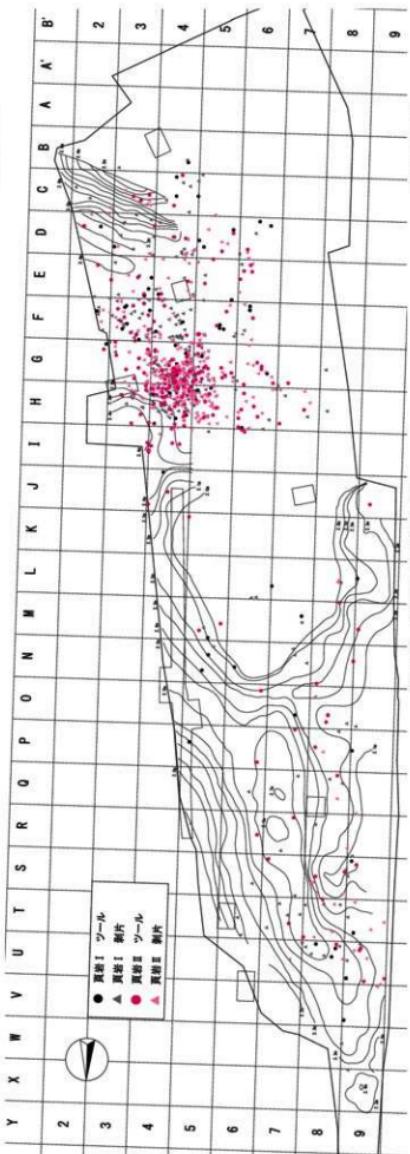
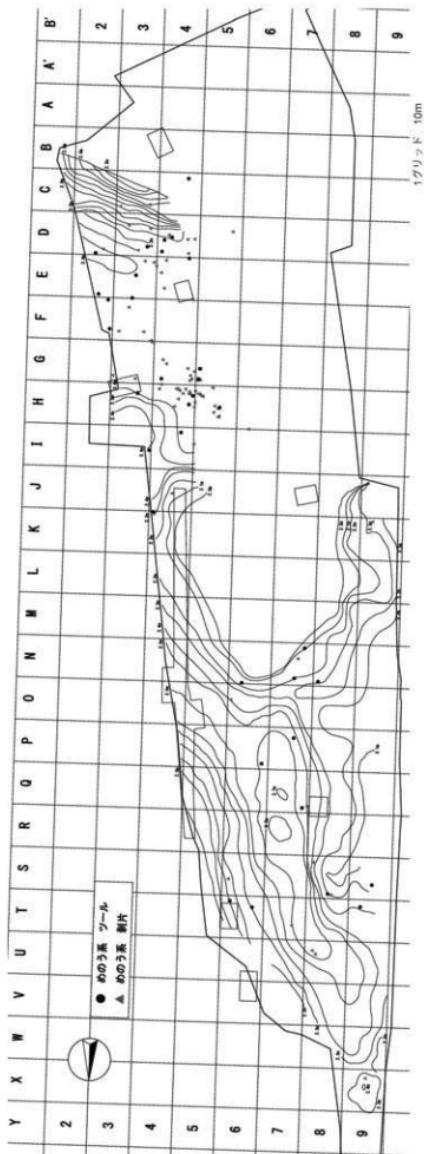
第187図 石材別出土状況図(2)

第186図 石材別出土状況図(3)



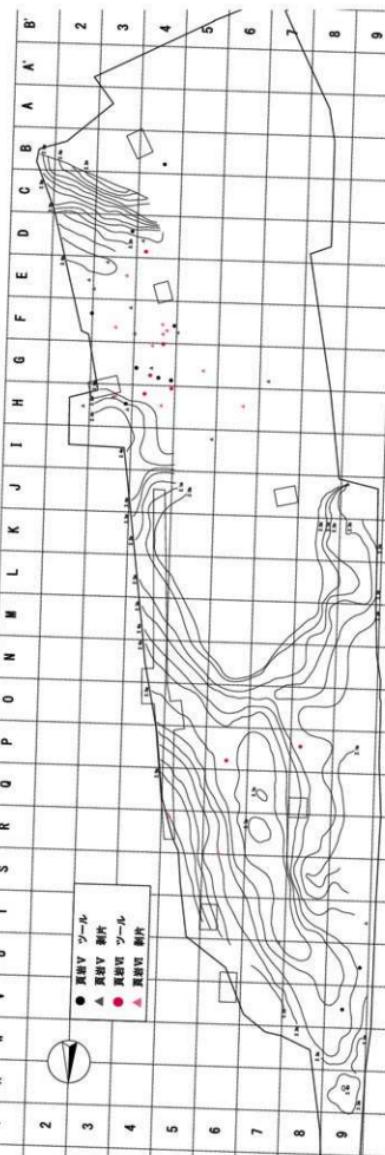
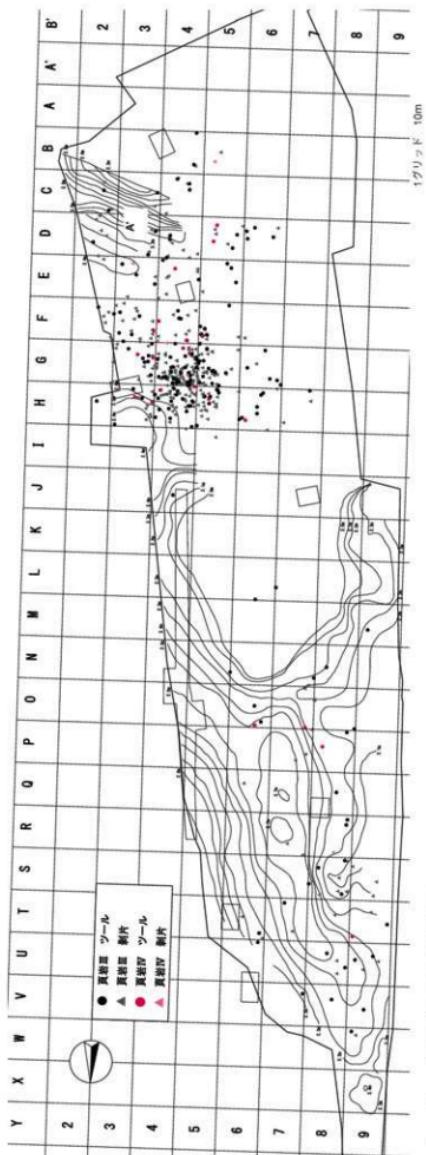
1グリッド 10m

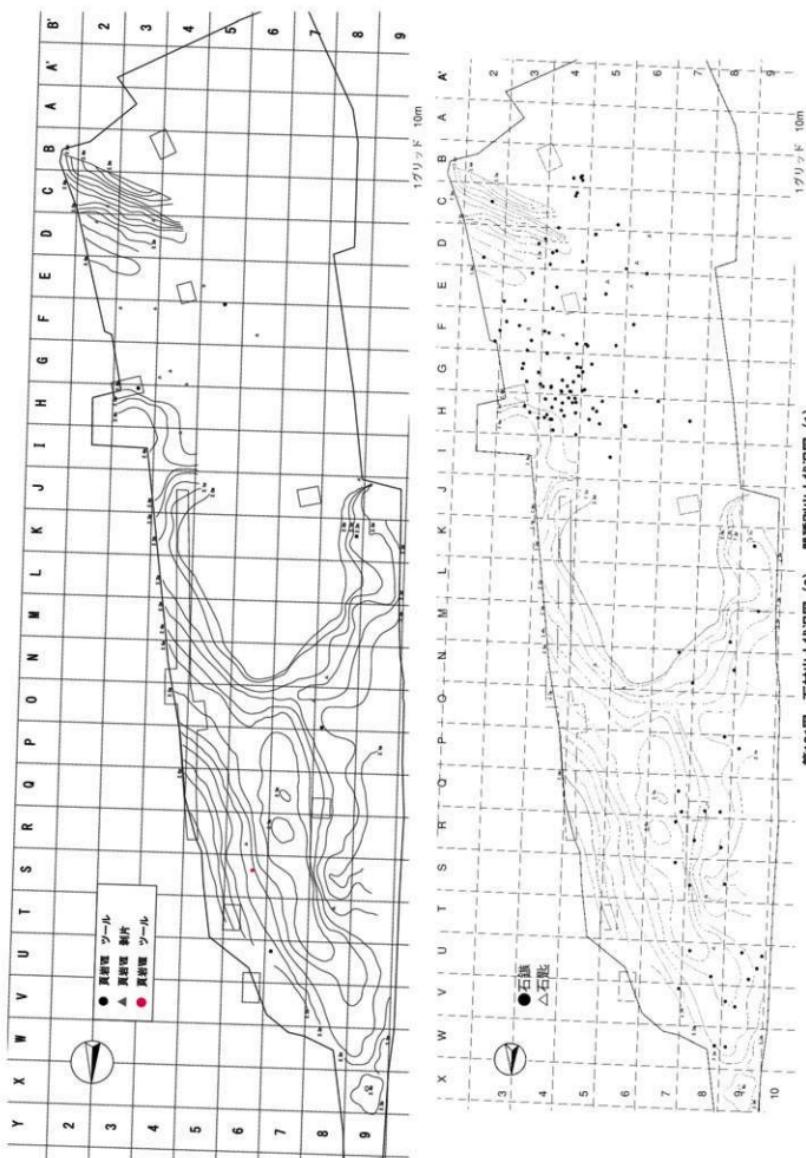
第189図 石材別出土状況図(4)



1グリッド 10m

第190図 石材別出土状況図(5)

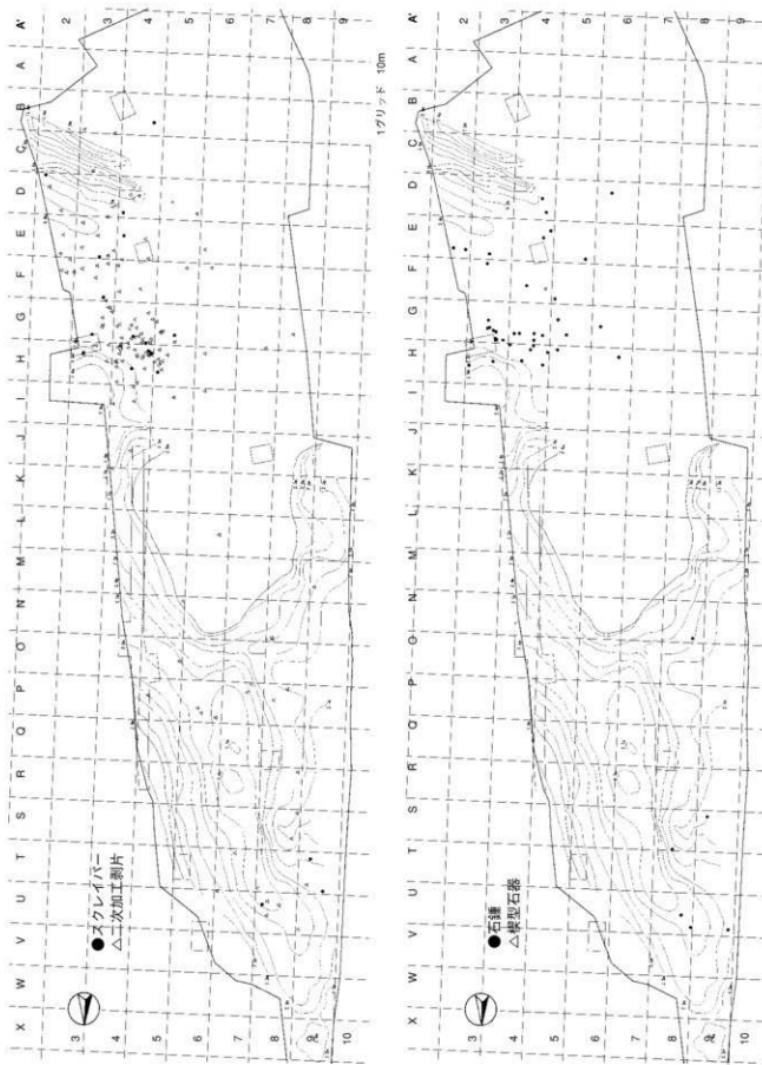




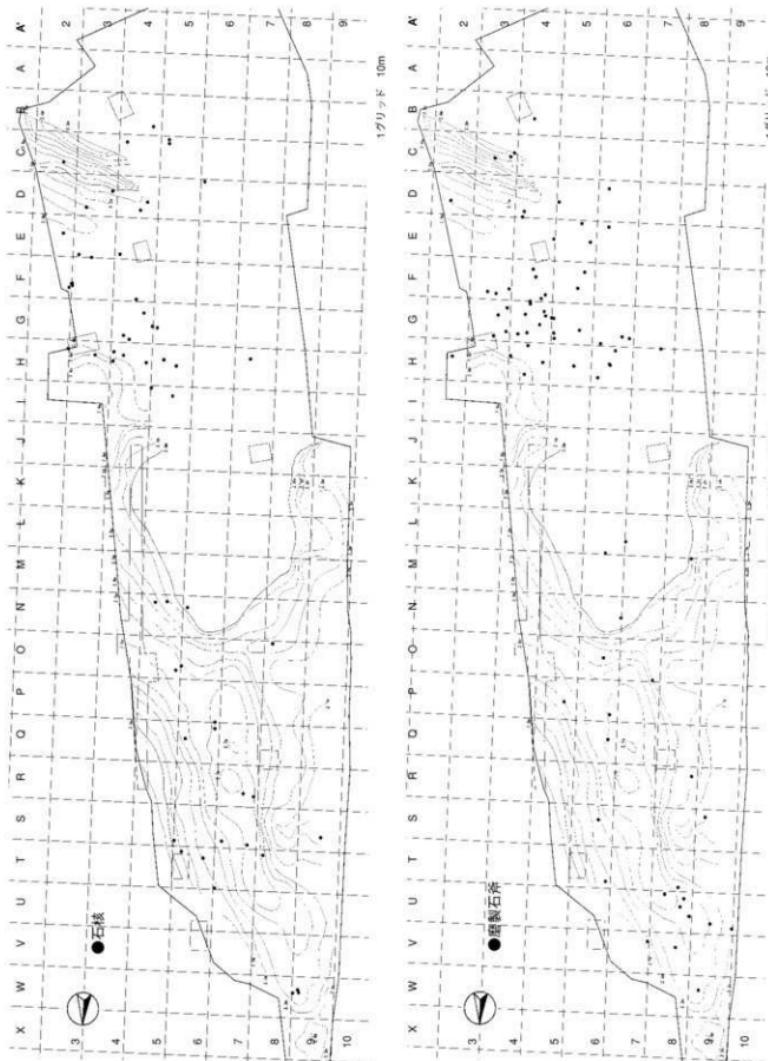
第191図 石材出土状況図(6)・縄繩別出土状況図(1)

1グリッド 10m

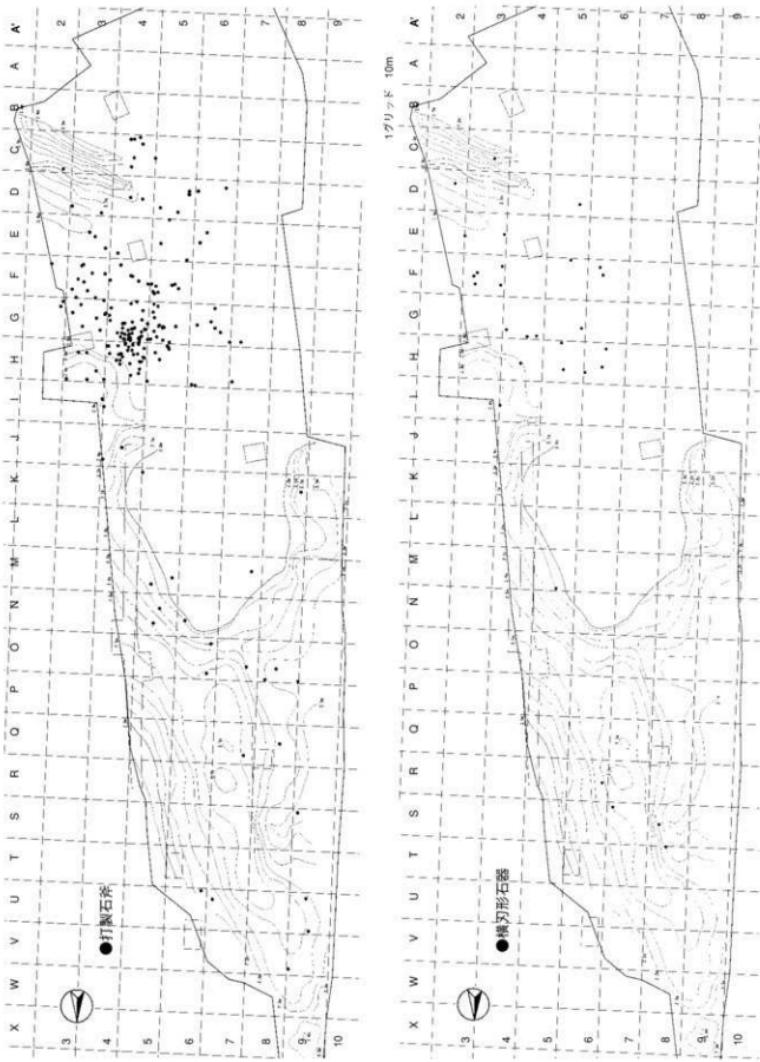
第192図 緑ヶ原出土状況図(2)



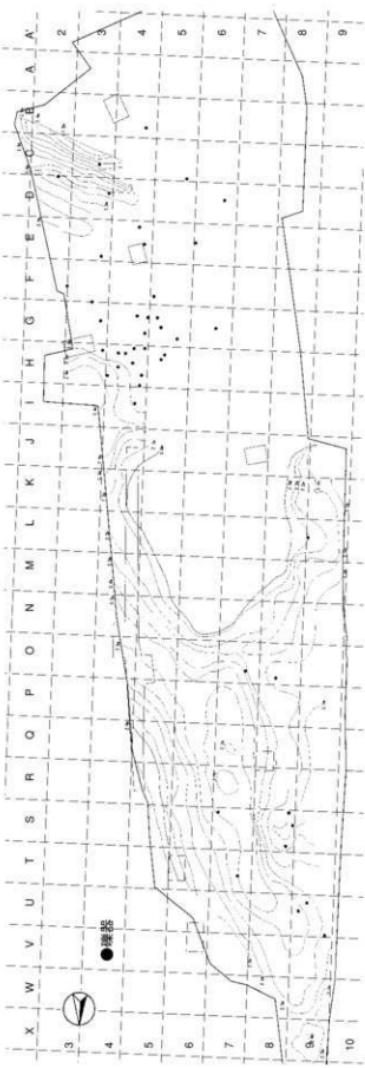
第93図 繩擲別出土状況図(3)



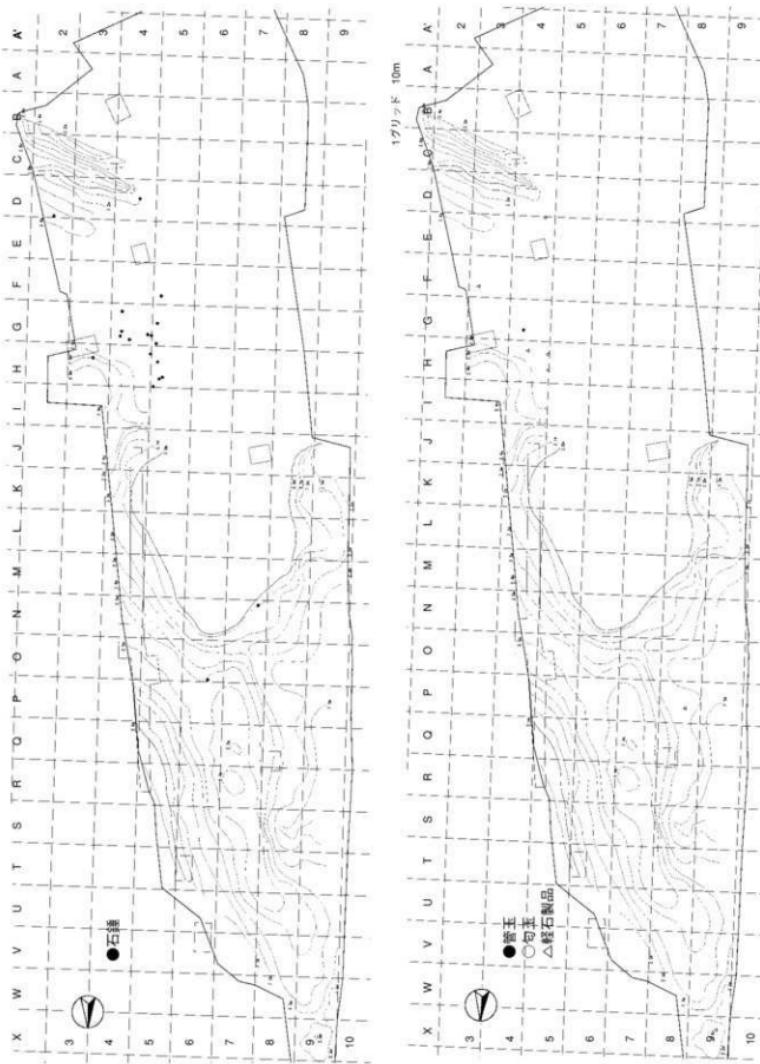
第194図 縦横別出土状況図 (4)

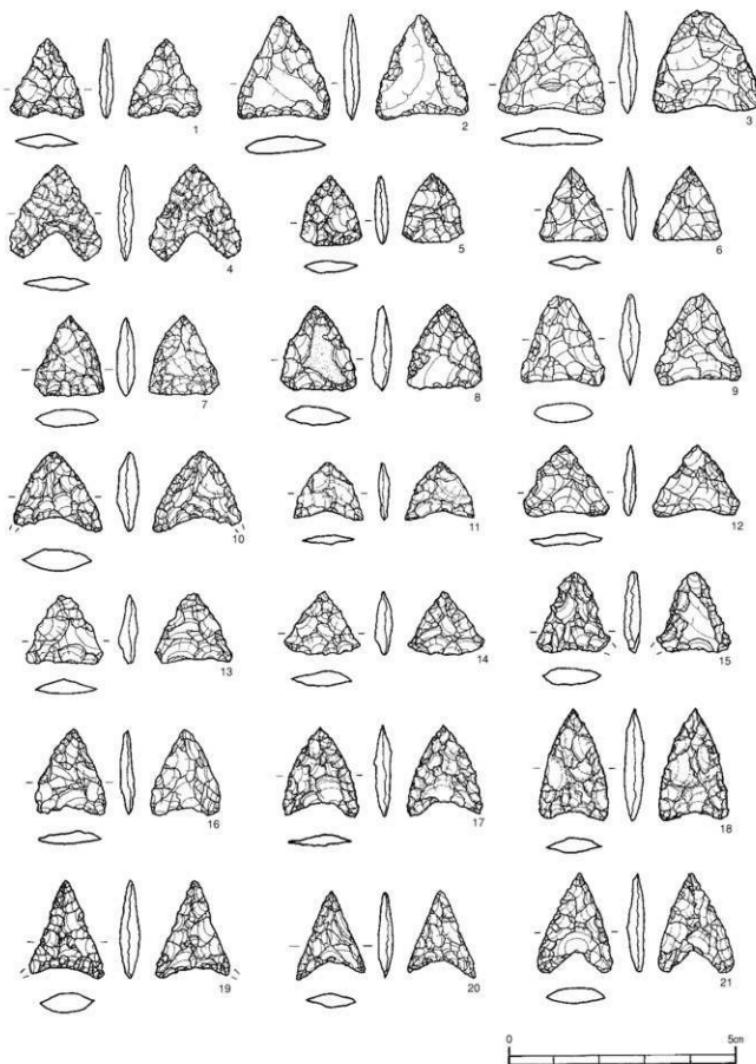


第195図 縱横別出土状況図(5)

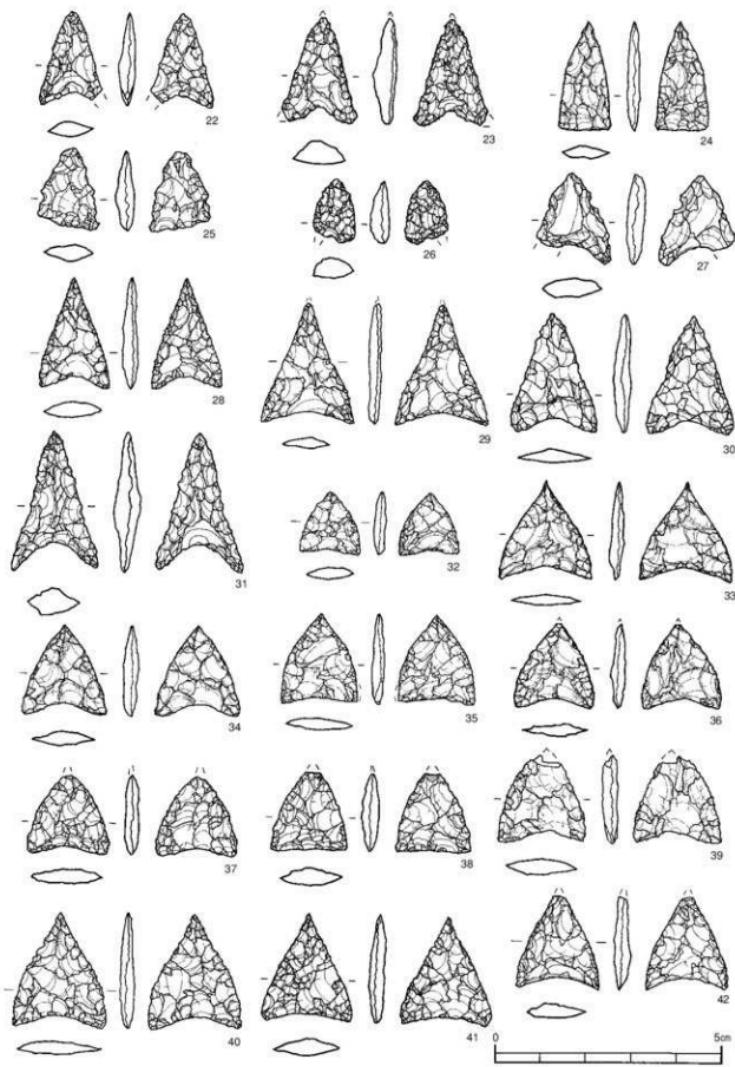


第196図 縦断別出土状況図 (6)





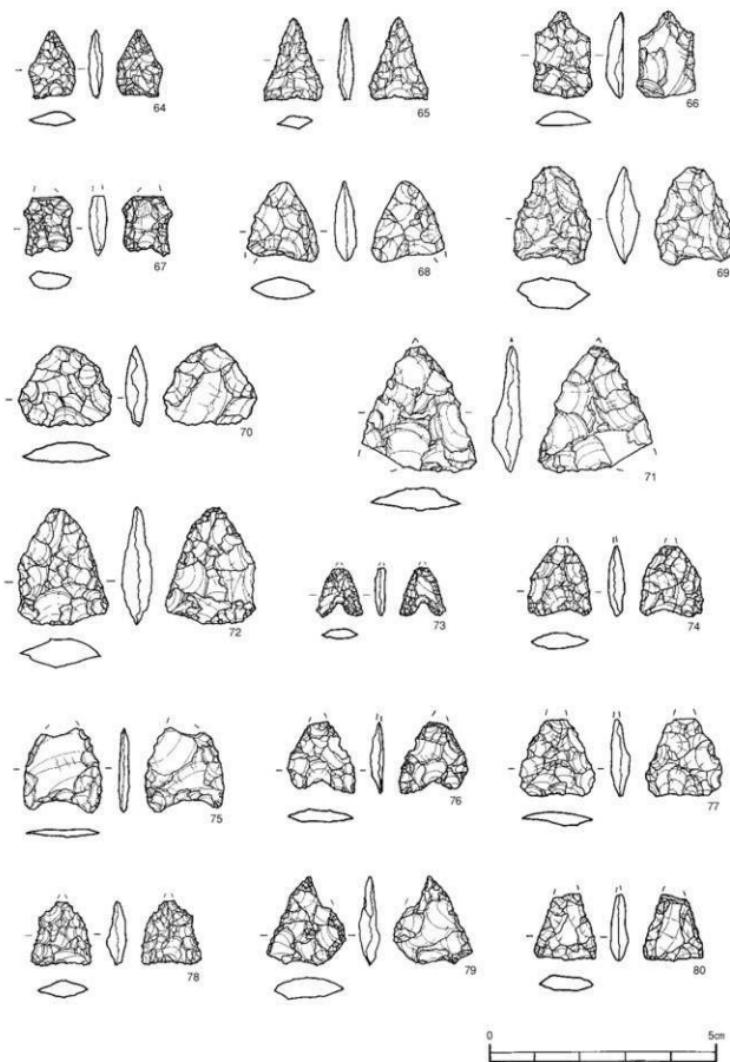
第197図 石器実測図 (1)



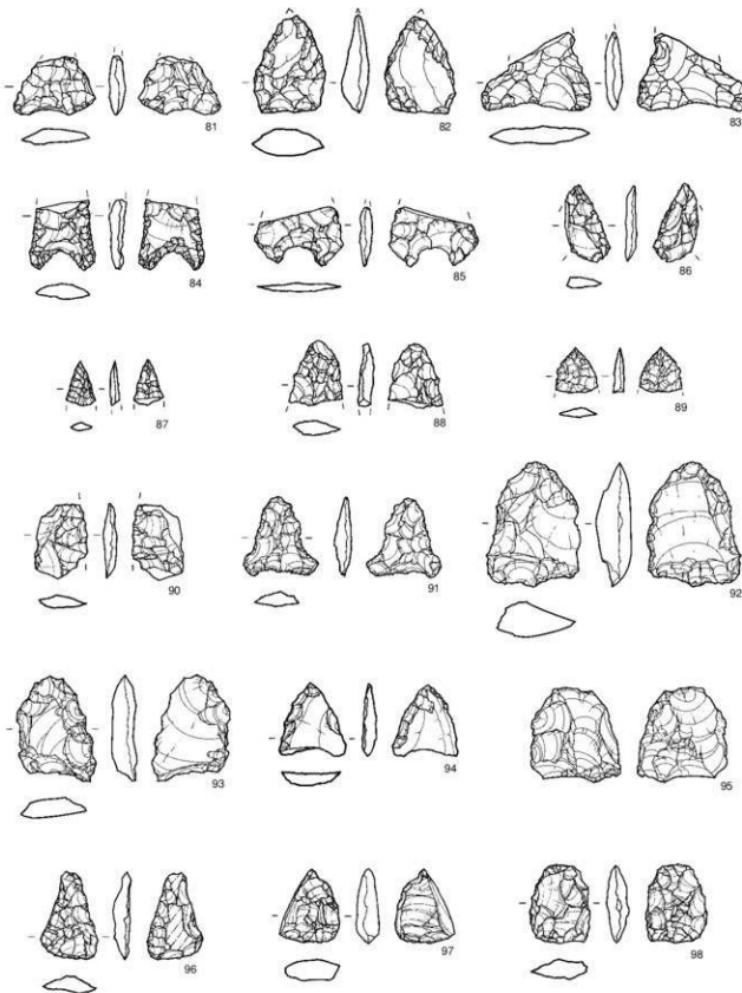
第198図 石器実測図 (2)



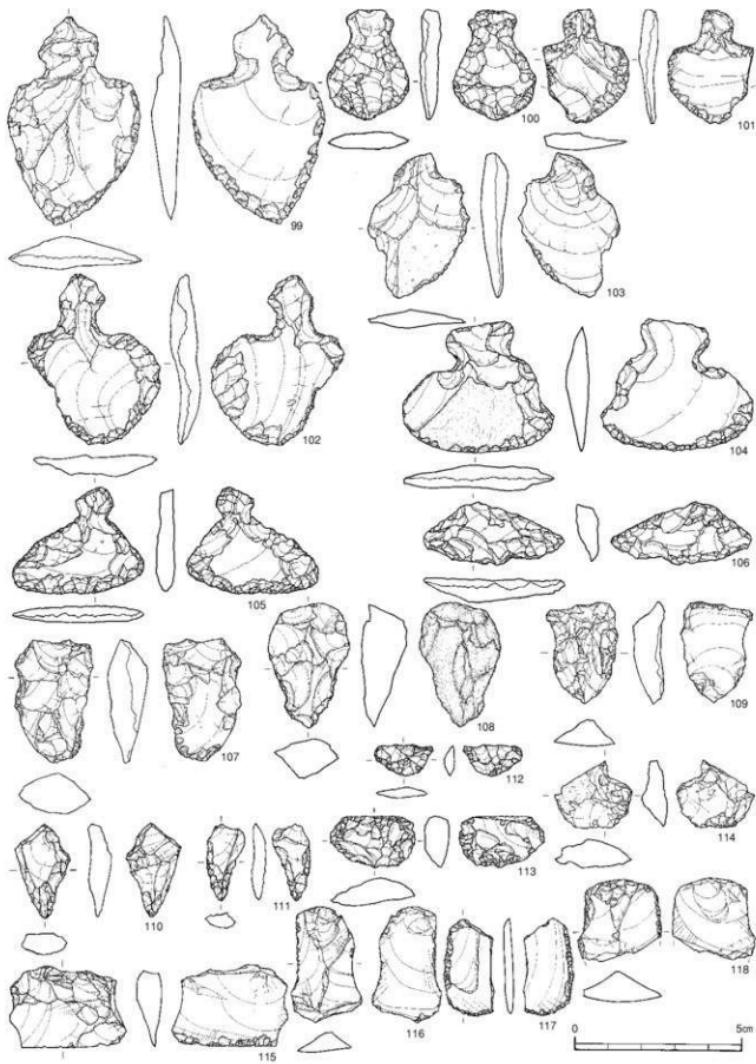
第199図 石器実測図 (3)



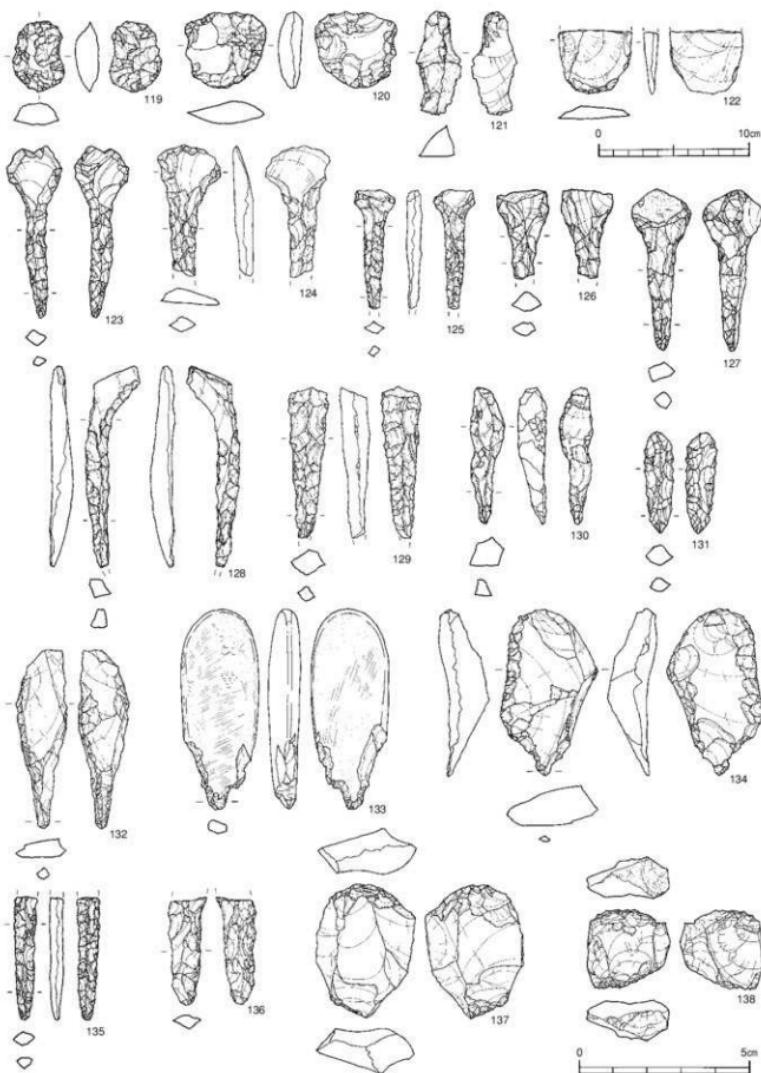
第200図 石器実測図 (4)



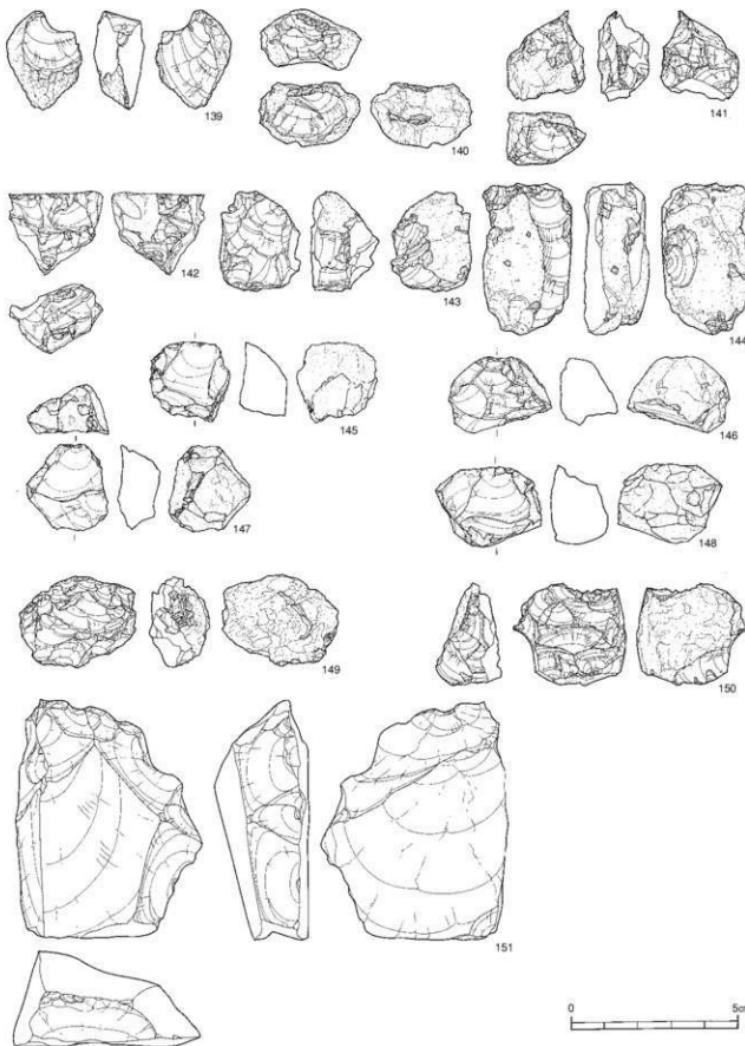
第201図 石器実測図 (5)



第202図 石器実測図 (6)



第203図 石器実測図(7)



第204図 石器実測図 (8)

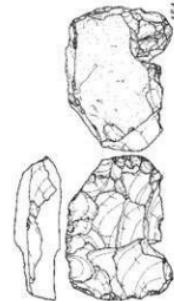
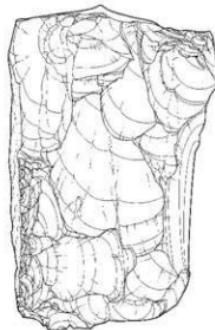
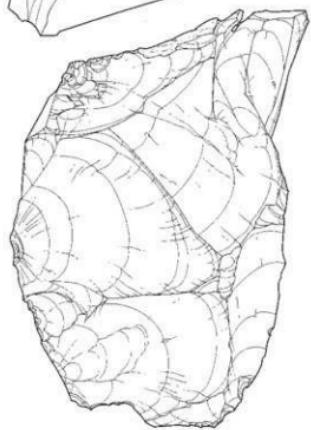
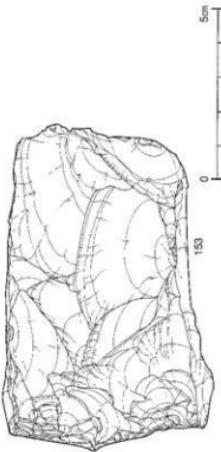
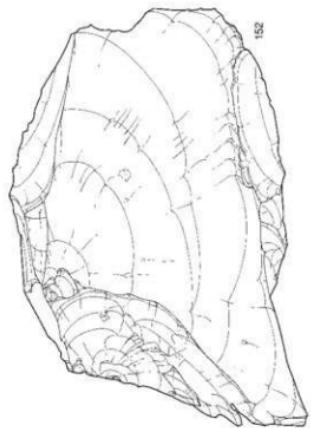
5cm

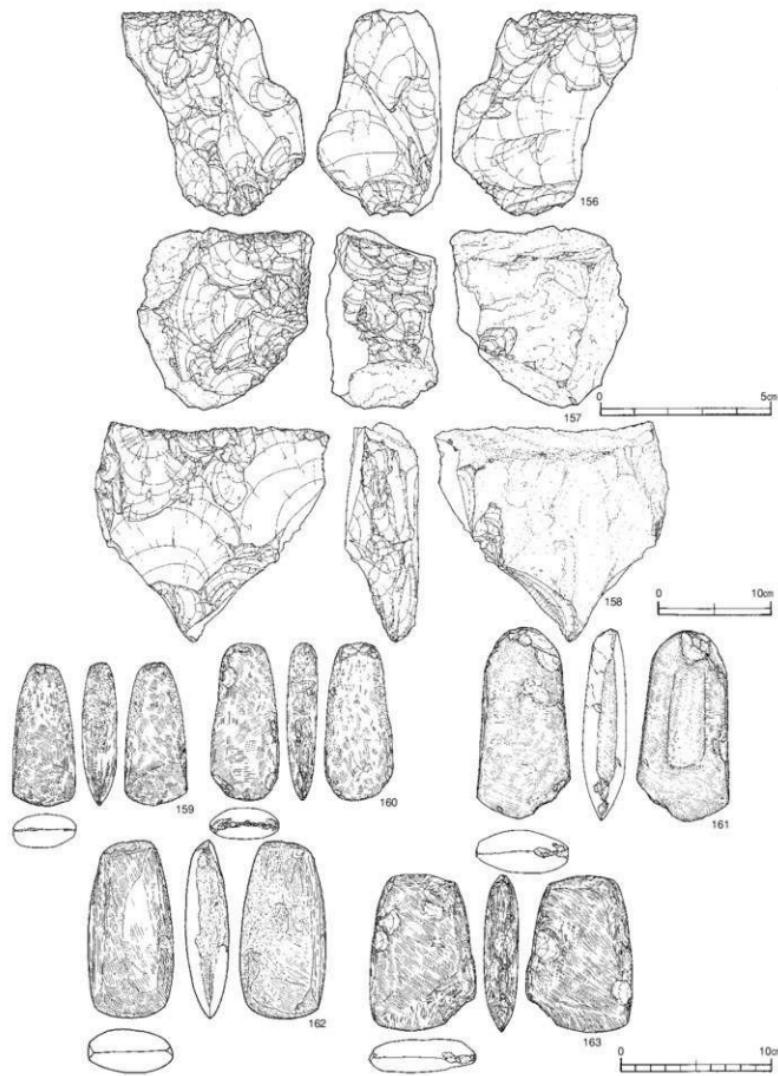


155

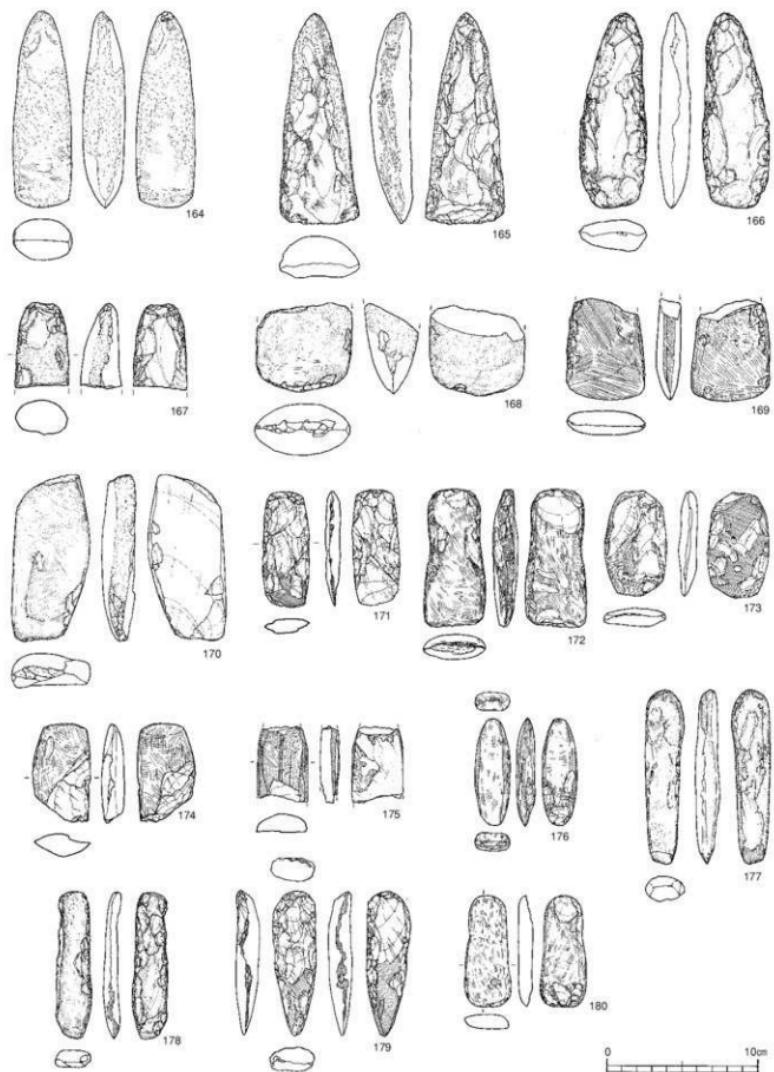


第205図 石器実測図 (9)

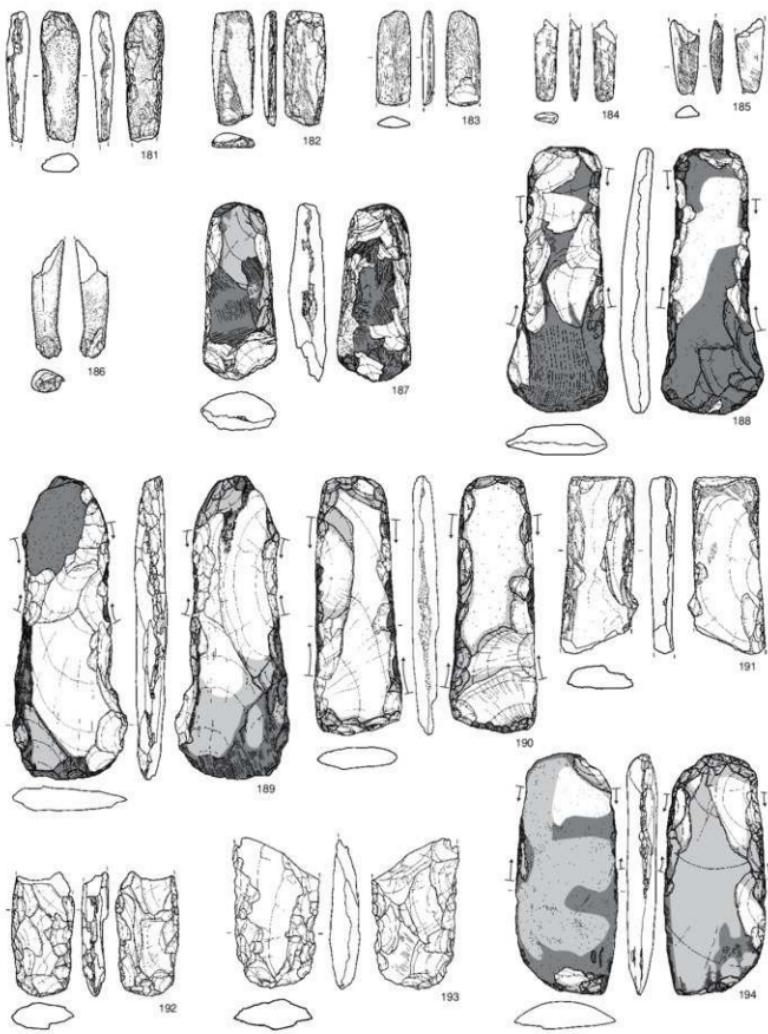




第206図 石器実測図 (10)



第207図 石器実測図 (11)



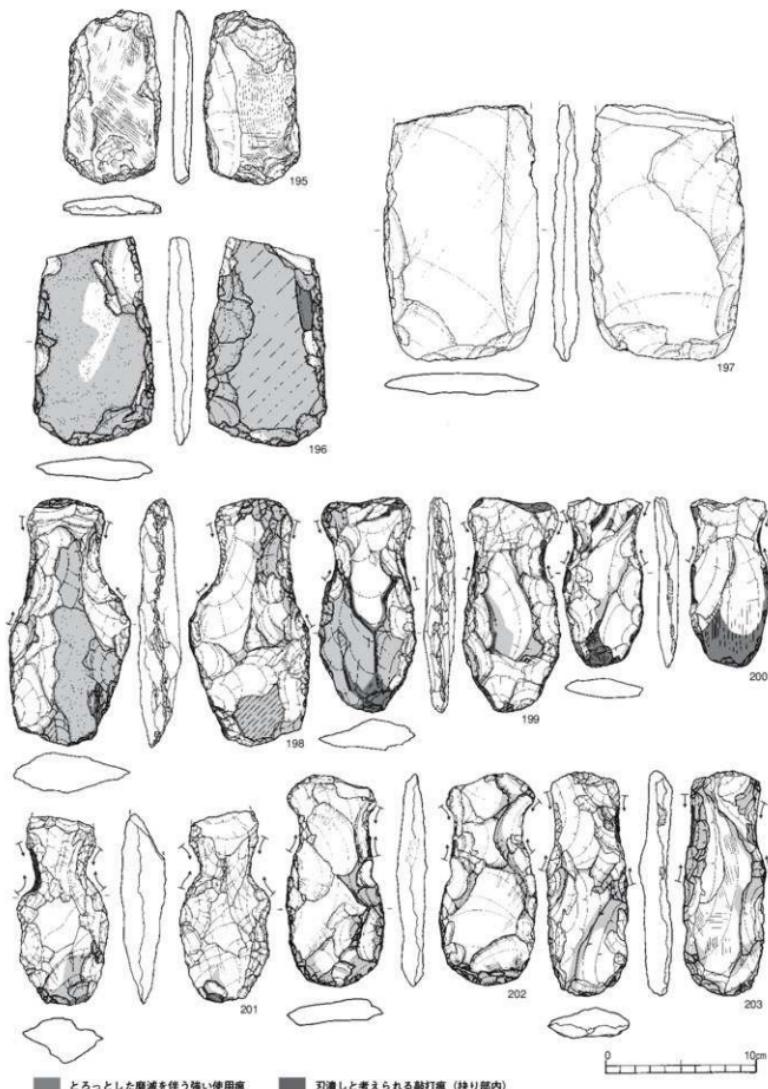
■ とろつとした塵滅を伴う強い使用痕

■ 光沢感を伴う弱い使用痕

■ 刃溝と考えられる敲打痕（挟り部内）

↑ ↓ 挟り部作出と考えられる範囲

第208図 石器実測図 (12)



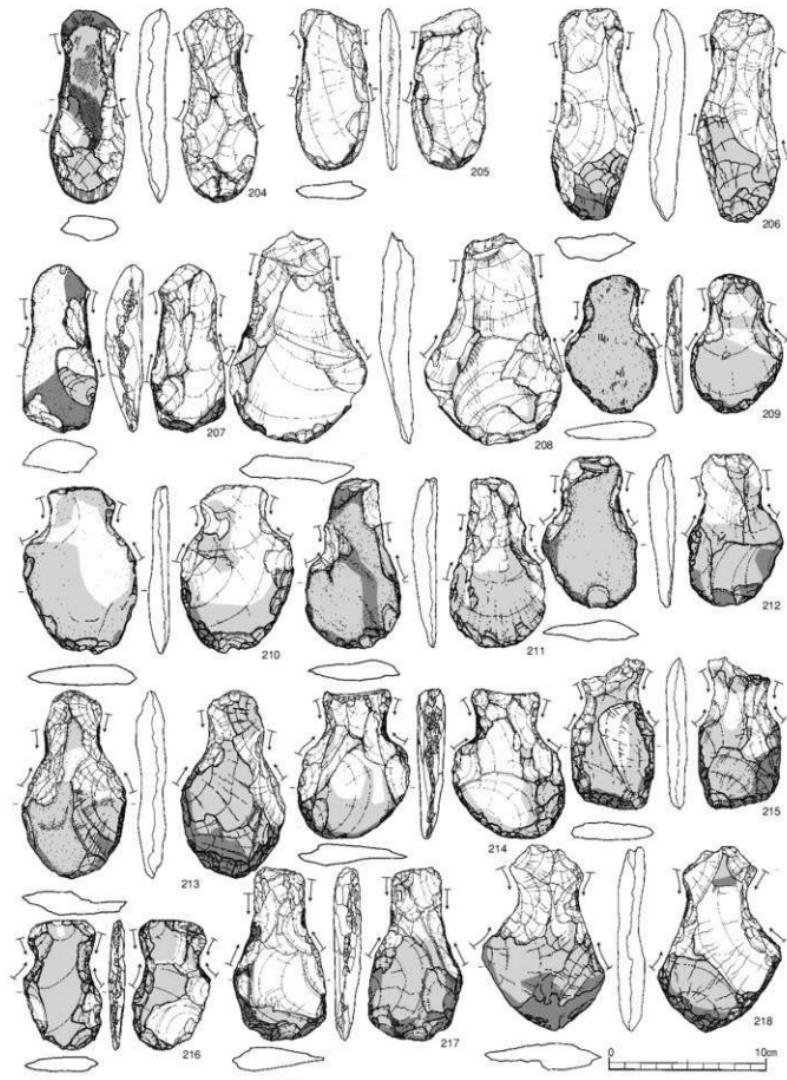
■ とろつとした塵滅を伴う強い使用痕

■ 光沢感を伴う弱い使用痕

■ 刃溝とを考えられる敲打痕（抉り部内）

↑ 抜き部作出と考えられる範囲

第209図 石器実測図 (13)



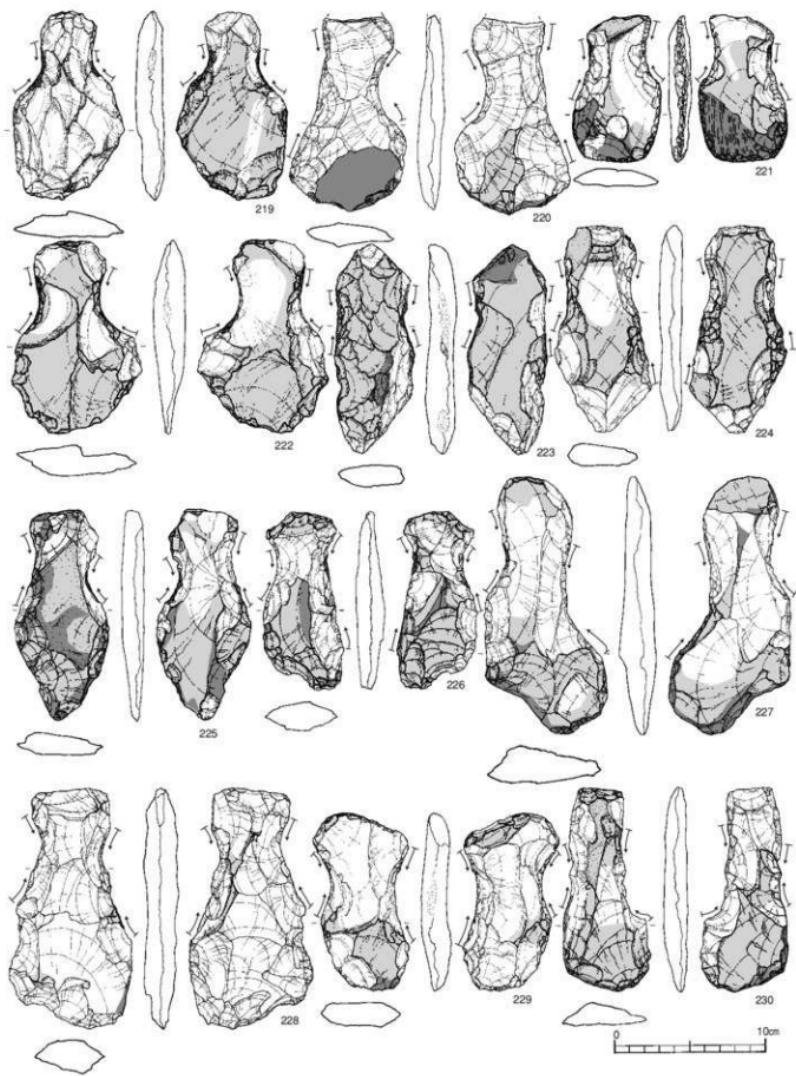
とろったした磨滅を伴う強い使用痕

光沢感を伴う弱い使用痕

刃溝しと考えられる敲打痕（挟り部内）

↑ ↓ 挟り部作出と考えられる範囲

第210図 石器実測図 (14)



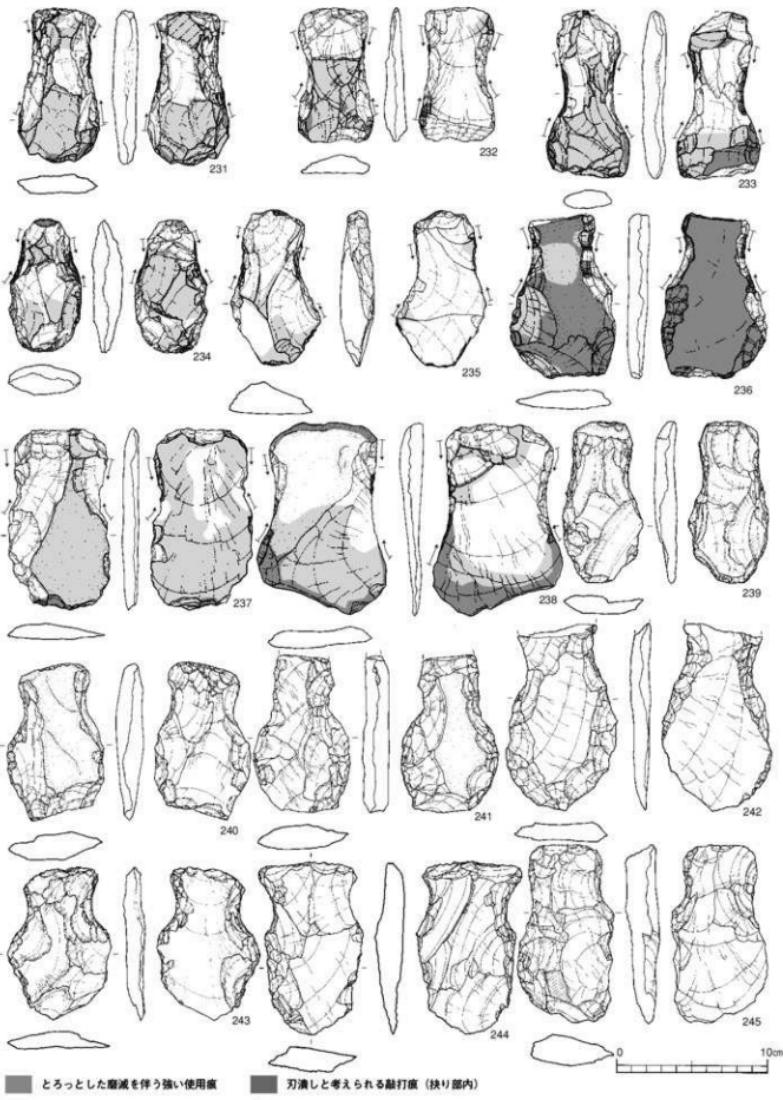
■ とろったした瘤減を伴う強い使用痕

■ 光沢感を伴う弱い使用痕

■ 刃溝しと考えられる敲打痕（抉り部内）

↑ 扱り部作出と考えられる範囲

第211図 石器実測図 (15)



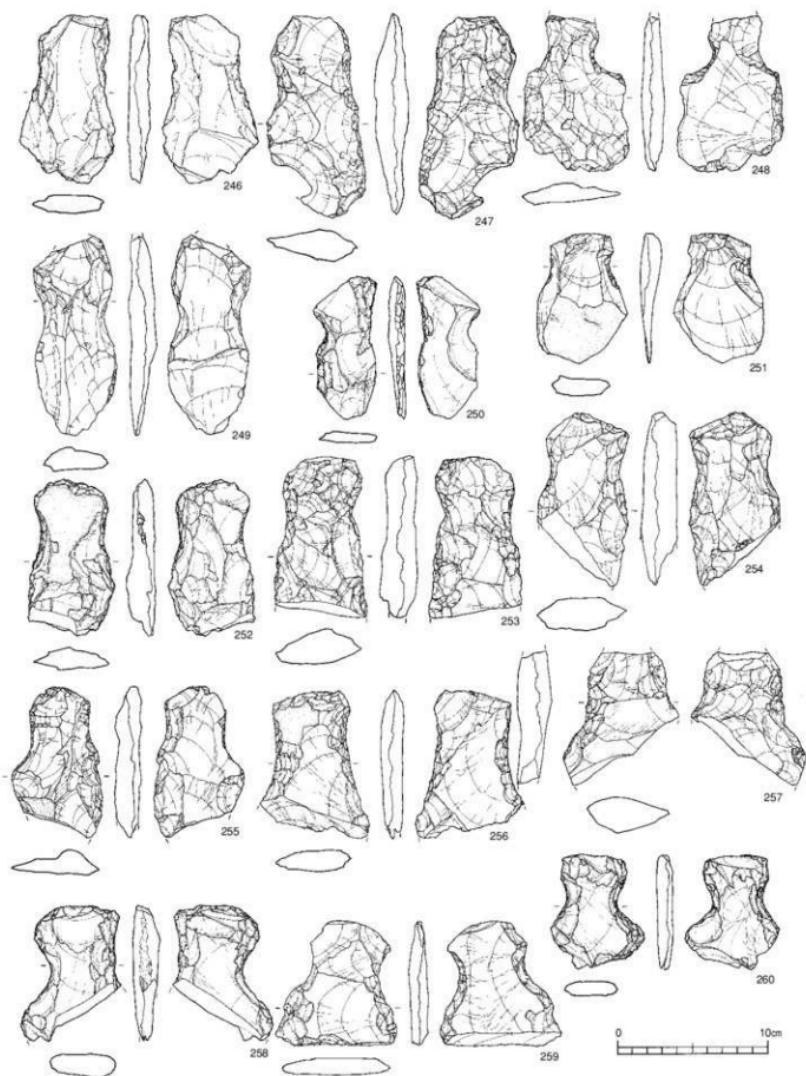
■ とろっとした磨滅を伴う強い使用痕

■ 光沢感を伴う弱い使用痕

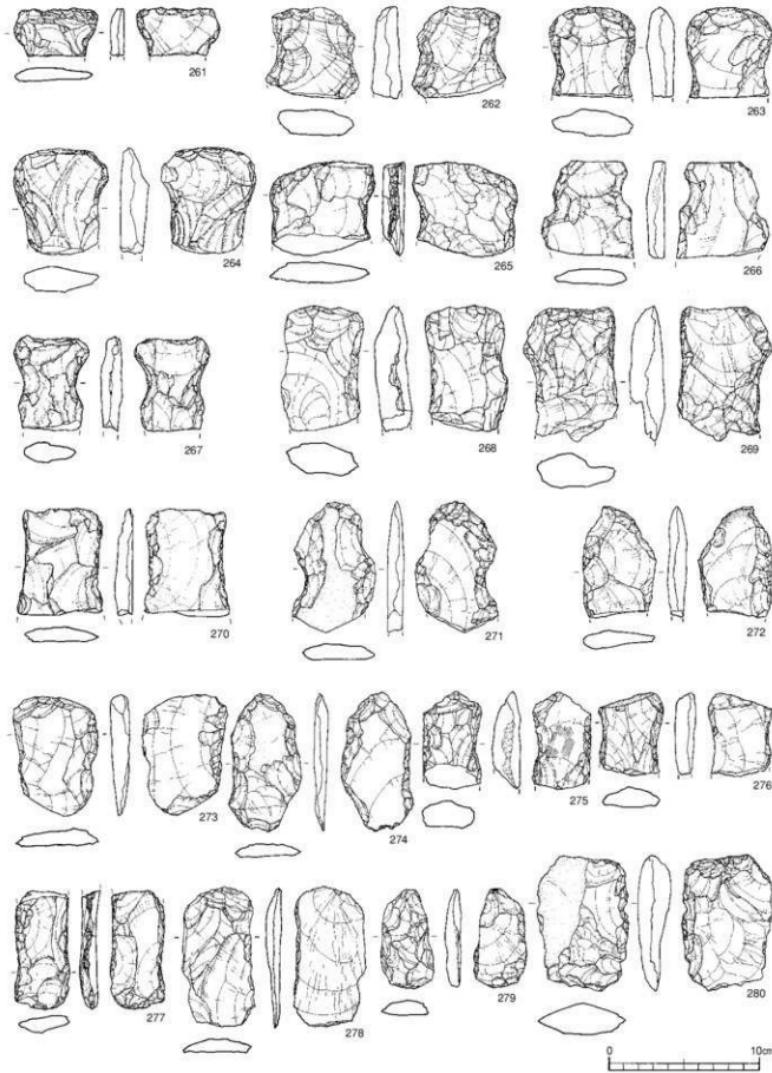
■ 刃溝とを考えられる敲打痕（抉り部内）

↑ 抜り部作出と考えられる範囲

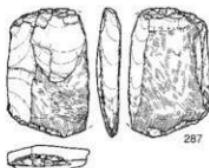
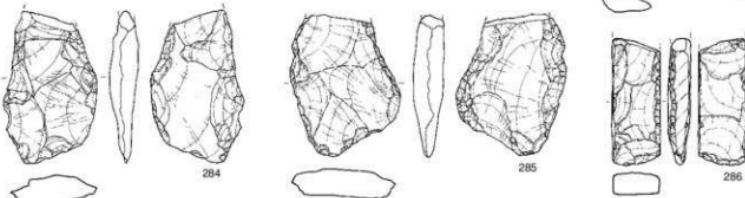
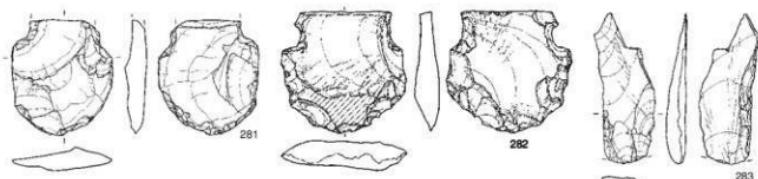
第212図 石器実測図 (16)



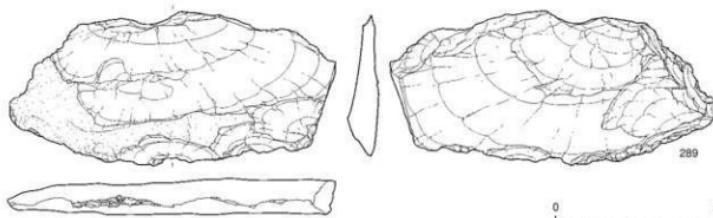
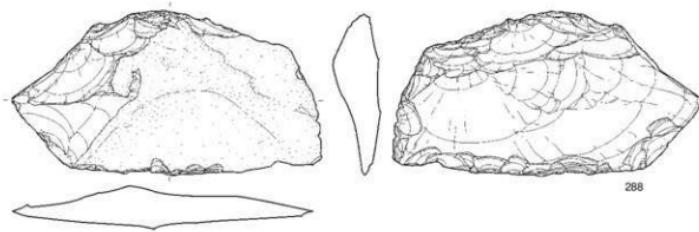
第213図 石器実測図 (17)



第214図 石器実測図 (18)



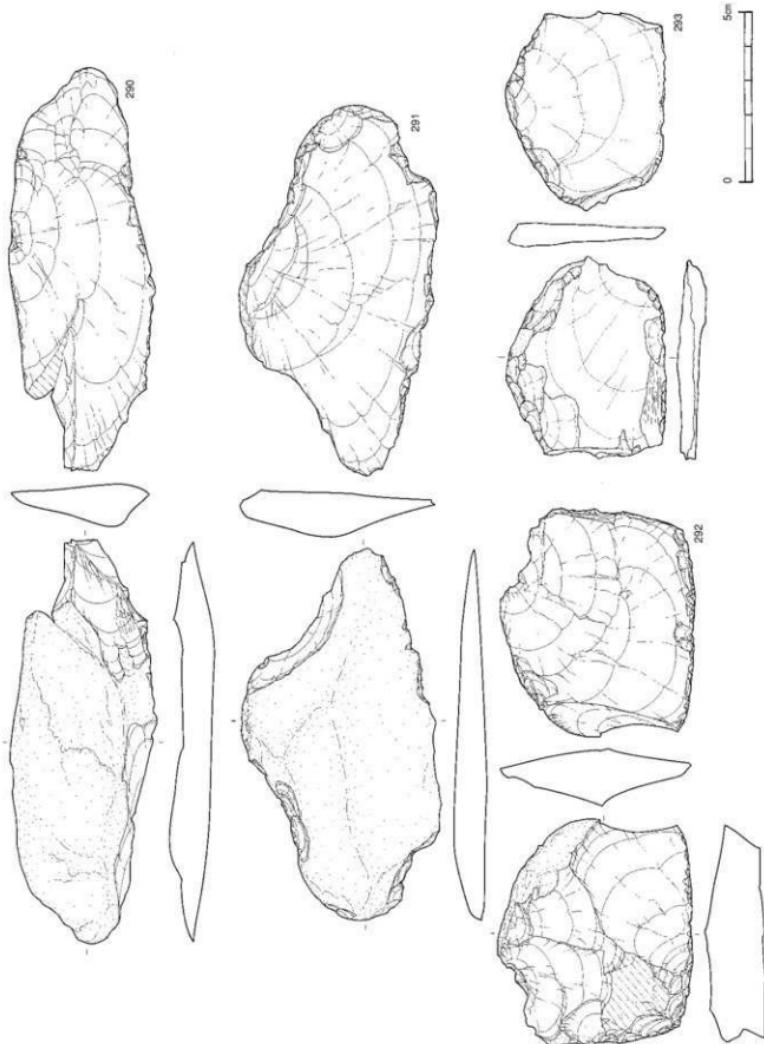
0 10cm

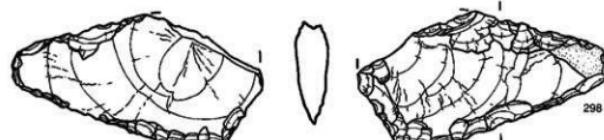
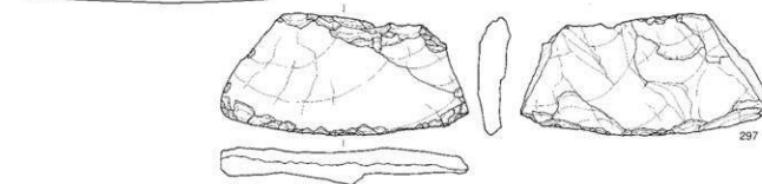
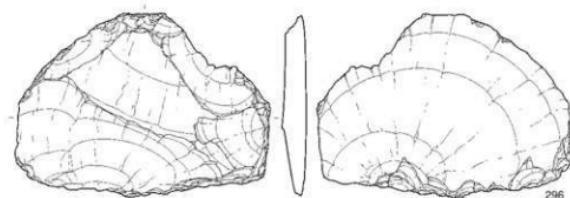
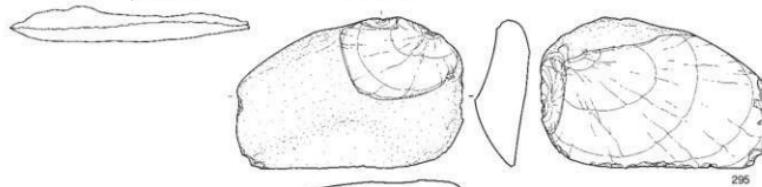
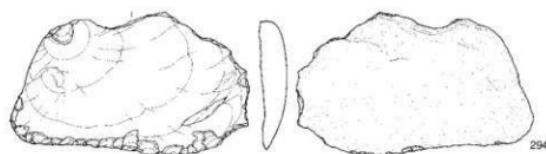


0 5cm

第215図 石器実測図 (19)

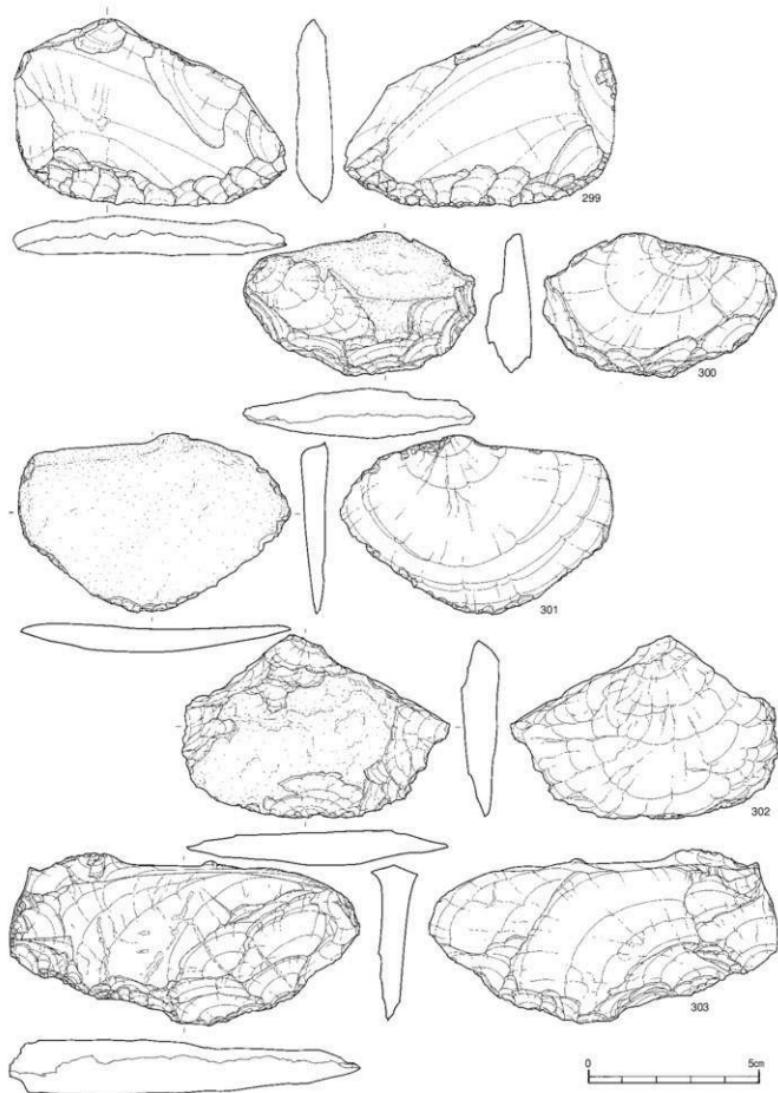
第216図 石器実測図 (20)



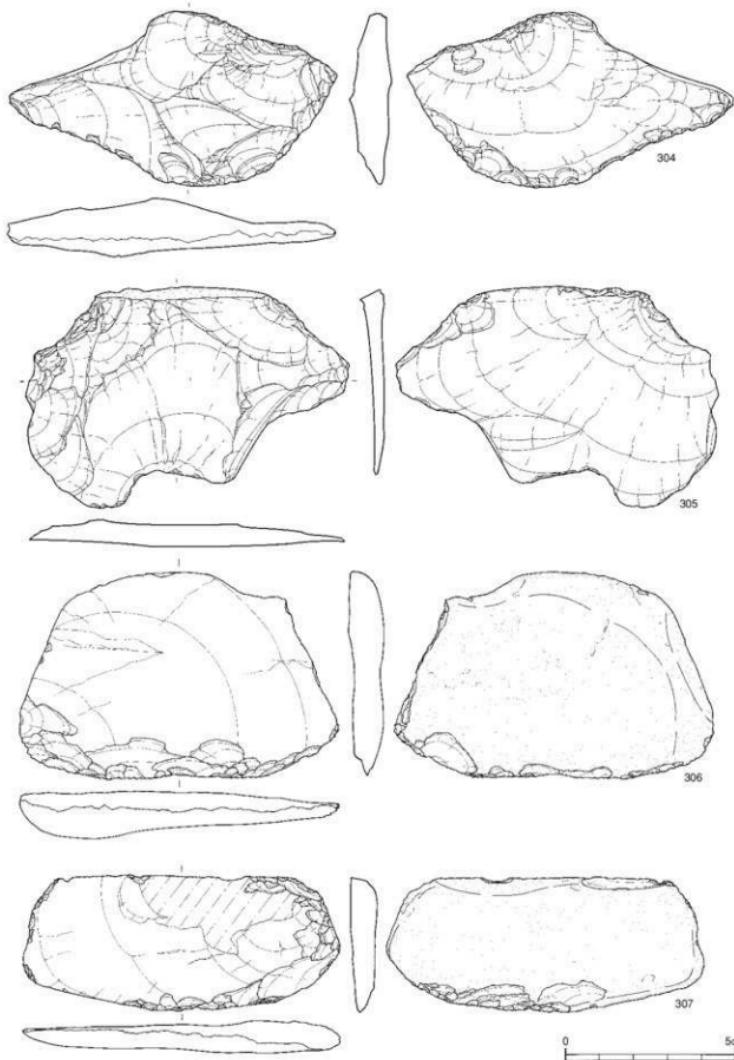


0 5cm

第217図 石器実測図 (21)



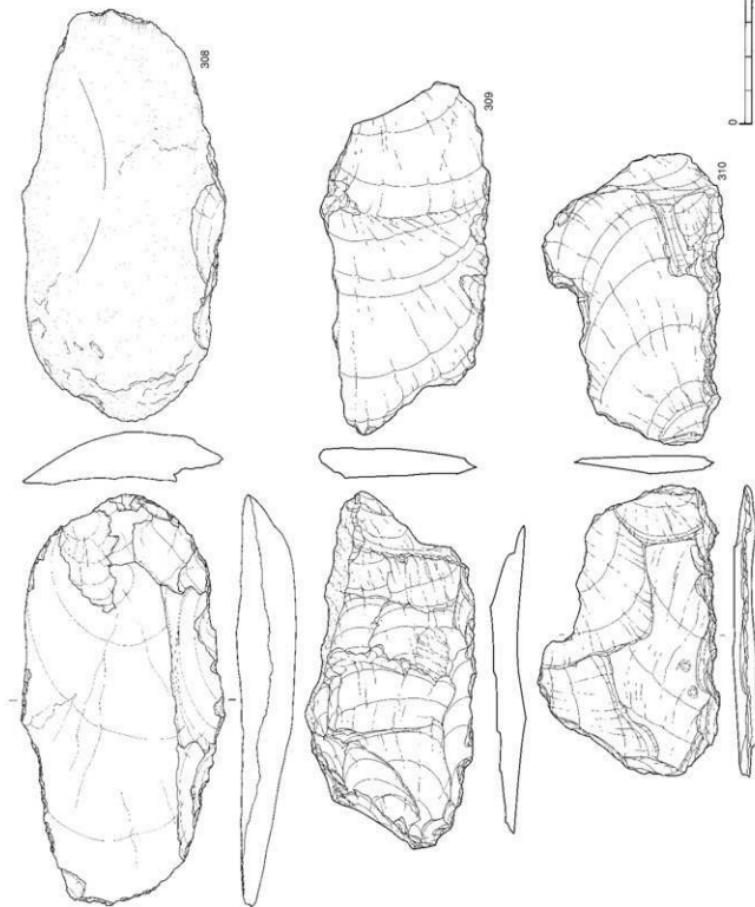
第218図 石器実測図 (22)

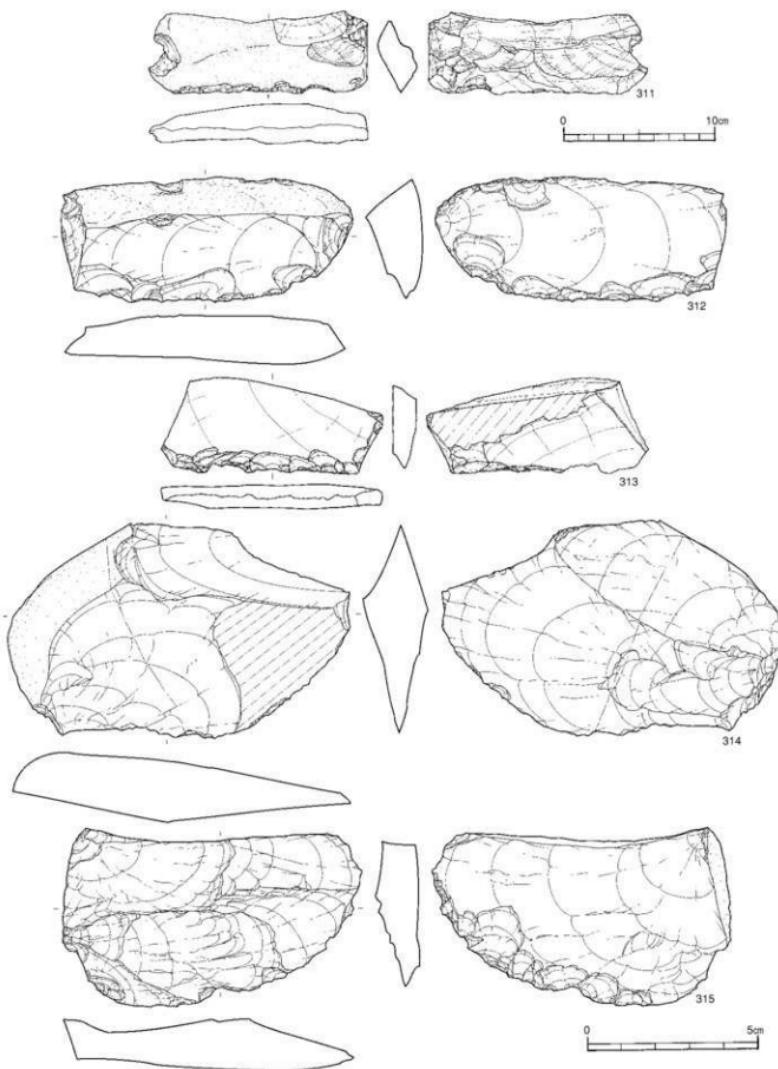


第219図 石器実測図 (23)

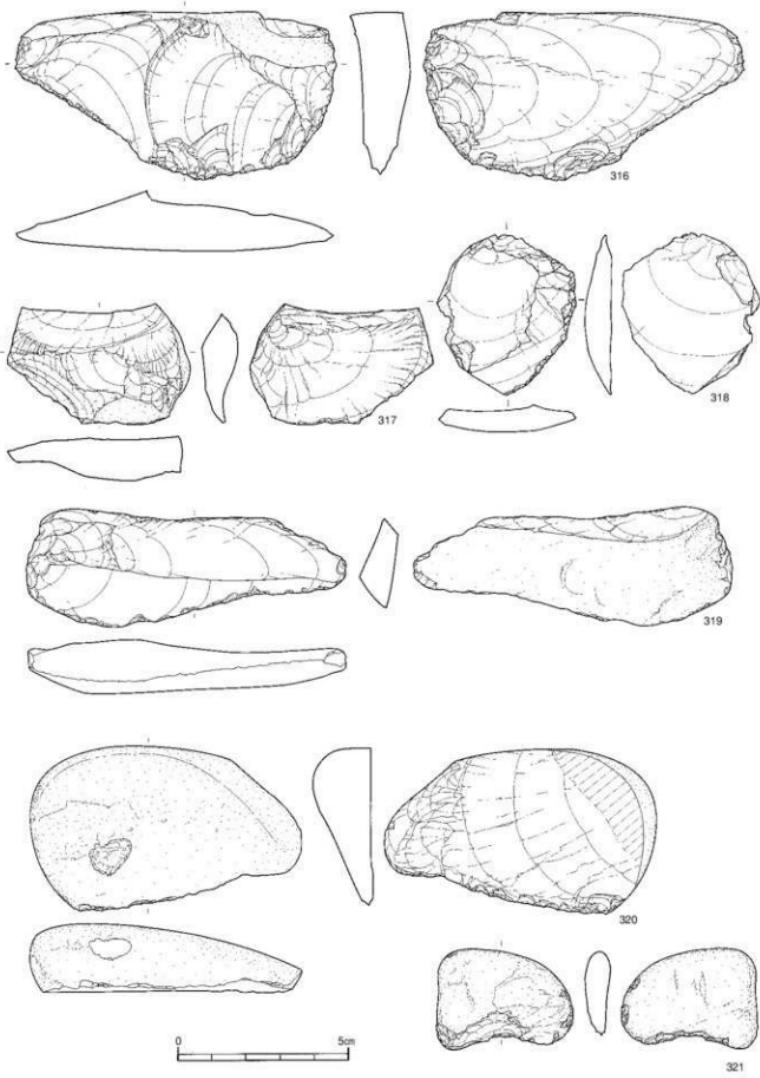
5mm
0

第220図 石器実測図 (24)

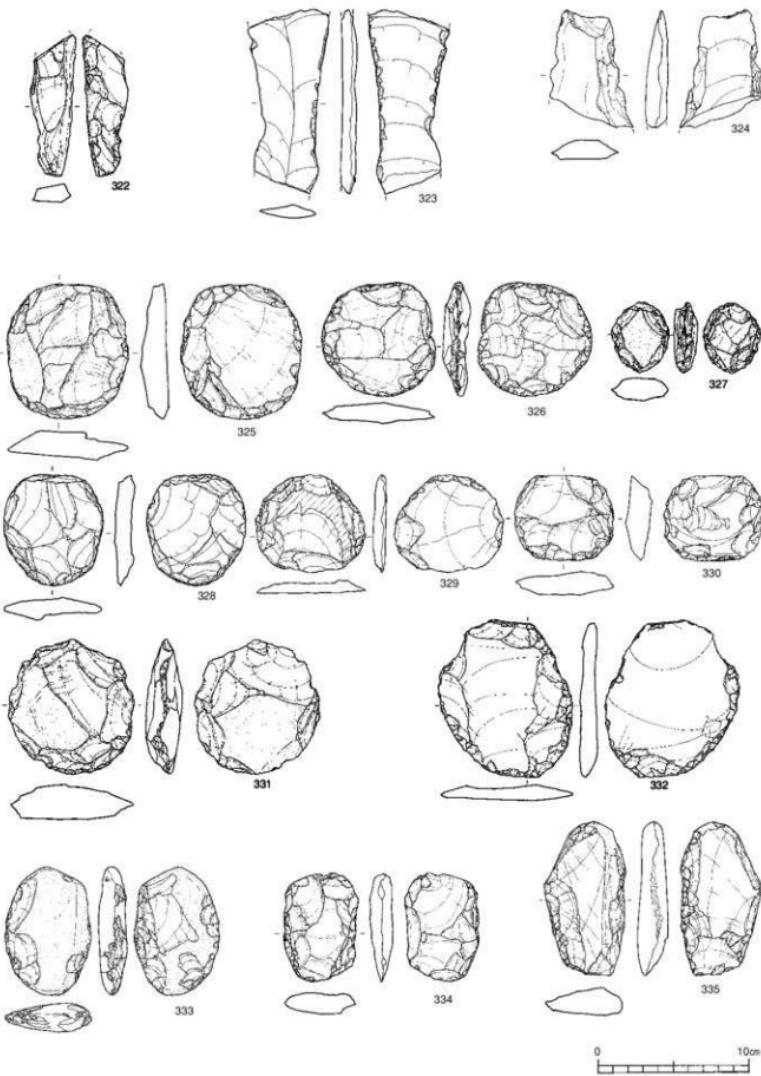




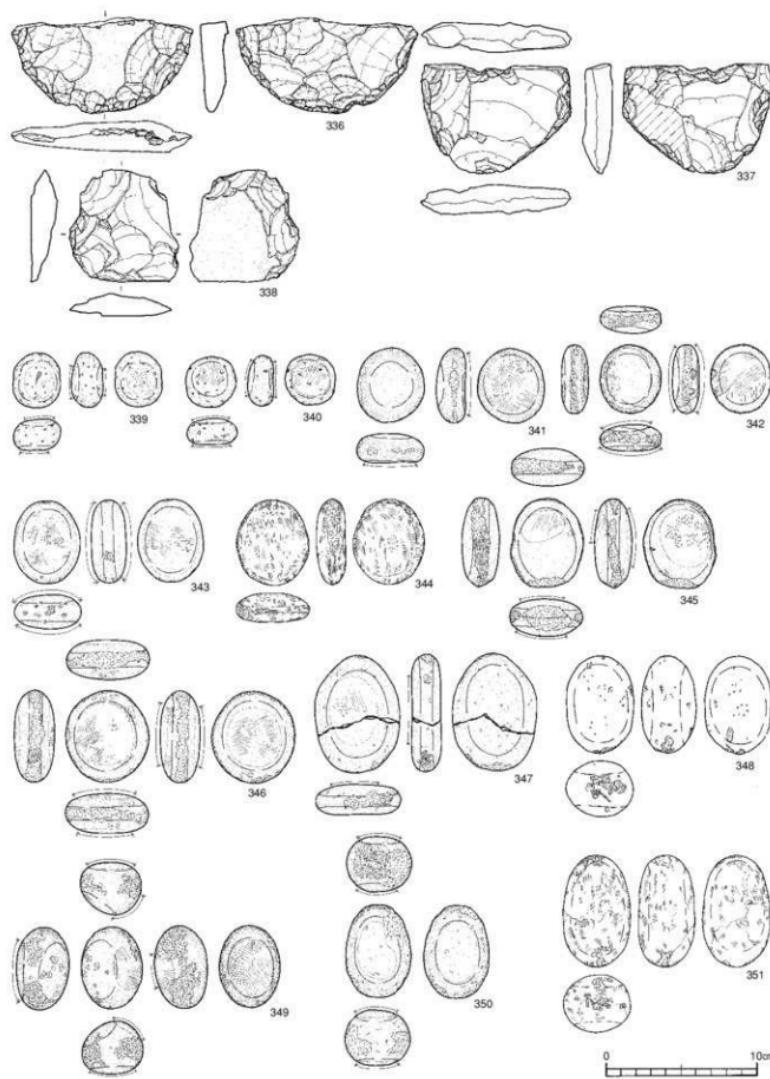
第221図 石器実測図 (25)



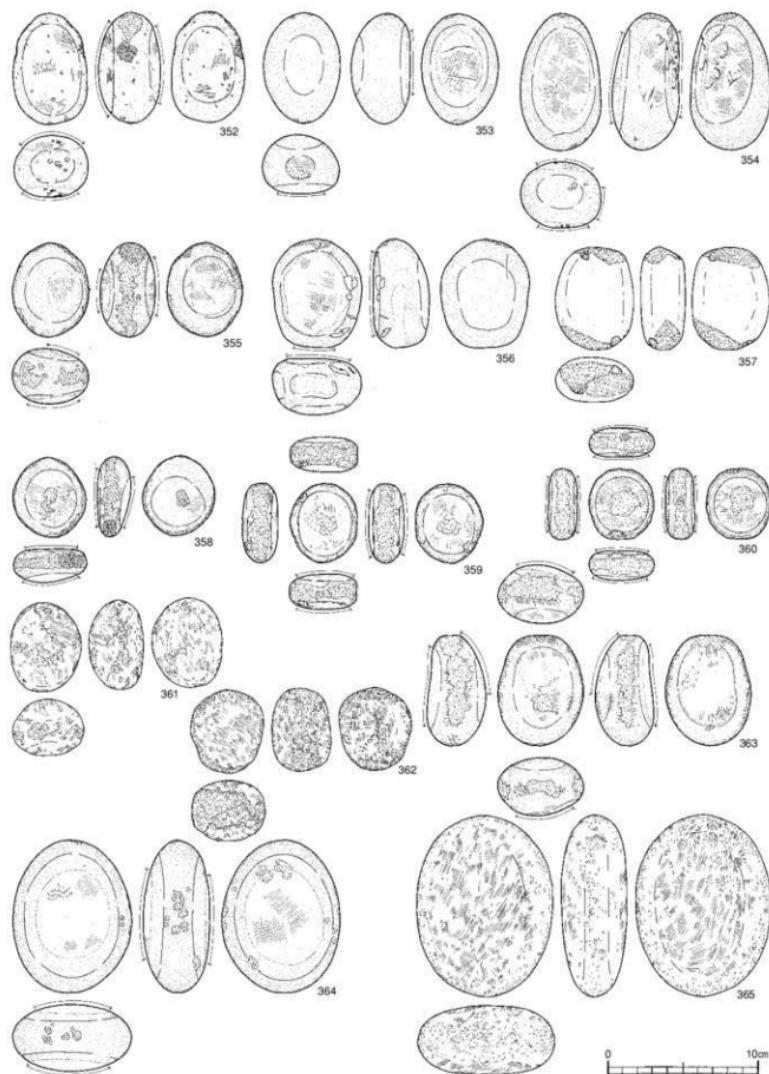
第222図 石器実測図 (26)



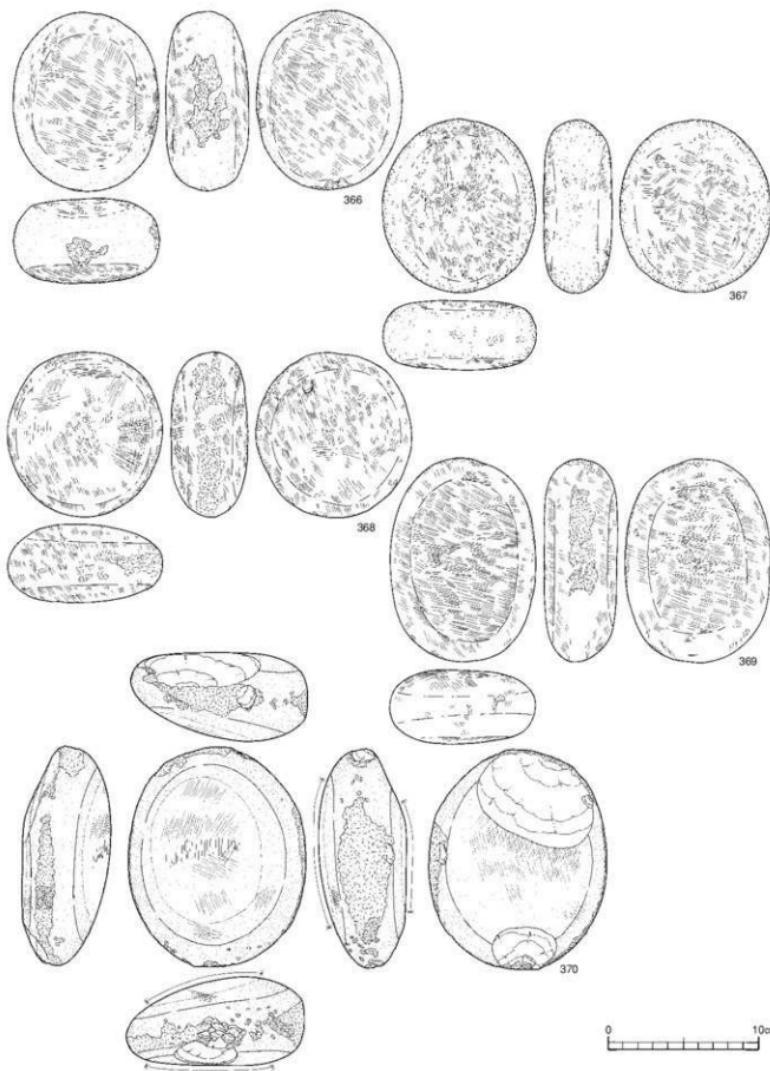
第223図 石器実測図 (27)



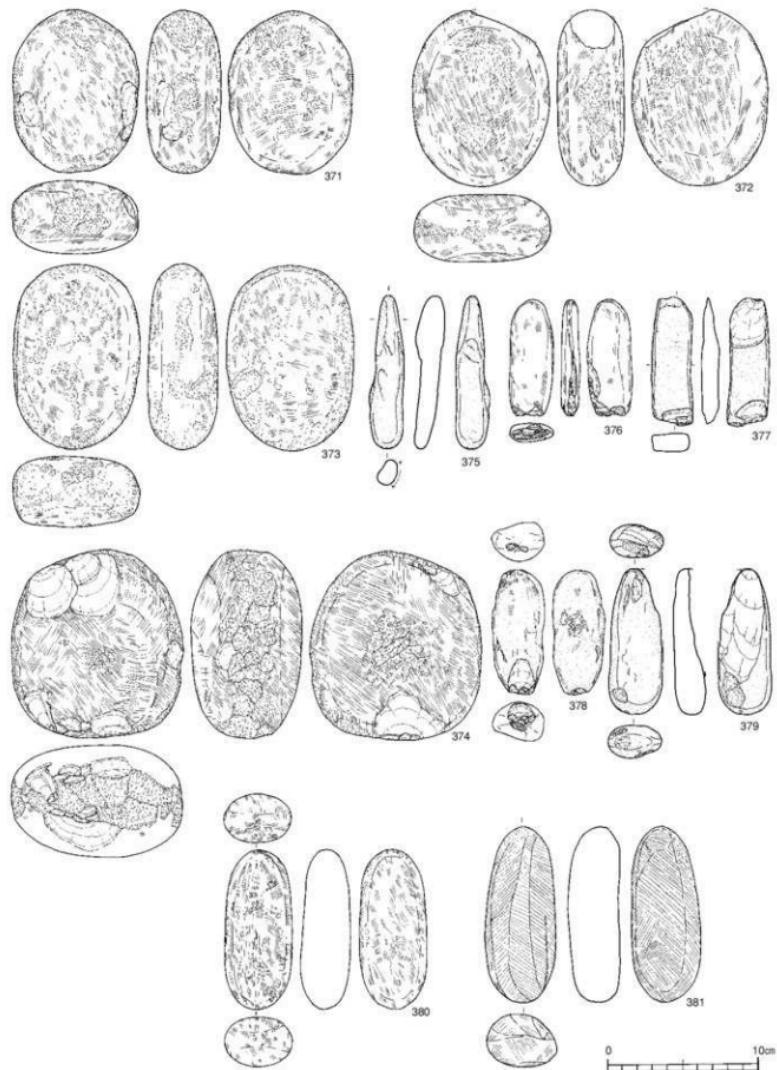
第224図 石器実測図 (28)



第225図 石器実測図 (29)



第226図 石器実測図 (30)



第227図 石器実測図 (31)